
IRREGULARS (旧2008年試作版)

陸一 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IRREGULARS（旧2008年試作版）

【Nコード】

N8700F

【作者名】

陸一潤

【あらすじ】

リメイク版のため、こちらをプロトタイプとしました。リメイク版では印象がやや変わりますが話は特に変わりません。名前の通り『物語』を『管理』し、その世界の筋書きを守る『物語管理局』に所属する毒舌美少女・エリカと猪突猛進・晴光、生真面目なビスの三人とその相棒『本』達。新設の部隊員に抜擢された三人が選ばれた理由は？共通点とは？そして対する『筋書き』に存在しないモノ、『異端者 イレギュラー』の存在は？

総て（前書き）

同じ景色は違う人間だから見られないけれど、出来るなら君の隣で
少し違う景色を見させて

共に戦うときは背中を任せるから

永遠に、は無理だけれど、せめて今だけは君と在りたいのです

総て

世界を壊すのは思っている以上に簡単だ。

それは強固な殻に守られ、一見砕けることの無いダイヤモンドの塊である。

しかしその中心にある核を少し突けばどろりとしたものが溢れ出し、とたんにその殻がはじけるほどにそれを満たしていくのである。計算して突けば、ダイヤモンドでさえも簡単に砕けるのだ。

さて、その核は世界のどこに、どのような姿で存在しているのだろうか。

それは思いがけない形で知ることが出来る。

それは君のすぐ近くにあるのだ。

あるいは君の枕元。

あるいは四角い箱の中。

あるいは君の頭の中。

世界を壊すのは思っている以上に簡単なのだ。

強固な殻も、たった一つの異分子でたやすく砕けてしまうのだ。しかしそれを守ろうとする者も確かに存在するのも事実。

君はどちらを選ぶのだろうか。

僕はそれが気になってならない。

（この作品についての注意）

この作品ページを開いてくださり、有難うございます。

俺は作品内に作者が登場するのは邪道派なので、『雰囲気壊したくない！』という方は飛ばしてくださって結構です。でも後で一読お願いします。

よろしいですか？

まず、お分かりの方（主にブログから来た方）、または　ここまで感じている方もいると思いますが、この作品は『夢小説』というジャンルの二次創作が下地になっています。

『それはちょっと』と思った方！ちょっと待ってください！！（土下座）

コンセプトとして、『二次創作（または夢小説）にしたい世界観を！』と思つて出来上がった話で、これは完全オリジナル、一次創作です。

でも特殊用語として、『トリップ』『クロスオーバー』等の特殊用語を使用します。

ちよつとアレなこじつけ（設定）もあります。（逆ハーとかの）

『夢小説』というジャンルはとてもデリケートなジャンルなので、賛否両論あるだろうと思いますが、先入観　無しに読んで欲しいと思つています。

もちろん作者は二次創作・夢小説・同人的要素含で 推奨派です。
『やったるぜー』という方はいけいけどんどんやっちゃって下さい。
パクリは駄目ですが、作品の台詞等の引用もおっけーです。（地の
文は駄目ですよ！）

ブログで公開しているイラスト等も、そのままは駄目ですが、ネタ
としてのトレス（投稿映像サイトでのアレとかコレとか）、等好き
に書いて（描いて）頂いて結構です。まんまパクリで投稿などやら
れた場合は更新停止もありえます。

『この作品借りたいです』という方は、報告していただければいつ
でもオーケーです。

長々と失礼いたしました。
ではお楽しみください。

筆）

（09年4月14日・加

総て（後書き）

なお、序章があまりにも長いため、閑話と白銀の童子編だけでも本編に進めるようになっております。

序章 漆黒の魔女（前書き）

裏話・設定・ちょっとアレな話等はブログ、【幻空帖】（<http://ameblo.jp/ume-6/>）にて公開中。

序章 漆黒の魔女

【異端者・一】

無知は時に罪になる
知も時に罪になる

背負う罪はどちらも同じ

私は知ることを選んだ

知らないことでもう後悔したくは無いからだ

無知を選ぶのを恥じることとは無い
知を選んだことに胸を張るな

これは選択

お前の道を選んで進め

道は違えど、必ず後悔はするのだから
より深く誓いを立てられる方に進め
揺ぎ無いほうに進め

前を見なければいけない、なんてことはないのだから

（『日和日記』知の神アラン）

秋の収穫も終わり。

今年は豊作だ、とコックの父が漏らしているのをユーリは朝食の席で聞いたばかりだった。

ぐるりと森に囲まれた小さな村で、たった一つの定食屋の一人息子であるユーリは今年の春10になった男の子だ。

今日は常連の宿屋の女主人アリエまでの配達のお遣いといいでに、宿屋でお客に出す料理の注文を頼まれていて昼あたりからバタバタしていた。

そう、確か17で宿屋を切り盛りする村のアイドル的な存在の美少女に頬を赤らめて、少しご機嫌で帰宅したのだ。

そして気づけばベットのの上だった。

どうやら寝入ってしまったらしく、唐突な外の騒ぎに眼を覚ました。うつ伏せになった腹の辺りに読んでいた本がよれよれになって下敷きになってしまっていて少し痛い。

頭の寝癖を撫で付けてから外に出る。父は自分と同じように外に見に行ったのか。家にはいなかった。

扉を開けると冬も近いにもかかわらず、ボウツと暖かい強風がユーリを襲う。

まるで春のようだ。

ちよつとだけ眼を見開いてあたりを見渡し、右往左往する顔見知りのご近所さんたちが目に入った。

「森まで火が回るぞ!」「切り倒せ!」「ルーウインの家まで移ったぞ」「水を!」「川からもってこい!」「男はバケツを持って川に走れ!」「消火消火!」「女子供老人は水車小屋に!」

あ、火事か。

無感情にそう思った。脳が凍ってしまったかのように動かない。

「出どころはどこから!？」

「宿屋だよ!!」

ジュツと音を立てて氷が熱気で溶かされた。

走る。

足を左右に動かすだけのことがこんなにも億劫だとは。

熱のこもった風とあいまって砂埃が舞った。心なしか空気が埃っぽく感じた。

火に包まれているであろう宿屋はまだ見えなかったが、どんどんあがる気温に汗が流れる。

五メートルくらい先の角からちらちら赤い光が見えた。

「つつわあ……」

あかいせかい。

本で見た、地獄にある火の世界。

赤い光は強すぎて、その前で右往左往する人型は黒い影に見えた。火の中で許しを請う咎人だろうか。煙はもうもと上へと上っている。

綺麗過ぎて怖い。慌ててその考えを打ち消した。

よくよく見れば踊る黒い影は火を消そうと奮闘する顔見知りばかりだった。見たことも無いほど顔を歪めて動き回っている。

「ねえ！！」

ぱつと近くにいた一人の年上の少年が振り返った。だがこちらを向かれると顔が真っ暗でよく見えない。

「大丈夫なの！？」

少年は「大丈夫」を自分への心配か火事への心配か怪我人の心配か量りかねたようだった。

「……えーと、」

少年は首をかしげて少し汗をぬぐった。

「あー……うん。大丈夫だよ。火はもう消えるし。絶対大丈夫」

男とも女ともつかない、少し高めの声が赤い世界に不釣り合いな明るい声で朗らかに言った。

「君の村は大丈夫」

まるで自分がこの村の人間じゃないみたいな言い方だ、と思った。
「あなたは旅人さん？」

「うん。仕事。連れと二人でね」

ああやつぱり。雰囲気で、笑ったんだろうなということが分かった。

「連れを待ってるんだ」

「置いていかれたの？」

「まさか。彼女は僕のパートナーだし。仕事って言ったでしょ？」

ちらりと少年は火を見やった。赤い光に照らされて少年の横顔が少し見える。前に見た、東から来た行商の人に少し似ていた。

「僕らはこの火を消しにきたんだ」

ぽつり

雨が降ってきた。

ラースは苛立っていた。

火が消えないのだ。先ほどから雨が降り出したというのに一向に衰えを見せない。

選挙で村長になって今年で8年。もうそろそろ代替わりの頃合だ。

こんなことはまだ若いころに一度見たつきりで、まさか自分が村長の間に起こると思わなかった。当時は復興に2年かかった。時代は大分便利になったが、今回はどれだけかかるだろうか。

頭をかきむしりたいのを我慢しながら指示を出すために走り回る。

ああ、走ったのなんて何年ぶりだ！？

空はとつくに暗い。

爆発があつてから何時間たっただろうか。日の出はまだか。否、意外と二時間ほどしかたっていないのかもしれない。

そつだ爆発だ。

何でこんなちつぽけな村で爆発なんか。

しかも出たのはあの宿屋だ。17の女の子が一人で切り盛りする宿屋。幸い出ていて助かった彼女が言うには、今日は一人も客はいなかったという。

何故？

「魔法の匂いだ」

喧騒の中、するりと低音が耳に入った。

驚いて見ると、いつの間にそこにいたのか、真つ黒な塊がぼつと立っている。

「ペルーか」

「あラーズさんこんばんは」

村はずれにすむ魔術使いの青年に、ラーズは渋い顔をした。

「お前なんで村まで下りてきたんだ？ どういうことだ」

「なんとなく？ 特に理由なんてありませんよ。 どういうことも何も、この火は魔法でしょ。ちがうんですか」

じろりと見るラーズに、ペルーは鼻先まで伸びた黒髪の間から睨む。
「おれじゃないですからね。めんどくさいしやりませんよ、こういうことは」

「つーか出来ませんし。きつぱり言い切り、ペルーは腕を組んで紅蓮の炎を見やる。」

「ラーズさんもたいへんですよねえ」

空言のようなその言い方に青筋が浮かんだ。

「ポケットと突っ立ってないで消せ！！並以下でもそれくらい出来るだろう！！？」

「嫌だそんなめ　無理無理おれには無理ですよ」
苛立ち、なんてものじゃない。

「無理でもやれエエエエエエエ！！！」

「何やってんですか村長！！油売ってないで手伝ってください！！」
村の若者の一人ががしりとラーズの腕をつかみ、ペルーに身を乗り出していたそれを引き離れた。そのままずると引きずる様に羽交い絞めにして引っ張る。

「ちょ、ちよつと待て、ペルーが・・・ペルーが今、この火は魔法の火だと！！」

慌てていったラーズに若者は眉を寄せた。

「ペルー？あの頭パンしちゃってるペルーっスか？アイツは森の小屋に引きこもりでしょう。出て来やしませんって」

ほらほら今大変なんスから。ずるずる更に引っ張る彼に、ラーズは声を荒げ半ば叫ぶように言った。

「馬鹿かお前は！！もし魔法の火ならただの水ごときに消せるわけないだろうが！！」

漆黒の魔女

雨脚は強まるばかりだった。しかし火は未だ消えない。

「君は一度帰ったほうがいいよ。ここにいても邪魔になる」

有無を言わせない口調だ。

不本意だったが少年が言うことももつともで、ユーリは後ろ髪引かれる思いでそこを離れた。

（もしかしたら父さん帰ってきて探してるかな・・・）

ユーリの家のレストランは幸い風上の方角で、ほとんど火の心配はしなくて良かった。しかしそれも村を囲む森に燃え移ったらわからない。枝が重なるように木が立っているあの森は、さぞよく燃えるだろう。

いつもは暗くてオバケが出そうで怖い森もあの地獄の火に焼き尽くされるかと思うと、このときばかりは少し愛しいものに思えた。

「ただいま」

「ああユーリ！どこ行ってたんだいこんな時に！」

普段は温和な父が声を荒げる。

そのことに申し訳なさど滞りを感じながら声を低くして謝った。

「父さん、村は大丈夫なのかな？」

「心配ないさ。でも、もし何かあっても川岸の水車小屋にいればいい。あそこは避難場所になっているから誰かしら助けてくれる」

話しながらも彼は慌しく荷物をかばんに詰めている。店が焼けても何か元手があればまたやり直すことが出来るかららしい。小さなかばんには、ユーリが小さなころに亡くなった母の写真や大事にしていた宝石類も入っていた。

「これだけは無くすわけにはいかないからね
そう言つてそれをユーリに持たせる。

「私は手伝いに行かないといけないから、ユーリは避難場所に行つておいてくれ。最近若い奴は町に行つてしまつて男手が足りないんだ」

ユーリは避難する大人たちのグループに従つて歩いてた。大人といつても女性や老人達で、火をよけてぐるりと迂回して少し森を歩かなければならない。村に子供はあまりいないのでユーリはこのグループではただ一人の子供で、男だった。

「もう災難だよねエ」

「ハハ、本当だよ。お先真つ暗だ。この道もこれからも」

「お婆ちゃん、暗いからそこ気をつけてね。」

宿屋のアリエも出かけていて助かつたんでしょう？今のところ火で誰か死んだつていうのは聞いていないし村が燃えても大丈夫よ。むしろ復旧したら前より良くなるかもね」

「ユーリ、アンタもしっかりしておくれよ」

意外と皆楽天的だ。話を聞いてほとんどあきらめていたアリエが助かつたということを知りて安堵しながらも、ユーリはそのことに少し驚いていた。

さつき見かけた村長さんは真つ青になつて声を必要以上にはりあげていたのに。

「水車小屋が燃えなければ大丈夫だよ」

川は村の真ん中を通るものと分かれてはずれにもう一本ある。森と

の境目にあるその川岸の水車小屋がユーリ達が目指す水車小屋だった。村にある川よりもこちらのはずれの川のほうが太くゆるやかで、水車小屋も『小屋』というには数日金のない旅人が利用するくらいはある。

この小さな村にしては設備が整っていて、村長が別荘にしたがっているという噂もあった。

（そういえば）

あの旅人の少年はもしかしてあの水車小屋に泊まったのだろうか。彼は荷物を持っていなかったし、宿先においてきたのかもしれない。

パキン

何かが割れる音がした。続くように、メキメキという音と共にゆっくりと影が濃くなる。

ヒュン、とカマイタチのような鋭い風が吹いた。

「逃げなさい！！」

「本当に大丈夫かあ？」

誰かのいぶかしげな呟きを耳が拾った。

先ほどアース率いる村の男衆に捕縛されたペルーは一番火が大きいだろう所で魔術の詠唱を始めている。会話する言葉とは違うそれは、自分達には到底聞き取れないものだ。

「
えーと、
えー・・・あそうだ
じゃない間違えた。」

聞き取れないものはずなのだ。なのにたまにそれとは違う言葉が混ざっているのはどういうことか。

腕のいい魔術使いは詠唱無しに魔術を使えるそうだが、ペルーにそれを期待するのは馬鹿のすることだ。所詮は小さな村の魔術を少しかじっただけの子供なのだから。

「・・・自分の村一つ守れやしねエのか」

村人は悪態をつきながらとくに消火作業に戻っていた。

「おい見ろ！！」

何だ、振り向くと火がみるみる小さくなっていくのがわかった。

皆、言葉も出ずにそれを見つめている。どういうことだ。ペルーが、『あの』ペルーが本当にやったのか？そんな馬鹿な。

各々、村の恩人対するには失礼なことを考えながら立ち尽くしている。

いつのまにか、あの真っ黒い影のような青年はいなくなっていた。

「大丈夫？」

ゆるゆると眼を開けると、黒い何かが眼に入った。
それが真っ暗な中の人の影だと気づくのには数秒かかる。少女のようだった。

「ごめんね、巻き込んだじゃって。
木が倒れたのに掠ったのよ貴方。それでよっぽど驚いたのね」

大丈夫？怪我はない？ゆっくり彼女はユーリの頭を瘤が無いかわかめるように撫でた。

「大丈夫だけど・・・そうだ、皆は」

「先に行ったわ。十分くらい前ね。私を送るから、立てる？」
体を起こすとしっかりと足が地面を踏んだ。

横を見れば彼女の背は自分より頭半分くらい高いことがわかる。自分の背はこの年頃にしては少し大きいことを知っていたので、14、5歳かと思った。

手に何か持っている。右手に長い棒のようなものと左手に四角い箱のようなもの。

「大丈夫。ねえ、君は？」

真っ黒い影のままの彼女に問いかけると、さっと振り返ってこちらを見たのを感じた。

一瞬の沈黙に、先に名乗りもしないのに名前を聞くのは無礼だと気付いた。

「えっと、ぼくはユーリっていうんだ」

「私はエリカ。エリカ・クロックフォードよ」

キラリ

僅かな月明かりに照らされて、ユーリは彼女の右手にあるものが緩やかに湾曲した剣だと見止めた。

漆黒の魔女

「足元に気をつけて。私手が空いてないの」
いつのまにか雨は上がっていた。

彼女、エリカは道なき道をずんずん進む。茂みをくぐると冷たい雫が肌に当たって身震いした。

「あ、あの・・・」

剥き出しの剣に恐怖を感じるのは確かだった。

でも彼女は右側のユーリに当たらないように刃を左手に持ち替えて除けてくれている。その替わりに右手に持ち替えた四角い箱のようなものが、辞書のようにたいそう分厚い本だと気付いた。表紙が皮張りだ。

剣は危ない夜の森を歩くための護身用だと一人で納得した。

森の中を進んでしばらく。

すでに暗い夜道でここが森のどこかもわからなくなったところだった。

広場のような、月明かりが当たる小屋のあるところに出た。

満月に照らされたそこに出て、やっとエリカの姿を見止めた。

ぴっちりとした、短い黒のシャツワンピースを着ている。真ん中を走る白いラインの所にファスナーがあった。長い黒髪を纏めて銀色のバレッタで止めている。

本と剣を持つ両手にも黒い手袋がはめてあるしで全身真っ黒な服装だった。

「ここよ」

彼女に眼で促された。

「え?!」

見たことの無い所だ。

避難場所まで案内してくれるのではなかったのか。

思わず出た声に、エリカは当たり前のように『入れ』というふうに顎をしゃくった。

『知らない人について行ったらいけない』なんてこと、ずっと小さいころから父さんに言われている。

そういえば彼女は剣を持っていた。

護身用のあれでばっさりやられるかもしれない。

逃げるのは？ 無理だ。足は速くない。

心臓の音が大きく体を響かせた。

軽く背を押されて小屋に入った。

小屋の中は板張りの床と壁にずらりと棚や箆笥が綺麗に整頓されていて並んでいる。

ベットやテーブルがあるところから、誰かが生活していることは容易に想像できた。

「遅い」

低めの声がした。

肩を跳ねて見れば、ドアの影に黒いローブ姿の男が腕を組んで立っている。

「ごめんなさい。

こっちは逃げられたわ。貴方は？」

「ちゃんとやったよ。君に言われたようにね」

「部屋が冷える。閉めて」男に言われて、エリカは扉の前にいたユーリを押しつけて扉を閉めた。蝶番の錆付いた音が耳に残る。

男は酷くゆつくりとした動作でストーブの火種を大きくした。

「貴方も座りなさい」

エリカは勝手に椅子を引つ張つてくると足を組んで背もたれに首を乗せ、くつろぐ体制になっていた。ユーリも戸惑いながら手作りらしい不恰好な一番小さな椅子に座る。

火を大きくした男も席に着くと、エリカが体を起こして口を開いた。

「まずはご協力感謝いたします、魔術使いペルー様。そして始めまして、ユリア＝スタン様。

私は 物語管理局夢人課、調整部第五部隊員エリカ＝A＝クロックフォード。

お二人にはこの物語世界の登場人物代表として私達にご協力願いたいのです」

「僕の名前……」

ユリア＝スタンはユーリの本当の名前だった。『ユリア』というのが女の子みたいであり好きじゃなかったが、母がつけてくれた名前なので大切にしている。

しかし皆ユーリと呼ぶので、『ユリア』の名前を知っている人は父と母、特に仲のいい知り合い等だけである。

ペルーが楽しそうな顔を隠し切れないままわざとらしく不機嫌な声で言った。

「ユメビト？モノガタリカンリキョク？

初耳だな。オレの時は話してくれなかったじゃないか。国の秘密工作員ってことだっただろう？」

「同じ事は二回言いたくないの。役者は揃ったもの」

そういつて二人をちらりと見やる。彼女はゆったりと、しかし憚然

として言い放った。

「質問はいくらでも受け付けるわよ」

ペルーのエリカを見る眼光は鋭かった。射抜くような視線を向けて、しかし柔らかい口調で言葉をつむぐ。

「君の素性をすべて明かしてくれ。これ以上俺が、いや、俺達が君に協力できるかどうか見極める」

「それならその大混乱してるユーリ君にも貴方から自己紹介したほうがいいんじゃないの。貴方自身、この子とは初対面でしょうに」確かにその通りだった。

しかしいきなり注目され、ユーリは体を強張らせる。

何がなんだかわからなくて、恐怖やらなんやらが一緒にすべて凍り固まってしまったようだった。

「君は村の子？」

「え、あっはい！」

「そ」

それだけか。

言ったきり口を噤んでしまったペルーにユーリは困惑の色を示す。

ペルーはそれをチラリと見やるともう一度口を開いた。

「俺は一応村の魔術使いだ。育ったのもこの村で、たぶん君の学校の先輩にあたる。もともと俺を育ててくれてた魔術使いの婆ちゃんが死んだ後を継いだ。人付き合いってモンが苦手なもんでこんな辺鄙なとこに住んでる。この女とは昨日会ったばかりで、面白そうだから協力した。年は１７。わかったか」

「は、はい」

「はい終わり。次アンタの番」

これは自己紹介といえるのか。彼女もいろいろ思うところがあるように、僅かに眉を顰めた。

「貴方ねえ、……いいわ。」

時間が惜しいもの。ざっと話すから判らないところは言って頂戴。

私は『物語管理局』名のとおり、『物語』の『世界』を『管理・保護』する組織で働いてる、世界を渡る力を持つ『夢人』^{ユメビト}と呼ばれる職業の者よ。

私はパートナーと共に世界を渡り、その物語世界の『筋書き』には出てこないモノ、『異端者』^{イレギュラー}をこの世界から駆除、もしくは排除するためにこの世界に来たの。

私達夢人は、物語の『筋書き』を侵す『異端』、この世界に存在してはいけない異分子を他世界に排除し、世界の均衡^{バランス}を守ること。

『異端者』^{イレギュラー}の姿は多種多様、この世界の住人にしかわからない違いだつてあるわ。それを見つけてほしいのよ」

「それが君の言う協力か」

ペルーはテーブルに身を乗り出して頬杖をついた。黒髪の間から見える同色の瞳は弓なりにゆがけられている。

「いいぜ。手伝つてやる」

ユーリははっ、と蒼い顔で叫んだ。

「ちよつと待つてよ！」

漆黒の魔女

「ちょっと待ってよ！」

ユーリはたまらず声を上げた。一斉に二組の双眸がユーリに向かう。怯みながらも、ユーリは声を振り絞って言った。

「だって……それって、僕らの世界が物語の、紙の上の世界ってことでしょう！？そんなの、何がなんだかわからなくて……」

「いざ言葉をつむぎだすと止らなかった。」

「それに……そんなの……」

しかし何を、どう言えばいいのか。頭の中は今までに無いほどぐちゃぐちゃで、ただはつきりわかったのは、『大変だ』ということと何故かどうしようもなく悔しいことだけだった。

「……そうだよ……僕らは紙の上の人間じゃないっ！！」

『そうだ』

『これだ』

ユーリは言い終わったとたん、ぶわりと涙が出た。

「そうだよ、だって、父さんは、だって、え、」

嗚咽交じりで言葉にならない。それだけじゃない、言いたいことはまだあったはずなのだ。なんて情けない。

「貴方、頭いいのね」

否定するでもなく、エリカはユーリの前にしゃがんで目線を合わせた。

「結構難しかったでしょうに。普通、あれだけでこんなに現状把握してくれないのよ。いつも苦勞するのよね私達」

涙を拭くので必死で、彼女の顔は見えなかった。

「この世界は紙の上なんかじゃないわ。」

確かにこの世界は『物語』の世界として読まれているけど、確かにここに現実として在るのよ。私の故郷だって、違う世界で『物語』として読まれてる。文字の羅列じゃない」

「大丈夫よ」そう言って、手のひらがポン、と頭に乘ったのを感じた。それなのに涙は一向にとまらない。

「男前だな、アンタ」

ペルーが溜息と共に吐き出すように呟いたのが聞こえた。「ウチの婆ちゃんそっくりだ」

「僕、何をしたらいい？」

彼女は涙が止るまで待つてくれていた。

彼女もこのペルーという青年も胡散臭い。でも、なんとなくいい人だ。

はつきりと文章にすることはできない勘のような感覚だったが、確かにそう思う。

「簡単よ。私を貴方達と一緒に行動させてほしいの。そうすれば私は『筋書き』に組み込まれるわ」

「それだけ？」

「そう。貴方達はこの世界の人で、いわば登場人物。」

物語は登場人物に沿って進むものでしょ？私は部外者だもの」

「お前も『異端』ってことか」

「理解が早くて助かるわ。」

『異端』とは、この世界にあるはずのないもの、違う世界のものよ。それは人だったり、動物だったり、物だったりね。私ももちろん、この世界に無いもの、『異端者』^{イレギュラー}よ」

「1・この世界は、少なくとも君の所では、物語の世界として読まれている。」

2・そして君は違う世界、異世界から、『筋書き』通りに物語を進めるために『物語管理局』から『異端』^{イレギュラー}を排除するため派遣された『夢人』と呼ばれる職業の人。

で、3・俺らが協力するのは『君と一緒に行動する』こと。4・それによって君は『筋書き』に組み込まれる。

5・『異端』^{イレギュラー}の姿は君にも分からない。でも君が見ればすぐにソレとわかる」

「上出来よ。でも貴方、何回確認しないと駄目なのよ」

「俺は頭が悪いんでね」
にやり、皮肉を含ませ、ペルーはエリカの本を見ているユーリを見る。

黒だと思っていた皮の表紙は明るいとこでよくよく見れば血のよ
うに深く真っ赤な色で、黒い花のような模様が一つ大きく真ん中に

描かれていた。ページはたいそう分厚く、数百ページはある。持つてみればずっしり重く、どうすればエリカの細い片腕で持つていられたのか不思議な程だった。

「あんまり触んない方がいいわよ。後で『セクハラだ』って文句言われるから」

「え、何それ。魔本なのかよ、ソレ」

「魔本!？」

魔術をかけられた本を魔本という。意思があり、勝手に話すものもあるが、そういうのは多くが呪文を呟く呪いのかけられたものなのだ。思わずユーリは落としそうになってしまった。

「いつちよまえにセクハラ訴えるのかよ。本の癖に」

「本にだって色々あるのよ。本権訴えなくなる時とか」

エリカはユーリから本を取り上げ、見せ付けるように背表紙をなでて無然とペルーに言い放つ。よほど大事なものらしかった。

「ペルーはどこだ!？」

「アースさん」

大きな音を立てて開いた扉に中の者全員が振り返った。

避難場所である川岸の水車小屋は避難者で溢れ返り、退屈を持て余した子供が駆け回って怒られていたり、神妙な顔をした男達が隅で眉を寄せ合っていたりでなかなか混然としている。

「火が消えた」

この嬉しいニュースはすぐにも届いたが、被害は甚大。しかし立て直せないほどでもない。複雑な大人達に対して、先ほどまで同じように神妙な顔をしていた子供達も今や、この通り笑顔を取り戻していた。

その中で、どの大人よりも神妙　を通り越し、どこか怒ったような顔のアース村長が声を張り上げる。

「ペルーはどこだ！」

「森の自分の小屋へ帰ったんでしょう。あそこまでは火は届かなかったですし」

「馬鹿を言うな！あそこまで行く道は今デカイ炭で通れん。森を突っ切るのも危険だ、あの面倒くさがりがそんなことするはずないだろう！？私がよく知っている」

「ああ、教え子でしたね確か」

うんざりとした様に、中年に片足をつけた男が言う。

「なんですかもう。今は他の事を考えましょうや。アイツへの礼は今度でもいいでしょう」

「違う違う！そうじゃない！」

様子がおかしい。

雰囲気を感じ取り、男と話を聞いていた大人達が表情を変えた。

「……何か、あったんですか」

おそろおそろ、確かめるように口を開く。

「嗚呼、何かも何もあったもんじゃない！定食屋のユーリ坊が行方不明だ！！」

息を呑んだのは恐らくその場の全員であろう。

面倒見がよく、真面目な少年だ。小さな村で在るがゆえに皆、少なからず知っている。

「それは、」「それだけじゃない！！」

一寸の時間も惜しいのか、声を上げた者を遮り、アースは続けた。

「この炎で魔獣が集まってきたー!!」

普通、火とは獣を退けるものだ。

火、炎とは人間だけが扱えるともいえる文化の象徴であり、逆に人間以外のものには燃え尽くすだけの破壊以外の何物でもない。ゆえに、人間だけが持てる武器ともいえる。
だがしかしソレは

数少ない【例外】だった。

「えッ、エリカさん!!」

「なによ!？」

暴れる髪をそのままに、森の中を木を避けながら進む二つの真っ黒い影。

徐々に上がっていく息に苛立ちを感じながら、エリカは叫ぶように声を返した。

「煩いわよ!叫ばないで」

「で、でもっ!」

「姫抱き位で耳元でガタガタガタ言ってんじゃないわよ重いのよ!」

「わー言わないで!重いなら降りるよ!」

「だってユーリ君遅いじゃない!文句言わないで男でしょ!?!」

「男だから文句言ってるんだよ!!」

何で女の子にお姫様抱っこされなきゃいけないの!?!当然の抗議は受け付けられず、エリカは無言で足を動かすことに専念することに

したようだった。

同年代より背が高いといっても、小柄なユーリは森を突っ切るのに向かない。

確かにこれなら負ぶさるよりも本はしっかりと抱えられる。大事な本は何があっても傷一つ付けられないらしかった。

「ちょっと モン、く、 言っなよ！」

「アンタは体力無さすぎだわ」

「お れは、インドアなんだよ!!」
後ろの方でペルーが叫ぶ。

抱きかかえられている身でユーリにその姿は見えない。あの黒い口ブは動きにくいだろう、というかあの姿で走るのころは想像できなかった。

「あ、~~~~~ もーいい俺限界！ちょっと止まれ!!」

倒れている木を飛び越えようとしたエリカの足が止まる。それだけ叫べるんなら大丈夫じゃ、とちょっと思ったが口には出さない。否、出せなかった。

へたり込んだペルーはほとんど過呼吸のような状態で、金魚のように口をパクパクさせている。こんな状況じゃなければ笑ってしまいそうな姿だった。

（僕、何でこの人怖がつてたんだろう・・・）

「ちょっと大丈夫？まだ百メートルも進んでないんだけど」

「あ、 あり、えない。お前どんな足してるんだよ・・・」
深呼吸で息を整える。【夢人】という職業はそんなに肉体派なのか、エリカの方はすでに落ち着いていた。

ユーリはエリカに下ろしてもらい、ペルーの背中をさする。

「走るのは無理？」

「いや、いや。走るのは無理だが、俺が責任とって何とかする」
ふう、と息を吐いて汗をぬぐう。

「ちょっと移動していいか。時間はかからない」

漆黒の魔女

「被害は？」

「消火できているかどうか確認してまわっていた所をジョーンが腕をやられた。火を噴いた。火傷は酷いが、命に別状は無い」

「ジョーンは・・・」

「動かせないんで、私の家だ。何人かが診ている。

目撃者はジョーンと兄貴のジョージの二人。でかい蜥蜴のような姿に赤い鱗を付けたような見たことの無い魔獣ヤツだそうだ」

アースが説明し終わると数人の男達が飛び出していく。アースは一度大きく呼吸するとそろそろと部屋の隅に座った。

「はぁ・・・なんてことだ」

「大丈夫ですか？」

「おお、アリエか」

栗色の髪の少女にアースは少し笑いかけてからすぐに表情を陰しく戻す。それを見て宿屋の店主である少女は眉を下げたまま、背を伸ばした。

「原因は分らないのか？」

この数時間で何度この質問をされただろう。「わかりません」

「私は昼過ぎに薪が切れているのに気付いて出てましたから、店は誰も。今日はお客もいなかったので火もほとんど使ってません。

朝は残り物で済ませて ああ、そういえばお昼はユーリ君が届けてくれて

「村長」

「ああ、もういいわかったから」
咎める様にあがった声にアリエを黙らせる。憔悴しきったアリエはぶつつりと何も言わなくなった。

「誰か、手伝ってくれ。アイツの十八番は『失せモノさがし』の魔術だ。魔獣もどこにいるかわかるだろう。あいつの事だ、きっと安全な場所に潜んでいる」

「あの馬鹿め、こんなことばかり腕をあげおって・・・」呟き、重い腰を上げた。

「畜生！！」

なんだって俺が！

悪態をつきながら鞭のようにしなって見える炎を避けた。

この時ほど、農作業で疲れた体に鞭打つても弟達と遊んで良かったと思ったことは無い。鬼ごっこやは意外とトレーニングになるらしい。本気で遊んでいて良かったと心底思う。

今年で27になる彼は少しボケたことを考えながらも、その傍ら對抗策も練っていた。

（俺が倒すなんて論外だ。逃げるだけでも精一杯だし、体力的にもキツくなってきた。ああもう、この状況、まるで昔読んだ小説みたいじゃねエかよ・・・ってアレ？てことは俺最初の被害者？

はは・・・笑えねー。火炙りって一番惨い死に方じゃん。死ぬまで拷問って言っし・・・火炙り？・・・火？)

「あ」

思いつき、少し悩んでから背を向け走る。あの魔獣が足が速くないことを祈った。後ろはもう怖くて振り返られない。

足元が小石に変わる。躓くなんてゴメンだ。大きい石の無いところを走った。やがてざばざばと水に足元が浸かり、その靴の中を犯す冷たい水にも負けずに進む。

(火なら水だろー!!)

その安直な考えは功を奏し、赤い魔獣は川の手前でたたらを踏んでいる。ほくそ笑むと、足を止めた。川の流れと水の抵抗に逆らって足を動かすのはなかなか辛い。

「ふう・・・」

アレが諦めてどこかへ行くか、誰か来るのを待とう。早くもかじかんできた指先を揉みながら、川岸でなにやらもぞもぞしている蜥蜴のような体軀を見やる。

そのときだった。

蜥蜴の平べったい巨体がしなり口を大きく開けた。(あ、そうか火はここまで　　!!)

射程範囲内だ、そう気付いて横に避けようと体を動かすが、水の中では巧く体が動かない。ではしゃがむか、とすれば、(冷たいんだろうな・・・)馬鹿か!!こんな時に!

一瞬だ。しかしその一瞬の脳内会話の間に、赤いモノは眼と鼻の先に迫っていた。

「　　ッッー！」

飛沫と白い靄が立ち上る。熱で、空気が膨張したかのような突風がそこにだけ巻き起こった。息を殺し水の中で縮こまっていた彼はややあつて、そろそろと瞼を開ける。

彼は一時、我が目を疑った。

「ベストタイミングにも程があるな……」

「はあ？ペルーー！！？なんで！」

ボサボサの黒髪に、同じく黒い眼、そして黒いローブ姿の見知った少年。

何年も見ていなかった『役立たず』と言われる彼が自分を庇うようにして背を向けていた。

「手を離すわ捕まってなさいー！」

言われ、ユーリはエリカの背にしがみついた。空中に投げ出された体は何ともいえない浮遊感を頭に伝える。

エリカは片手で本を開き剣を突く様に構えた。

「　　ッ」

ドンッ

派手な着地にユーリの体が投げ出される。けして軟らかいとは言えない小石の上に転がった。

しかし痛みは無い。くわっとユーリの体温が上がったような感覚がするだけだ。

「離れてて！」自身も着地に失敗したエリカが起き上がりながら叫んだ。眼は前を見つめている。そこには赤い、竜というにはお粗末な大きいだけの蜥蜴といった感じの生き物がヨタヨタとこちらを向こうとしていた。

「・・・鈍いわね」

エリカの足が地を蹴る。蜥蜴もそれを感じてか、方向転換を諦めこちらを向いている尻尾を振り上げた。剣をなぎ払うかのように振る。赤黒いものが舞った。

尻尾を亡くした蜥蜴が咆哮をあげる様に喘ぐが、蜥蜴に声など出ない。構わず暴れ、火を噴こうとする前の一瞬の隙を突き、急所である喉笛を裂いた。

火も吹けなくなりぐつと動きの鈍くなった相手を認めると、エリカは再び本を開く。

「　　ファイニート」

蜥蜴はその声にびくりと僅かに身じろぎし、やがてぴくりとも動かなくなった。エリカ達が見ていると、ゆっくりとそれは空気に溶けるように薄くなる。

やがて消えたのを確認すると、エリカは肩の力を抜き、深く溜息をついた。

そこにはあの赤い蜥蜴の血の一滴すら残っていなかった。

漆黒の魔女

「ど、どうしたの？」

「どうしたってそりゃあ……簡単に言えば他の世界に送ったのよ」

言って、エリカは腕をぐるぐる回す。しかし、いかんせん剣を持っているがために、川から上がってきたペルーが慌ててその場を飛びのいた。

「アツブね！お前斬る気かよ」

「あーアンタいたの。ま、それもいいかもねエ」

ふふん明らかな嘲笑を浮かべ、剣をくりと肩にかつぐ。

「そういえば、あの川に居たお兄さんはどうしたのよ」

「帰らせたよ！なんだお前そのム力つく笑顔！！」

「あら。移動魔法なんてモン、出し惜しみしてたアンタに言われたくないわ」

「それは……」

「アンタ、移動魔法なんて高等魔術で三人も移動させられるんなら自分で火も消せたでしょう？」

「……え？」

眼を瞬くユーリに構わず、口論は続く。

「さっきの蜥蜴モドキのデカイ火も相殺したじゃない。なんでやらないのよ」

「……やらないんじゃない。俺は『やれない』んだ」ペルーは奥歯を噛み、エリカを睨んだ。
なぜここでお前がそれを言う！

「じゃあなんで『やれない』のよ」

(・・・ああ、苛々する)

ペルーは空を仰いだ。泣きそうな空だった。自分らしくもない、こんなの流せばよかったのに、と今更ながら後悔した。何故初対面の女にここまで言われなければならない。

しかしもう止まらなかった。

「・・・俺は『平穩』が欲しいんだよ。力があるって分かったら街にでもなんでも連れて行かれるだろ」
ユーリがきょとんと目を丸くして呟いた。

「名譽な事じゃ」

(違う、違う!!)

そうじゃない、違う。欲しいのはそんなものじゃない。違う。

「貴方はその『行動しない行動』で後悔したことは無いの？」
馬鹿にしたようにエリカは笑って言った。

(ああ)

コイツは分かってる、そう思った。

黒は染まる事のない闇の黒

其れは力を以って色を飲み込む

夜の常闇は総てを包み

命の炎をも色に染め

無垢なる雪白を背にたつもので

光に従い光を従う

空は隣人

愛の炎は静かに燃やす

灯した光は星の色

延びる軌跡は情の色

高貴の色はその身に宿す

「どうだった？」

「どうも何も・・・」エリカは小さく溜息をついて下を見下ろした。「言い逃げはズルかったかしら」

「でも好きなんでしょ？」

「まあね、ファンだもの。今回は運がよかったわ。仕事でこの世界にこれて、ホンモノの彼らに会えて、伝えたかった事を言えて」

「忘れちゃうのは残念だけど」冷たい風が木の葉と髪の間を吹きぬけた。

「なら言い逃げもチャラだよ。全部巻き戻るんだから」エリカの隣に腰掛け、彼も同じように下を見下ろす。

「ポジティブね、ニル。受け顔のくせに」

「受け顔関係ないでしょ。僕もユーリ少年に会えてちよつとうれしかったし」

「アンタ私のパートナーでしょうよ。離れて勝手にそんな事してたの？本当マイナー処好きね」

呆れた声で笑う。隣の少年も乾いた笑いを漏らした。「僕、重いつて文句言われてたよね・・・」

「女の子みたいな事言わないで。重量があつたほうが得よ。投げたときに遠心力と重力で威力倍増」

「それもどうかと思うけど・・・」

世界が遠くなっていく。空は重く、近く雪が降るだろうことが予想できた。

「寒いし今日は鍋にしようかな。白菜あったよね？」
「先に報告書でしょう」

『後悔するなら』
彼が別の誰かにそう言われるのはまだ先のこと。

漆黒の魔女（後書き）

序章・エリカ編完結です。

毎日更新頑張りました。意外とかなるものです。次の『晴光編』では少しのんびりやります。

以下は、エリカが行った物語世界の解説です。（ブログ参照）

（病気の治し方／マース・ジャクソン著）

両親を戦火で亡くした少年・ココルは叔父・叔母に育てられ16歳になった春、街の警官隊に入隊する。

魔術に秀でている彼は平和な街にやきもきした毎日を過ごす、ある日、紅い服の剣術使いに攫われるように連れて行かれてしまう。

「お前を助けに来た」彼・デイは、自分をココルの兄と名乗り、その証を見せ、故郷へ帰ろうと誘う。

叔父・叔母はココルを見張る研究者だった。真実を知り、事実を確かめるため行く事を決めるココル。

しかし旅の途中に王権争いの事件に巻き込まれ

典型的なファンタジー児童小説です。ペルー・ユーリは主人公じゃありません。

この後彼らはパーティーを組み、旅を続けます。

ペルーはこのパーティーのオールマイティな中衛担当の魔術使いです。村を離れてぶらついた所を結構早くに仲間になります。

主人公ココルは前衛。同じ魔術でも彼は剣術に魔術を付属して戦う

タイプ。お兄ちゃん・デイは意外と猪突猛進・前衛剣術使い。（ほつそいくせに筋肉馬鹿）

第二章からは後方支援・戦術担当で立派になったユーリも加わります。（彼は軍に志願し、その実力で出世街道を歩み始める寸前でペルーにつれてこられます）

しっかり物のユーリ君は最終的にみんなのオカンです。コックの息子で父子家庭なので家事担当で重宝されます。

作者、マース・ジャクソンについて

この人はイギリスの62歳のおっちゃんです。元は主に社会風刺系小説を書いてる人。

『病気の治し方』は12歳になる息子のために書いたそうですが、本人の方があまり読んでくれないので続編は期待できません。

閑話 朽葉色の眼の少年

僕はニル。エリカの『本』だ。

本、といっても僕は人間である。ただ本になるだけ。それ以外は（僕の今までの経験から見ても）普通の人間だ。それに僕にとって、『本』というものは珍しくない。『本』というのは大きな一族なのだ。

年はエリカより二つ年上。誰も信じてくれないのだが、いわゆるアジア系、の容姿（本はだいたいアジア系の顔立ちだ）である僕は欧米のハーフの女の子よりは幼く見えるのは当然だと主張する。女の子の方が発育がいいのは当然だろう。ただでさえエリカは同年代より大人びているのに。

少し前、エリカは見事、『夢人』^{イレギュラー}となった。

物語管理局の『夢人課』には異端を狩る『調整部』と、合法的に認められた物語世界旅行を取り仕切る『案内部』がある。二つとも約三年間の研修を受ける。

エリカは『調整部』、戦闘と現地調査の肉体派部署だ。ちなみに僕ら『本』は『本配属課』から派遣される。

『調整部』にも女性意外と多い。なぜなら戦闘には向かないが、調査はしやすいから。

男だと押しても引いてもできない事でも、女だとコロッと上手くいってしまふことは結構多い。弱者には警戒心を弱めるのはすべての生き物共通だと思う。

そのため、『異世界』を渡る上で最も理想的なのは男女コンビなのだとか。

僕とエリカは六年間コンビを組んでいる。

『理想』と言われる男女コンビ。僕らの場合、男と女の役割が逆転している気もしないでもないが（僕はエリカいわく『真っ先に噛み殺される』らしい。なんだそれ）それなりに実力派と認められているんだと先輩に聞いた。

だがしかし、ここまでには長い道があった。

夢人は約三年間の研修があることは先ほど書いただろう。しかし僕らはその倍、六年間 研修を続けていた。つい二ヶ月前のことだ。成績は悪くない。原因はエリカの能力にあった。

エリカの力が強すぎる。

『夢人』というのは誰もがなれるわけじゃない。『世界を渡る力』、有る意味神様に選ばれたとしか言いようが無い能力が無いとなる事が出来ない。

エリカはたびたび暴走し、異世界に飛ばされる。もう何度だろう。最近では落ち着いてきたが、一時は酷かった。その度に凄く申し訳なさそうにされていたのだが。

しかし彼女は『妥協』^{だきよう}『諦め』^{だきよう}というのを知らない人だ。倒されればダルマのように跳ね上がり、倒した相手に頭突きを食らわせる。右の頬を殴られれば倍の力で殴り返し、あまつさえ言葉でハート^{フライト}をメッタ刺す。そんな強かな彼女だからこそ僕もやりやすい。

六年間。生まれてからも入れれば十数年。

これからどうなるのか。

これから物語が始まるとすれば、なんて長い序章なのだろう。それともこれまでが物語で、今、これが終章なのだろうか。

どちらでも僕らは変わらないと思う。変わらないことを願う。

序章 緋炎の拳闘士

【異端者・二】

どこまでも優しい先輩

明るくおしゃべりな友人

笑う彼女

何処までも理想のはずだった

何処までも幸せな光景だった

しかし何処までも不愉快になった

・・・変えなければ

横暴な先輩

変えなければ、

気の弱いいつも曖昧に笑う友人

変えなければ！

目を伏せる彼女

変えなければ！！

否、帰るのだ。

だって僕が存在するのはあの世界のはずなのだから！

（少年Cの目撃証言）

それはじわりと白に滲んだ

かつん

かつん

底の厚い靴は石畳を踏むたびに音を響かせる。

高い建物の間から見える空は雲ひとつ無い快晴で、白い染みのない空は高く、とても綺麗だった。

でも絵としては白も少しはあつとほうがいいかもしれない。

ふと、グラスは斜め前を見つめて立ち止まった。

それに明るいスカイブルーはなんとなく、この場所には似合わない。【空の境界線】とはよく言うものだが、それならその境界線はあの薄汚れたコンクリートの隙間だろう。

描くなら、こんな所にはきつと夜の濃紺の方が。

「でも夜は無理だし」

（門限は五時半。こんなに早い門限がある16歳はぼくくらいってことは知ってる）

ぼくはそういう星の元に生まれた人間で、それは死ぬまで変えられない事実で。

逃げる、という選択肢はぼくには無くて。

そう、どうせなら

「しゃちょー！！どこですかぁー！！」

「馬鹿っ！呼んだら逃げるだろ！！」

「あそうか、すんませんッ」

「もうまた若はどこに・・・」

とびつきり、楽しんでやろっつて思っんだ。

「Gカンパニーのグラス「グリーン様ですね？」

「そうだけど」

「ご一緒に」

「君みたいな綺麗なおねーさんならどこまででも
その細く白い手をとる。」

「エスコートは任せるよ」

グラスは晴天のような青い瞳を細めて晴れやかに笑った。

嗚呼快晴ナリ。

×月 日

Gカンパニー社長・グラス「グリーン氏（16）誘拐される

身代金は2億!？」

それは次の朝、朝刊の一面に躍った。

「いやあ迷惑をかけたね」

「ホントっすよ」

赤い髪の短髪の少年が眉を下げる。苦味が混じった笑顔は痛々しいほど。

（苦労かけてるなあ・・・）

自分より背の高い年下の東洋人の頭を、グラスは謝罪と労わりの意味を込めて撫でた。

「ファン、今どこに居る？」

「え、えつと・・・今、向かいの本屋・・・。ねえ、晴光セイコウくん、大丈夫？」

「え、何が」

『声、疲れてるよ』

「むしろ楽しいし。大丈夫」

通信機のスイッチを切る。うん、ぜんぜん大丈夫だ。寝れば直るくらい。

今回の仕事は長期。しかもお上の命令で単独である。疲労もそりや溜まっていた。

でも、情報収集を続けている相棒、ファンの方がたぶん疲れてるだろう。

こちらは『主人公』であるグラスと一緒に居られてむしろ楽しい。

彼のキャラは濃いが。

俺は学校の制服を着込み、自室を出る。

（あれ？でも何で突然単独任務になったんだっけ　　）

携帯がなった。

「あ、アースさんツすか？今から登校します。グラスさんは？

え？いやいやいやいや！！！！ちょッ、え、マジ！？　あ、ス

イマセン。マジっすか」

内容を反芻。「肯」の返事。

間。

（『護衛』である俺無しでどっか行っちゃったってありえないあの社長！誘拐されたばかりじゃん分かってんのあの人！！）

絶対次一発なぐっちゃる。上司だとか知らね！心に決めて飛び出した。

もちろん些細な疑問は露と消える。そりゃあもう、さっぱりと。

「・・・・・・・・エヘ？」

「エヘじゃないっスよおおおおお！そんなんやつても可愛くないや可愛いんだけどさア！分かってる！？分かってるの貴方！！また誘拐されたらどーすんの！！？」

「しー、晴光君しー！誘拐トカ、言っちゃダメ。誰が聞いてるかも知らないでしょ。

分かってないねえソコントコ？」

「分かってないのはアンタだよオオオオオ」

俺とは違う、ズボンの丈が明らかに短い改造を施した制服で、社長は両手の指を絡ませ、ハートマークやら音符マークやら星マークやらを（雰囲気的に）飛び交わせながら微笑んだ。

うわ何この生物。もう同じ生物だなんて思えない。見た目は確かに可愛いけど。天使だけど。男と思わなければの話だけど。

「もう嫌！俺もう嫌ッすよ！！俺今まで『お前はボケだ』と言われてウン十年続けて育ってきたのに、此処に来てから慣れないツッコミのし通しッす！」

「えー倦怠期？ボクはなかなか君の事好きだよ？もつと愛を囁こうか？」

「そついう趣味は俺にはねえ！、です！！」

危ない危ない、動揺に煽られて敬語を忘れるところだった。

ちなみに此処は学校の会議室のような教室だ。俗に言う『生徒指導室』とか『生徒相談室』とか呼ばれている、生徒が先生と相談事をする場所。俺も誰かに相談したい。

グラスはキヨロリと室内をもめずらしげに見つめていた。俺としては、職員室・校長室に続き、できれば一生世話になりたくない場所だけだ。

彼、グラス＝グリーンは『Gカンパニー』という大手製薬会社の若社長だ。

父の遺言で若干16歳でこの地位に就き、現在に至る。この微妙に俺の知る『地球』とは違い世界的に『飛び級制度』とかが認められているらしいこの世界で、14までに大学まで卒業してしまった神童だ。

現在は仕事の合間を縫って偽名で普通の学生ライフを楽しんでいる。この辺でもう普通じゃない。

さらに言えば、今回の俺は彼の護衛という名目で雇ってもらっているという『設定』だ。（設定とは夢人用語で、登場人物に影響を与

えないようどう行動するか、の予定のことだ。これがまた細かくて考えるのも大変)

『夢人』は天職だと思っているので楽しい。楽しいけど・・・っ
!!

のほーんとしているこの若社長の顔が憎くてたまらないのだ。

(早く終われ

!!)

肺炎の拳闘士（前書き）

大変下品な表現があります。

緋炎の拳闘士

『まだこっちは動いてないけど、でも少しずつ準備は始めているみたい。場所も特定できたし』

「マジで？どこ」

『会社のビルからあんまり遠くないよ。えっと……B、べ、ベリービル、かな？美容関係の会社が沢山はいつてる。あ、全部レボリューションⅡローズ社系列だ』

「れぼりゅーしょん……」

『直訳で、ば、薔薇革命……かな。』
グラス
主人公の友達の会社。化粧品とか、色々。

友達の名前はベティⅡフォスター、この会社の御曹司。グラスより二つ上の18歳。兄貴肌でグラスに振り回される……』

「ヤラレ役？」

『……あ、キャラクター紹介にもそう書いてあるよ』

ボーン ボーン……

大きな柱時計が重低音を響かせ、時を告げる。僅かな明かりの中で、その音だけが嫌に響いた。

ぬばたまの髪を怠慢な動きでゆっくりと梳く。癖の無い髪は指の間から逃げ、するりと落ちる。

「レノアースさんに怒られるぜ？」

「大丈夫。もう少しこうしていたいから……」

愛おしげに擦り寄ると、仕方ないというようにたやすくそれを受け入れた。

「おい。帰った方がいい。グラスも仕事あるんだろう？」

「ヤダ。たまにはいいでしょ……？」

いつにもまして甘えてくる恋人に内心嬉しく思いながらも、ベティは苦い表情で言った。

「でもレノアースさんが……」

「ベティ、アースさんあんなじトの話なんかしないでよ。」

睫が触れ合うほどの距離。ベティは仕方ないと溜息をつきながらグラスの腰に手を回し、絶えられないというように……

ブツン。

「ああ！音声が……！」

「おいテメエいつこんな映像作ってやがった……！」

肩を上下させ、ベティは三白眼でグラスを睨みつけた。

室内は薄暗く、スクリーンに映し出される映像の光で青白くぼんやり姿が浮かび上がって見える。「ていうかこの映像の奴誰だ……！」

少年が濃厚に口付ける映像を必死に見ないよう背を向け、震える指先でスクリーンを親指で指した。あの映像に指を向ける事さえ嫌悪感が湧き上がる。どんどん冷たくなっていく指先にに叱咤し、殴ろうとする右手を押さえ、あわよくば指している左手をそのまま下に向けてやろうと、心に決めた。

「ヤダな〜ダーニエル君とペーテル君だよ」知らないの？鼻で笑い、両手を広げてお手上げのポーズをするブルーの瞳を弓なりにしならせた少年に、ベティは遂に引っこ抜いたコードを投げつけ、拳を固め。

「……いつ、俺が、こんな台詞を、言った!!」

「ベティの声のアテレコしたのは友達でね、七色の声の持ち主なんだ」

「消せ!今すぐ!!」叫びながら少し眼に入ってしまったハンガリ
ー産ビデオでは、すでに服を脱がしにかかっている。自身の鳥肌を
見ないようにしながら、右手の先が白くなるほど握り締めた。

「レノアースさんにチクられたく無かったらこっち来なさい! お
説教です!」

わんぱくな友を持つ年上の親友は珍しくも大声を上げた。

ベティは心が広い。

これは彼を知る総ての人間が感じる事で、ぼく自身も、ここまで寛
大な人間を見たことが無い。だから結構何やっても、最後は笑って
くれるモンなんだけど。

まあいい。今回はぼくが悪かったと、潔く認めよう。

だって未だかつて、こんなに怒った親友をぼくは見たことが無いん
だから。でも、ぼくは後悔などしていない。目つきが悪い癖に顔だ
けはいい彼を慕うヲトメ達は結構いるんだ。とくに恋心は腐って
るけど、その趣味は理解できないでもない。 (なにせ、妄想する
相手がぼくだから)

ミッションはいかにしてベティの怒りを静めるか。

いざ出陣!! (今この時から、一步も引けない戦場に繰り出すんだ
!)

「今回ばかりは堪忍袋の緒が切れたからな。これまでは餓鬼の悪戯だと思つて掲揚してきたが、こんな意味の分からない悪質なブツに手を出すなんて、俺はハッキリ言つてお前に失望した」

「別にベティ本人に見せようと思つて作つたんじゃないよ」

「本人に気付かれなければ良いのか！？違つたろう！！」

「『知らぬが仏』つて言葉が」「違つたろう！！？」

グラスの言葉をさえぎり、声を荒げるベティに、グラスは拗ねた様に頬を膨らませた。

「それでもぼくは後悔してない！」「それが問題だつて言つてんだドアホ！」

言い切る彼の頭に平手が飛ぶ。ぺしん、と軽く鳴つた音に、今度は唇も尖らせてそっぽを向く。さほど痛くは無い。

「この前やつた【ドキッ！男も女も入り乱れ『気になるアノコが美少年！？』性別逆転・ポロリもあるよ！】パーティーと どう違いがあるの！？」

「ぜんぜん違つたろうが馬鹿！」

今度は拳骨が振つてくる。

「あの時は ベティ無理やり参加させてお金一杯使わせちゃったけど怒んなかったじゃん！あとツツコミが痛い！」

「あれはいい息抜きになると思つたからだ！あとお前、そのパーティーの！全部覚えてるのか？」

「当たり前でしょ！そうだ、覚えてると言えばベティこの前誕生日に頼んだアレぜんぜん違つたじゃん！」

「いつの話だ！お前も今の今まで忘れてただろ！？」

「食べ物の恨みは恐ろしいんだよ!？」

話はアテレコ・ハンガリー産ビデオの話からどんどん逸れていく。誕生日プレゼントの話からベティに振られたグラスの家のメイドの話、グラスの過去の悪戯についてから、果ては甘納豆の美味いか否かに関する討論会になっていた。「バツカ、お前『納豆』なんて名前がついてるんだから。名前からして嫌だ」「食べた事も無いくせによく言うよ! さっちゃんも甘納豆投げてたら、もっと何かしらの道が開けたと思うね!！」

「すみません、ベティさん」

扉を開けて混沌とする室内に入ってきたのは、ハウスキーパーの女性だった。ハウスキーパーとは名ばかりで、実際はベティの秘書のような事をしているひとだ。二人の事もよく知っているためか、何のためらいも無く淡々とベティに用件を告げる。「お客様です」

緋炎の拳闘士

「客？」

「ええ。『エル』と名乗っている修道女達ですが」

エル？そんな人間いただろうか。ベティは首をかしげた。

取引先などでは取り次がなければいけないが、ベティは会社のことに関して勉強中の身で、あまり触らせてもらえない。故に、ベティに仕事関係の者が来ることはまったくと言っていい。来るとしたら、直接社長にモノが言えない悪賢い輩だ。しかし今回は修道女だというし。

「あ、それぼくの友達だよ！」

「は、」

呼んだのか、お前が。

「学校の友達なんだ」

「ちょっと待て。てことはお前がGカンパニーの社長だって知ってるのか」

「うん」

何のための偽名だとか、そういうことはグラスの笑顔を見て飲み込んだ。

「いい子だよ。そういう身分とか称号とか、全く気にしないし。ほら、例のビデオでベティの声を担当した七色の声の持ち主」

「ソイツか！！？」

「美人だしね！！」

「『美人』ということは女なのか！？」

「正真正銘の乙女だよ」

そういうのに協力するということは。

その『乙女』が気になるのは勘違いだろうか。『おとめ』の『お』

はナニカの『お』ではないのだろうか。というか『お』じゃなくて『ヲ』だったりしないのか。

「エルちゃんはノーマルだから！ついでにお姉さんな清楚系！」「よし通せ！」

「こちら通称・エルちゃん、本名エルバード君。こっちがリユー君」「乙女ってそういうことか・・・！！？」

「二人とも男の子デス」

「グラス、僕は女の子だよ、今はね。今は」

「ああごめんね、エルディアちゃんだった」

うふふあはは

微笑む少女、否少年は、セミロングのくすんだ灰色の髪に白い肌、アッシュブルーの瞳で確かにモノトーンの黒い修道服が似合う『清楚』な『美人』だった。傍らにいる、連れの同じく少年は無表情だが、深い黒の髪に黒い大きな猫のようなアーモンド形の瞳で、日本人形のように、（彼は普通に男物の修道士服だ）確かにまた系統の違う『清楚』な『美人』。背はベティと同じくらい高いが。

対してグラス。

服はギリギリ男物、むしろユニセックスの白いブラウスにズボン、改造を施した制服姿で、容姿はいうでもなく。

そんな三人が並んでいると、全員男というのを忘れてしまいそうになるほど華やかだ。むしろ怖い。エルバード、否エルディアが、グラスより背も高いのに、普通に華奢で鈴の鳴るような声の美少女とというのがさらに怖い。もっと怖いのは横のリューだ。彼は特にエルディアの様に化粧をしているでもなし、元が女顔なのか、背のわりに細いし、男物を着ていても『貧乳なんです』とか言われれば信じてしまいそうだ。無表情だし、伸びっぱなしの髪で、いわくつきの人形のようなだし。

16 になつてグラスも女装が難しくなってきたというのに。

(何この集団・・・!!)

純白の薔薇やら、百合やらを背後に咲かせたら、さぞ似合うだろう。似合いすぎてゾツとする。

「ていうかその女声はどこから出してるんだ」

「嫌だな、声帯からですよ」

「そういう意味じゃないと思うけど」

驚く事でもないのだろうが、いきなり口を開いたリ्यूに一瞬嫌な汗が浮かんだ。

「僕、見ての通り女装が趣味なんですけど、中身は普通の男の子なんです。普通に女の子が好きだし　あ、リ्यूは別ですよ」ふふふ。それはどういう意味なのか。

「でも、その分、この容姿で男声ってリアルに気持ち悪いじゃないですか。僕自身はそんなに低くないんだけど、やっぱり違和感がある。で、頑張つて練習して出してるんですけど・・・あ、地声出しましょうか？」

「い、いやいい!!」

空はゆっくり暮れていく。

「それで今日はどうして？」

ベティはカップに口をつけながら言った言葉に、エルはにっこり笑みを返した。

「ちよつとお話がしたくて」

彼が異端者イレギュラーなのは間違いない。

筋書きには彼は登場しないし、彼の存在で、登校途中に友人に遭う、というイベントが消えたのは間違いないのだから。

問題は、彼が『事故』による異端者イレギュラーなのか、『故意』に紛れ込んだ異世界旅行者なのか。

前者だとすれば、話し合いでも強制送還でもすればいい。事故によってその『体質』で『来てしまった』人は大半帰りたいと言うのが普通だし、物語世界に味を占めてしまった者の場合は、夢人にスルウトするのもいい。『夢人』は年中人員不足の職業だ。食べ物に困る事はない。

しかし後者の場合。

これは違法異世界旅行者の場合があげられる。いほついでかいりよこうしや

違法異世界旅行者とはつまり、物語世界の『筋書き』への干涉、『登場人物と関係を持ちたい』という心理からのものだ。有名人に会う為に、有名人行きつけの店へ通うミーハーなファンと同じ。これも強制送還すればいい。

しかし問題は、その大半が物語の世界を『渡る能力のある』人間だということだ。

異世界Ⅱ物語の世界はそれなりに危険が多い。特にこんなコメディちつくな世界ほど、意外と危険は多いのだ。

ギャグで爆弾を爆発させたとする。しかし話の進行上、登場人物は死ぬ事はない。それは登場人物が『そういう風にできているから』。せいぜいチリチリアフロになって煤ける程度。『登場人物特典』というやつだ。しかし、他の世界から来た人間は違うだろう。爆発が起きれば爆死だし、空へ投げられれば本当に星に成ってしまう。

ということは、それに『耐えられる事の出来る』だけの力のある人間だということだ。

複数の世界をわたっている場合、その経験値もそれだけあるだろう。強制送還なんて、それなりに認められているといっても、下っ端の下っ端、まだまだこれからの自分達には絶対に無理だ。

（どうしよう）

彼は、このタイミングで登場人物と接触を図っている。これでほとんど後者の場合が強まった。（どうしよう）

パートナーの彼は、今頃主人公のグラスグリーンとつき合って学校にいる頃だろう。ここは無理にでも合流するか。でもあちらも二人、リユーという少年が残っている。主人公を衝かれたら、ここは終わりだ。

主人公は世界の核、核が壊されたら

（どうしよう）

「ていうか驚いた。君は本当に男だったんだな」

「そうですよ？」

エルは楽しそうに笑顔を深めた。化粧は落とし、灰色のセミロングの髪は後ろで纏められていて、白い制服のシャツとスラックスで、大人っぽい昨日の姿からは異なり、一転、年上の女性受けしそうな

爽やかな美少年だ。(「サボってる、ということなのだが、自分も昔はヤンチャしていたし、グラスもちよくちよくサボるので気にしない。」)

(「というかやっぱり」)

ああ怖いな、と改めてベティは思った。

(「この変わりようは怖い」)

角砂糖をもう三つ入れ、紅茶をすする。

大して言葉遣いも変わらないようだし、共通して一人称も『僕』、本人の言った通り、声もさして低くない。なのにこの変わりよう。空気が違う、と思った。

雰囲気が違う、と思った。

失礼だがそれを指摘すると、目の前の人物は気分を害するでもなくさらに笑顔を浮かべる。

「僕は男だとか女だとか、そういうの嫌いなんです。だって女はスカートとか着るのに、男は……って、何か不公平じゃないですか。女性は結構どんな服着ても許されるのに。似合えばいいじゃんって思うんです。」

僕、昔、身分とかそういうのに厳しいところに居たんですけど、階級の違う人と友達になったら、怒られちゃって、で、偉い人に直談判しにいったら、逆に切られそうになっちゃって。

女の子はめんどくさいんで、女になりたいと心から本当に思った事は無いですけど、『なら完璧にやってやろうじゃないか』って思っ
て演じきってる感じなので」

そのせいですかね？

考え方は、ハッキリ言って『なるほど』と思った。それなら俺でも少なからず思う事がある。でも

やたら眩しい笑顔が怖かった。

(これは、違う)
(・・・違う?)
(・・・違うんだ)

緋炎の拳闘士

嗚呼、この人は頭が悪いのか。
心から、そう思った。

寒い。冷たい。固い。

三拍子揃っている場所だ。

触れる場所はひんやりしていて 夏になればさぞ気持ちがいいだろうが、今この、右半分だけが嫌に冷たいという状況では不快以外の何者でもない。

男にしては長めの自身の髪が、灰色の地面に散らばっているのが、辛うじて視界の端に映る。ああ嫌だ。

これじゃあまるで、人攫いに遭った乙女みたいじゃないか。男っぽい格好が似合わない容姿に生まれてしまったがために、ぼくは『こう』なのだが。まあよく趣向というのもし少なからずあるという事実も否めない。

『人攫いに遭った事実も否めないっスよ！』

嗚呼もう、赤いのが声が聞こえる。嫌だな、ぼくはまだ16だぞ。耄碌するのはずっと先だろう。しっかりしろ自分。この前はあるに堂々と人質『してやってた』じゃないか。

なんかもう、励ましで『男だろ！』とか言つのも間違ってる気がしてきた。

ああもう、嫌だ。不快だ。何が？ 今この状況総てが。

自問自答なんて不毛だってことは分かっているのに。それもこれも、いつもと違うからだ。知らないからだ。分からないからだ。

違う。いつもはこんなじゃない。だってぼくは大事な人質。大事な取引道具。大事なお人形。嫌だ嫌だ。何だこれは。気持ち悪い。よっぽど何も知らない小物の仕業なのだろうか。否、ぼくの誘拐がそんな小物にやれるわけがない。じゃあ誰が？敵なんて作りまくってる。誰？

考える。ぼくだって、頭がわるいわけじゃない。

誰？

「どうしよー……」

教室の隅でしゃがみ込み、顔色は蒼白。真っ赤な髪と暖色の目、いつも陽に焼けた血色のいい肌と相まって、余計にそれは目立っている。

晴光はぶるぶると心なしか紫に見える唇を震わせ、くしゃりと髪を握りしめた。

「また見失っちゃったー……」

あちゃー。頭を抱え、考える。もう何度目だろう。この十数日、何度彼を見失い何度会社と学校と自宅を往復したか。アースさんに怒られる。帰った後で報告書を作った時にも、部隊長に怒られるだろう。イヤイヤ、だってしょうがないってあのクラゲみたいにフワフワフワフワ神出鬼没であっちに行ったりこっちに行ったり……・コバンザメのごとく、くっ付いてないとずっと居場所を把握しておくなんて無理だ。この苦労は同僚の夢人にはきつと分かってもらえない。「たかが護衛だろう」お前は知らないんだ。オレはとっくにアースさんのマワシ者として警戒されてるんだから。相手はIQ

がメーターぶつちぎるほどの神童、天才児。その行動は凡人には予測不可能である。

護衛対象が誘拐されているなんて露知らず、少年はいかに言い訳するか頭を抱えていた。

「やべーよマジでもうどーしよおファンシー……」

情けない声色の通信に返ってきたのは沈黙と、息をのむ音だった。

「ファン？」

続いて、がたん、と動き回る音と衣擦れの音が僅かなノイズと混ざって聞こえる。

『ご、ごめんね、で、えっと……ああもう、もう一度言って』

「だからさあ、また見失っちゃってさあ、疲労もピーク。もう笑いしか出てこない」

『……笑えないよお』

「ファン？」

どうした？何があった？途端に表情は硬くなる。深呼吸の後、蚊の鳴くような声で相棒は話し始めた。

「あ、上司さんには話さないほうが良いと思うの。筋書きに沿わないし、話したところでその行動がどうなるか分からないから。合流して、どうするか話し合おう？……えっと、うん。大丈夫。わたしは大丈夫だから……うん」

震える指で通信を切る。大丈夫、だいじょうぶ、ダイジョウブ。彼は強い。わたしも、彼に言わせるなら強い、らしい。大丈夫、これが予想がでなかったただけだ。明らかにわたしたちの実力に伴っていない事態が起こったんだもの。混乱するのは仕方ない。なら自分

がすっかりしなくては。彼は冷静になれば、誰よりも頼りになるんだから。

違法異世界旅行者、というのは少なくない。でも、多くもない。事故によるものが大半だし、近年は組織化して、どう物語管理局に見つかからないよう不正を働くかに力をいれているらしい。そして近年のその筆頭が、

ニコクス
N Y X

活動は他の異世界旅行者集団とは明らかに異なる。

ただ、純粹に『物語の世界』を楽しむのではない。主な活動は、一般人へのアトラクションと称した違法異世界旅行のあっせん、物語世界にあるアイテムの不正売買と『登場人物の人身売買』。

組織としてはむしろ小さい。が、弱小ではない。少人数の先鋭で固められ、アイテムの入手や登場人物の拉致などをしているのは、何も知らない、『イベント』として楽しんでいる一般人達だ。一般人といってもそれなりに戦闘が出来る者を集め、成功すれば報酬も出る上、失敗しても無事であれば何度でも挑戦が認められる。数多くの世界の中、分かっているだけでも万は下らないほどの人が被害にあっている。分かっている被害はさらに数倍だろうという。

リーダーの名前は分からず、ただ分かるのはその人物が「DORM ^ドマウス」
「DORM」^{マウス}、眠りネズミと名乗っている、それだけだ。

もし、そんな組織が絡んでいたとしたら。

考えただけでぞっとする。

「リユー大丈夫？能力で僕以外を運ぶのは久しぶりでしょう？」

「・・・大丈夫。エルより軽い。さすがに三人は難しいけど」

「うん、もう少しだから、ね。がんばろっか」

「俺もまだ大丈夫だから」

「わかってるわかってる。でもここは僕に任せなさい！早く帰って、店長さんのお手伝いしないとね！」

「……まあね」

「じゃ、後よろしく。リユウ愛してる」

「……ん」

目を離したつもりはなかった。

私の容姿は目立つから、屋内で監視を続けていたし、距離もあるからそういう能力者じゃない限り、見つからないだろうと思っていた。それなのに、

「わーピンクの髪だなんて、本物初めて見たよ。意外と自然だ。世界は広くて多いな、生きててよかった」

緋炎の拳闘士

消える消える消える。

俺はここにいる。ここにいて、呼吸している。

そのはずなのに。

俺は守らなければならない。

あれは一つだけのもので、生涯二度は手に入れられないものなんだ。

それは俺が俺だから。

二度はないんだ。

あれはそこに無ければいけないものなんだ。

替えはきかない。

俺の、力が足りないと、そういうのなら。

もういい。守るためなら、俺ごと消えてそれでいい。

だから

だから。

消してくれ。ねえ、頼むから、誰か。

もう、呼吸でさえも、空気の流れて、

自分なのに。

ああ早く。

俺の中に、何かいるんだ。

「おい!!」

突然襟元を引き上げられた晴光は両目を瞬いて至近距離の顔を見つ

めた。

オリーブ色の瞳は憤怒に燃えている。整った顔を浅く呼吸しながら見、表情を引き締めた。

ここは街を一キロほど外れたところにある、レボリューション・ローズ社の管轄の子会社のビルだ。内装はデスクと来客用のソファがあるばかりで、それもすべて布がかけられている。

無人のここにはおおよそ人のくるような雰囲気はない。

「えー……なんとか革命社のおんぞーしのベティ」

「レボリューションだ！レボリューション・ローズ社！」

間抜けな言葉にベティの表情は少し和らぐが、すぐに腕に力をこめて締め上げた。「答えろ」噛み締めた歯の間から声が唸るように言葉を紡ぐ。「お前らはドコの、ナン、奴らだ」

「うぐ、ぐるじ、ちよ、ではなじ……」「言え」

「いえねえって！」バシバシ腕を叩いてやつと解放された晴光は酸素を取り込み、改めて前を見た。

「俺は、グラス・グリーンさんの護衛役を二週間前からやらせてもらってる、ます！セイコウ・シュウ、っていいます！」

「セイコウ……新しい護衛？」

口の中で転がして、晴光の真っ赤な頭を見、顔を見、服を見る。来ているのは白いラインが前に付いたブラウンのジャケット、下のスラックスは制服のまま。

「……スマン。間違えた。勘違いだ」

「大丈夫です！」

「ごめんな」

先ほどまでの様子が嘘のように萎えたベティは少し冷静になったのか。薄く笑みを浮かべて見せた。

「で、どうした？こんなところで」

「俺、グラスさん見失っちゃって、で、ベティさんトコいるかなー……って。あの人の行動パターンはあなたの所か、学校か、屋敷か、その他しかありませんし」割合は2・3・3・2だ。「で、グラス

さん知りませんか」

ベティの顔が強張った。「……いいや」

「でも、心当たりはある。ちよつと座ろうか」

曖昧に笑って、ベティは白い布をかけられたソファをさした。

「……とんだ馬鹿だ」

呆れた声で呟いて、彼は黒に包まれた右手を振り上げ

シルヴィア・レノアースは、彼がけつしてただの馬鹿ではないことをよく分かつていた。

ちゃらんぽらんでお子様で、女顔で童顔でチビだが、結果だけを見れば十二分に利益をだしている。彼はリスクの高い賭けを必ず成功させる力を持っている。ただ、それを認められないのは、その賭けが、彼にしか出来ないことだからだ。

たぶん、この世界で、彼にしかこんな賭けは出来ない。いくら有名大学を出た部下でも『天才』といわれた者でも、彼と同じ仕事は出来なかった。

この会社は、もはや彼無しでは在り得ない。

たまに彼は、それをすべて理解した上で馬鹿をやっているのではと思ふ事がある。

『自分がいなくなつても大丈夫なように』

実際、彼の起こす騒動の後始末で、眼に見えて社員のスキルは上がっているように思える。しかし、自室のテラスで、通学途中の道路の脇で、自分が説教をしている時でさえ、何かにつけて空を見つめ

るその姿は、その可憐な容姿とあいまって、光と共に、消えていきそうに思えるのだ。彼が消えてもきつと誰も驚かない。『妖精だった』とでもいわれれば、皆信じるだろう。『きつと、この会社を救いにきた悪戯好きの妖精だったんだ』と。

我ながら馬鹿な例え話だと思う。しかし、今でも夢ではないかと思うのだ。16年たった今でも。お嬢様でさえ、眼を覚ませば昔と同じ姿で生きているのではないかと。

あんなに彼女のことを好きだったのに、『この夢が覚めなければ』
と知っている自分がいるのだ。

「　　なッ！！」

金属が激しくぶつかり合う音が一度響く。キーンとエコーを残したそれは、一度鳴れば十分だった。晴光は後ろに距離をとる。

三メートル先では、黒尽くめの修道服の長身瘦躯の少年と、同じく黒尽くめの青年がにらみ合っていた。「べ、ベティさん!？」

「お前……グラスはどうした」

「……本当、馬鹿だ」リユーは溜息ともつかない息を細く吐いて、ベティの鳩尾へめがけて突進した。

今度はベティが後ろに距離をとる。狭い空間に分が悪いと感じたのか、デスクにある布のかけられたパソコンを蹴落とし、広くなった足場にしっかりと足を付けた。落ちたパソコンは大きな音を立てたがかまわずリユーは攻めていく。腕に仕込んである刃が、照明の無い薄暗い室内で外の陽の明かりに反射して、きらりと白く光った。

「いッつ、何なんだお前!!グラスを、」

「何を今更、武器を出した時点で君は終わってる。その口閉じてよ。」

俺たちはもう気付いてる」

ベティの顔が歪む。

「待てやめろ！」晴光はベティとリユーの間に躍り出た。ベティを後ろ手に庇う。

「おい、お前、どういうことだ。ていうかお前が異端者イレギュラーだな」

「そうだよ」

「・・・ベティさんは、登場人物だぞ」

「わかってる。でも今は違う。エル!!」

今度は修道女が天井から飛び出した。晴光の背後のベティを蹴り飛ばす。「ベティさん!!」ベティはデスクを落ち、その奥の金属製の棚にぶつかった。ガラスのはめ込まれた扉にひびが入る。駆け寄ろうとした晴光をエルが制し、ベティを睨みつけたまま言った。

「ちよつと」君、今やバかったよ？もの凄く。彼は精神分離・憑依型の異端者イレギュラーなんだって」

「気付けよ」リユーが呆れた声で呟いたのが聞こえた。

緋炎の拳闘士

「せ、精神分離……」「の、憑依型ね。見た事無い？」

エルは苦笑いをして、晴光に眼をうつした。「そのまんま、肉体を伴って世界を渡れない。幽霊みたいなものだね。精神のみ、この世界に存在する事の出来るのを精神分離型。その中でも、『登場人物』に憑依して存在するのを、精神分離の憑依型。憑依型は、その体がどこまで使えるか、人によってまちまちだけど」

微笑をうかべたまま。エルはベティ、否ベティの体の中の人物へと眼を戻す。

「クソッ」それはベティの顔で、憤怒を燦らせた。

「君の場合、本人を押しつけて ほぼ完全に体に乗っ取れるみたいだね」

「ちつくしょ！」

冷たい薄汚いコンクリートの地面で海老並みに背を仰け反らせ、もかく姿はなんて滑稽だろう。自分を拘束しているその縄は、縄と言うにはあまりに細くて糸のようだ。だからこそ一本一本の強度はそれほどでもないものの、中途半端に切ってしまうと、動かたびに絡み付いて余計にうっとおしいことこの上ない。体力はまだまだが、精神力のほうがどんどんバケツですくう様に削がれていく。

こんな鬼畜極まりない捕縛方法を考えたのは誰だよ……っ！

普段は使わない口汚い言葉だって飛び出してしまふ。グラスは唇をかむと、自分が思っていた以上に消耗しているらしいことを感じた。

「あ~~~~っもー!!」

ここは救助を待つのが頭のいい方法だということは分かっていた。

でも、自分の性能のいい第六感というものが、真っ赤なサイレンを鳴らしているのだ。これは警告。

意外と多い頻度で鳴るこのサイレンの音は、自分にしか聞こえない、自分がどう行動するかを目印の一つだ。ここで自分が何かしら行動しなければ、どうなるのか。想像できないからこそ恐ろしい。

「リユーの馬鹿アアア！エルのカマアアアアア！女顔コンビ
イイイイ」

自分のことを話したのは第六感が示したから。危険だけれど、大丈夫だと。味方ではないのなら、限りなく味方に引き寄せればいい。だって敵でもないのだから。

彼らは傍観者。見止め、記憶する事を目的とする。それだけだと思っただのに。

小さな天窓から、青色が見えた。雲はゆっくりと流れていく。何故自分は今、あそこに行けないんだ。

雲に透ける擦れた青色が、エルの瞳の色に見えた。

赤は燃える身命の色

それはその身を燃やして其の色とす

文明の炎は宝を灯し

その雪白へ色を映し

闇を父とし

光を母とす

空は焦がれる

愛の炎は宝とす

溢れた炎で色を焼き

然し其れは戻らない
然し其れは其処にある

緋炎の拳闘士（後書き）

原作解説 （Gカンパニー！ノコマチ作）

無邪気でチビで女顔で腹グロな齡16歳の若社長、グラスを中心としたハイテンションコメディ。厳しい世話役シルヴィア・レノアース（アースさん）、有能執事（アース v v LOVE）、恋するメイド（陰険）、兄貴な親友ベティ（ベティヤス）などなど。アホに見えても、彼はとても有能です（？）

少女漫画誌で連載されているコメディ漫画。原作は乙女ゲームでそれをさらに脚色したもの。

原作ゲームよりも人気が高く、登場レギュラーキャラの一人、グラスに焦点を当て、コメディ要素のさらに強い内容になっている。もはやベツモノと考えた方がいい。

グラス＝グリーン

この年で会社を継いだ神童。女顔で小柄、服装は似合うとなれば一見女物の服でも着る。黒髪に青い目。トラブルメーカー。

アースさん（シルヴィア・レノアース）

46歳。グラスの母親の専属メイドだった人。現在はグラスの世話役。厳格でマナー（道徳方面）に厳しい。グラスが唯一頭の上からない。よく見ると美人。

執事

真面目で何でもそつなくこなす、絵に描いたような執事。51歳。
10年前に妻を亡くしている。アースさんに淡い恋心。

ベティ（ベティヤス）

母の影響で、化粧品ばかり作るレボリューションⅡローズ社を、製薬会社として生まれ変わらせようと修行中の御曹司。オリーブ色の眼のイケメン。18歳。ガラスのイタズラの被害者。

メイド

ベティに恋心を寄せるガラスの屋敷で働くメイド。美人だが、その恋は陰険。振られてからはさらにエスカレートした。やけに機械関係に強い。

閑話 桃色の髪の少女

「謎の二人組みの異端者^{イレギュラー}によって主人公誘拐その上、本を奪われ、さらにはレギュラーキャラに憑依^{イレギュラー}していた別の異端者まで勝手に捕縛され、パニックっているうちに二人組みは異世界に逃亡、本であるファンは自力で拘束を脱出し、主人公を救出、送り届けた上、パートナーを探して彷徨った挙句、道に迷って、6時間後に合流、そして帰還　何しにいったんだお前ら」

刈り込んだ短髪の上司は桜色のルージューを引いた唇を歪ませた。ぐしゃり、手の中で報告書が潰される。

「言葉ありません……っ」

「装備がすべて壊されてましたあ……っ！」

「任務は結果論で言えば成功だから別にいいんだけどなア……」
3時間52分もの間、正座させられた事は記憶に新しい。

「ありえねーありえねーよ、だってもうちよつとで四時間だぜ！？記録更新しちゃったもん。ほんつと隊長ありえねー」

十数分間、身振り手振りで同じことを繰り返す晴光君を見つめ、エリカちゃんはどこまでも深く溜息をついた。

「それは分かったわよ。つーかアンタ、ものすごく熱い。しかもウザイ。その口閉じてよ。何なら私が綴じてやるわ、どう？」

「ホチキス　スタンバっていらっしゃるー！！」

私はおろおろするばかりだ。じりじりとエリカちゃんは晴光君にホチキスを持った手を伸ばしていく。先からちよつと飛び出した銀色

の鋭い針がキラリと光った。

「まあまあ、エリカちよつと落ち着いて。冗談でもそういうこと言わないの」

「私は有言実行の女よ」

カチリ

ポトリと銀色の曲がつた針が落ちた。「コレ踏んだら危ないよ」「細かい事は気にしないのニルアンタ男でしょ」

「ていうか何で晴光来てる訳？ファンちゃんオンリーならまだしも」

「だってコタツあんの、ここだけなんだもんよぉ」 はー温い」

「ちよつと潜らないで。わいせつ罪で訴えるわ」

エリカちゃんの手が伸びて、晴光君の真つ赤な頭をつかむ。「いでででででハゲるハゲるハゲるハゲ　ぎゃあああああああああ
あ」「エリカ！」キッチンからニル君の声が響く。

涙で炬燵布団を濡らす晴光君を一瞥し、エリカちゃんは綺麗にむいた蜜柑を手渡してくれた。晴光君のところに行こうにも、エリカちゃんかぎゅうぎゅう詰めてくるので抜け出せない。

「っーかさー、何でエリカ、イギリス人のくせにこんな　ジャパニーズ・スタイルな日本の冬満喫してんだよ」

「身の程を知らないさい晴光。アンタとファンちゃんとじゃ、オリオン座とサソリ座くらい相容れない対極の存在なのよ。復活が早すぎるわ」
リボン

「エリカはハーフだもんね。お母さんが送ってくれたんだよ」

にこにこ笑いながら、ニル君がキッチンからリビングへと帰ってきて、コタツに足を入れながら教えてくれた。机に置いたのはお煎餅だ。

「お母さんが日本人なの？」

「お父さんのほうだって、ね、エリカ」

「クソ親父の名前は出さないで」

「顔からなにまでそっくりなんだよね」

「へー……」エリカちゃんはとても女の子らしい顔立ちをして

いるから、とても想像ができなかった。

「ならお養母さんとお養父さんに感謝しないとなー……………」

その日以来、次のシーズンまで晴光君がエリカちゃんのコタツに入っているところは見えない。

閑話 金色の雫

『どうする気？』

薄い緑色の牛乳瓶からくぐもった、男とも女ともつかない声が響いた。瓶の底のほうには濃い色の靄のようなものが、絹糸のような線を引きながら渦巻いている。瓶の緑色にかかって、その靄の正確な色は分からなかった。

「どーするって……」

「食べるんじゃない？僕の仲間にいるんだよね、そういう子。話が終わったら自動的にそうなると思うよ」

瓶を覗き込んでエルは言った。『それはヤダなあ』のんびりと、靄は返す。

「さっきに比べて、ずいぶんとおとなしいね」

『だってさっきのとあたしは違うもん』

「……どういう意味？」

リユーがぼんやりと、黒眼を向ける。「さっきのと、君は違うの？」

『あんな屑っていうか欠片って言うか、そんなのと一緒にしないでほしいの。あたしはその核。源で、動力源。ついでに言えば、アレはあたしを構成する一つだけど、その残り滓だから大した力は持っていないの。あれはあたしの体の一つだけど、あたしはあんなの伸びた爪や髪と同じ』

「形を整えるためならいつでもバツサリ切っちゃうよ、ってこと？」

『伸びっぱなしでもサマになってる時はそのままだけだねっ』

えへん！と心なしか誇らしげな声で霞みは言う。

「じゃあ、君は何？」

『魂的な？魂の加工品？ピーナッツの入ったチョコって言うか、ただのパンとサンドイッチの違いって言うか、板付きのかまぼこ？これはちよつと違うかな？お鍋にご飯入れて雑炊くみたいな？』

「なんとなく分かった」

「えっそれでリユーわかつちやったの!？」

『飽きないから二度おいしい!的な』

「・・・ああ」

なるほど。釈然としないながらも、エルは頷く。「まだちょっと意味が分からないけど、そーいうニュアンスね」「そうそう」

「ところで君は、夜のネズミ、もしくは眠りネズミ、NYXのリーダー、知ってる？」

『知ってるかも?でも知らないかも?どんな人?』

「『赤毛』、『三日月』、『無い左耳』、『優男』」『あゝ!』

分かった!霞は瓶の中で飛び跳ね、歓喜の声を上げた。

『わかつた逢瀬の君でしょ!いやゝあの人も一途だよねっ』

「一途?」首をかしげたりユーをエルが制す。

『片割れをずゝと待ってるの。最近ほ探しもしてるみたいだけど。あたしとか使ってね?やっとな?やっとな?やっとな?動いたの!待ってたのなんてもう何十年も何百年もよ?あんまりなもんだから、逢瀬の君ってあたしたちは呼んでるけど』

「あの人がそんな情熱的だったなんて、知らなかったな」

『待ってるの!待ってるのよっ!』瓶の中がぐるぐる廻り始める。

「何?」「ちよつと!」

『此処にいるよ貴方は何処?ずっと待ってる、貴方を待ってる!貴方は待ってる?早く早くこつちへオ・イ・デ!』

欲しいのは君の赤!あたしの赤は君は欲しい?赤、あか、アカ!紅くれないはすべての色の事!』

靄は瓶から蓋を押し上げ、溢れるほどに膨れ上がっていく。「ちよっ・・・」

『早く見つけてあたしは此処よ!』

陽は落ちる！紫の空！黒をおとして星をばら撒く！！

青は遠いが金はこの手に！！

大丈夫、ダイジョウブ？大丈夫大丈夫！！　眼を瞑って、いち・に・さん、その手を伸ばして大丈夫！

あたしの力ちよ！海色は見てるだけ、空色は此処にある！！　焦がれるだけの紫なんてもう要らないわ！

欲しいのは命の赤と一寸先の闇の黒！！星も要らない、月も要らない！

どうかどうか泣かないで！！涙色も此処にはいらない！！

命の色が糸を引く！羽を広げて飛んでった！！その白は何の色？貴方に白は似合わない！！

あたしは此処よ！この手を引いて！糸の端は此処にある！此れの方にきつと居る！！！！

ぶくり

音を立てて瓶を伝って霞があふれ出した。霞は蜜のような金色で、どんどん広がっていく。

「エル離して！！」

『愛して愛して愛されて！！花束いらない、それなら薔薇を送りましょう！！　一輪だけよ？コインを飛ばして！

昼の月は光色の返す白！雲は流れる、水溜り！！濡れた鴉は雨宿り！濡れ羽は飛べない籠の鳥！

まわるまわる世界は回る！狂った猫が落ちてくる！羽をちぎって落ちてくる！！

僕らの腕に落ちてくる！！！！

あたしは此処よ！さあおいで！！きゃはははっ！！

「逃げられた・・・」

割れた瓶の欠片を見つめながらエルは眼を覆った。「あちゃーこれ高いのに」

「あつちが一枚上手だったね」リユーはエルの肩をたたく。「残念だった」

「ミーナ怒るだろうな。持って帰るって言っちゃったから」

「もう瓶無いの？」

「無い」

エルは肩を落とし、恨めしげにあたりを見渡す。

「この人たちはなーんにも知らないんだろうな」

「まあそうだろうね」

薄暗い荒れたオフィスで、二人の人間が眼を見開いて固まっていた。

「止ってるから」

序章 白銀の童子

【 異端者・三 】

希望が見えているものなんて居ない

それが何色かなんて誰にも判る筈がない

どれだけ目を凝らしたって、それがどの方向にあるのか、前にあるのか後ろにあるのか

太陽のように上で輝いているものなのか

足もとに転がっているものなのか

そんな形のないものが見えるものなんて、一人だっているわけがない

それなのに人は私を神と呼ぶ

希望だという

それが見えるものだと思じて疑わない

迷い惑って、同じ過ちを繰り返し、その行動を後悔する

それが出来る私が神とは如何に

正しい道かなんてわからない

ただ自分を信じているだけ

でももし間違った道だとしても、その先に結果として 『正しい』

と言われる、そんな未来があることも知っている

ずっと先の、未来の希望を手にしたければ確かに、間違いといわれる道を近道と進む方法があることも

私は神などではありえない

だってその、『間違った近道』をしてしまうのだから

様)

(佐藤 咲希著『幻空帖』 希望の神

走れ！

走れ！！

止めることは許されなかった。闇で動く真っ黒な塊が追ってくる。

聞こえたのは、アレ の声を聞いたのは一度つきり。

『誰だ！』

鋭い刃物のような声。その空気の振動。初めてだ。殺気なんてモノを感じたのは。自分の体のはずなのに思うように動かない。

チラリと見えた空は濃紺などではなく真っ黒で、隙間から零れる光のように青白い光が幾億と瞬いている。ここは僕が居た場所じゃない。だって、だってあんな光、見たことなんて無い。

違う世界だ！

こんな場所知らない。知らないんだ。何もわからない。なのに、なのはどうして。どうしたら

死ぬ？

嫌だ

まだ、まだだつて……

「あつ

」

砂が口に入った。舗装もされていない道。間近の砂はほのかに赤く、砂浜の砂のようにさらさらしている。

「う……」

走らなきゃ。「動くな」

首に当たる、氷のように冷たいナニカ。

嫌。

やめて。

殺さないで。

鋭くそれが貫いた。

空は遠く、伸ばすその手は届かない。
端から届くはずが無かったのだ

前にあるのはコピー用紙を閉じただけの小冊子。小さな活字が、小さな黒い虫のようにびっしりと埋まっているのを見て、ビスは小さく溜息をついた。ちらり、と隣の兄へ、白く長い前髪で隠された右目ではなく、裸の蒼い左目で視線を送る。「不安？」

「……いえ」

ビスは背筋を伸ばして椅子に座りなおし、机の上のモノクロのその紙の塊を見つめた。

「大丈夫です。自分は、出来得る限りのことを。選ばれた事は、それだけ評価された事と考えます」

「じゃあ決まりか」

「……はい」

擦れた声で囁くように言つて、ビスはその小さな手でそれを手にした。

「『此処にいるよ貴方は何処？ずっと待つてる、貴方を待つてる！貴方は待つてる？早く早くこつちへオ・イ・デ！』

欲しいのは君の赤！あたしの赤は君は欲しい？赤、あか、アカ！紅くれないはすべての色の事！！』

『ちょッ……』

『早く見つけてあたしは此処よ！？』

陽は落ちる！紫の空！黒をおとして星をばら撒く！！

青は遠いが金はこの手に！！

大丈夫、ダイジョウブ？大丈夫大丈夫！！ 眼を瞑って、いち・に・さん、その手を伸ばして大丈夫！

あたしの力ちよ！海色は見てるだけ、空色は此処にある！！ 焦がれるだけの紫なんてもう要らないわ！

欲しいのは命の赤と一寸先の闇の黒！！星も要らない、月も要らない！

どうかどうか泣かないで！！涙色も此処にはいらない！！

命の色が糸を引く！羽を広げて飛んでった！！その白は何の色？貴方に白は似合わない！！

あたしは此処よ！この手を引いて！糸の端は此処にある！此れの方にきつと居る！！

『エル離して！！』

『愛して愛して愛されて！！花束いらない、それなら薔薇を送りましょう！！ 一輪だけよ？コインを飛ばして！

昼の月は光色の返す白！雲は流れる、水溜り！！濡れた鴉は雨宿り！濡れ羽は飛べない籠の鳥！

まわるまわる世界は回る！狂った猫が落ちてくる！羽をちぎって落ちてくる！！

僕らの腕に落ちてくる！！！

あたしは此処よ！さあおいで！！きゃはははっ！！

その場の誰もが聞き入っていた。人数は10にも届かない。全体として、年齢は若く、中心に座るのは赤毛の妙齡の女だった。その傍らには黒髪の東洋人の男が座る。

音が消された後も、誰も発言しようとはしなかった。むしろ、音を立てるのを禁忌としているふうにすら見える。

ややあつて東洋人の男が立ち上がった。大きくない声はその場に響く。

「これは物語管理局の夢人の一人が接触した、憑依型の異端者が時

イレギュラー

間停止された空間で別に居合わせた異端者に言った言葉です。異世界を渡るにあたっての彼の装備は総て壊されていましたが、このテープのみは無事でした。異空間でも使えるよう強化されている音声記録機で、何かの衝撃で動いたものと考えます」

白銀の童子

「……何度聞いても、辛いものがあるね」

ぼそりと、一人のシルクハットを被ったブロンドの男、帽子屋が呟いた。「……こんなのって」

其れを始まりに、周囲も話し出す。フロックコートの淑女が確認するように身を乗り出した。

「……ねえ帽子屋、これはあの人だよね？」

「白兔、貴方はこの声を忘れましたの！？なんて事、あの方はこんな……！」

赤毛の女、Qは顔を手で覆った。

「ぶっちゃけボクにはわからないよ？あの人と過ごしたのはあんまり長くないもの。ねえ帽子屋、これは本当に……」

「ハンプティ！！貴方また……」

「Q、ナンバー2の君がそんなに取り乱したら駄目だろ。落ち着けよ」

「ジャックお黙りなさい！」

傍らで嗜めた東洋人の男、ジャックへとぴしゃりとQは赤毛を振り乱して叫ぶ。

「K！貴方はどうですの！！？あの方がこんな扱い……いいように使われて！！これを持ってきたのは貴方でしょう！！」

「Q落ち着こう」

「貴方まで！！貴方はわたくしの片割れでしょう！！」

「だからデスよ。Kアナタを止めらるるKだからデス」

中華服の老熟した雰囲気青年がQを見る。その向かいに座る彼女と同じ赤毛の少年は苦笑した。

「……分かりましたわ、イモムシ。ええ、落ち着きましょう。」

眠りネズミ、チェシャー、貴方方は発言していませんけれど、どうなのかしら」

伸びきった黒髪の男が頬杖をつきながら、眠そうに閉じた目を少しだけ開いた。

「まあ、主犯が俺と同じ『眠りネズミ』ってのがまず気に入らないね」

沈黙が落ちる。

「・・・ネズミ、Qがキレる前に悪ふざけはやめろよ」やっと、帽子屋が嗜めた。

「ああ。俺の元情報部長としての見解としては、彼女は彼女としての意識があると考えるね」

「あえて、こんな行動をしたと・・・？」

「ワタシもそれは同意します」

軽くイモムシが手を上げ発言する。「でも、完全に意識があるとは言切れない。『焦がれるだけの紫なんてもう要らない』これはチエシャー、貴方の事でシヨウ？あの人はコンナ事は言いません。貴方達夫婦の仲はミンナが知ってる。命令のナカに自分のメッセージを混ぜてイルと考えるのが妥当」

視線が奥に座る男に集中した。

紫に染めた髪の間から、切れ長の金色の目が光る。黒い服に白い白衣が浮き上がって見えた。

「お前からここ何年かで忘れてんじゃねエか？」アリス『は元から楽天主義の上、物凄く明るい緊張感の無い奴だ。そのくせ、誰よりも頭がいい。『楽しい事』のためならどこまでもする」

チエシャーは自身の黒く塗られた長い爪を見つめる。

「アイツは特殊だ。特別だ。なまじ頭がいいモンだから、突拍子も無いことをする。アイツを心配する頭も権利も、俺たちには無いんだよ。」

アイツは夢そのなんだから」

クツ、チエシャー猫は喉を鳴らして小さく晒った。

小さなランプの僅かな明かりが辺りを少しだけ金に照らす。絨毯もひかれていない、冷たい石の床でコツコツヒールの足音が響いた。

「始まったわ。やっと、やっとよ。今会いに行く」

彼女はそっと、その血のように紅い目に触れた。

「・・・今、行ってやるわ。今度の私には羽があるもの」

翼が闇を覆うように大きく広がる。紅い目は前を見据えた。ひび割れた姿見は黒いドレスの女を映す。

「私は貴方を見ているわ」貴方は私を見ているかしら。

白は何にも染まるただの白

それはその身をもって色を彩る

闇は背にして

炎は映し

光は共とし

空に守られ

愛の炎は手を翳す

真の白をもその見に宿し

すべてを觀し

涙を流す

「割に合っていないと思うんだ」

ニルが唐突に口を開いた。

曇りガラスがはめ込まれた木戸に鍵をかけながら、晴光は首をひねる。「ワリ？」

「何なのよいきなり」

「いやだから、この前の僕とエリカのと、晴光君とファンちゃんの仕事内容」

「今、エラールの話してたじゃないの。それが何で仕事内容になんのよ」

「いや、ごめん。何か急に……」「行くわよ」「あつ、ちょっと待ってよ」追いつき、ニルは少し考えてから話し始めた。

「いやだってさ、僕らはこの前やっと研修がおわったばかりの新人で、晴光君達もまだ一年目、僕らはパートナーを組んで6年経つけど、晴光君達はまだ一年半。」

チームワークもまだまだだし、経験不足。普通、魔法生物やら憑依型やらの仕事につける？」

足は覚えた道を進む。

「それはたまたまじゃね？たまたまそうなっちゃった、っていうか俺んとこの隊長もそういつてたし」

「私もそう思うわよ。魔法生物つつたって……ああでも、アレ一步間違えば」

「……そっか、一步間違えたら登場人物が最悪死んじゃってたよね」

「女子組正解。最悪その世界崩壊。新人二人で、そんな仕事っておかしい？」

「ええーマジかよ。何ソレ部下イジメ？成績悪いから？」

「さすがにそれは無いと思うわ。でもねえ……」
エリカがきゅっ、と眉を寄せる。「そりやおかしいわよね、だって少しくらい予想できたでしょ？なのに応援もナシに新人に任せるって……むしろチームとする仕事よね。何で気がつかなかったのかしら、少し考えたら分かるのに」

「……何かの試験、とか？」

「何のよ」

「……出世の？」

「えっと、それは昇進じゃないかな、出世じゃなくて」

「あそうか。ファンナイス！」立てた親指を突き出した。エリカの足が伸びる。

「『ナイス！』じゃないわよ」「いってえ！ひっヒール！ヒールは駄目だつて！！」

「ぎゃーめり込んで……ちよつと凹んでるううう」叫ぶ赤頭を視界にもいれず、エリカはふう、と息を吐いた。（「チヨツ……ファン！！血い出てない！？」「こつ、ここで脱がないで晴光く、きゃー！！」）

「考えても仕方ないわよ」

「まあ……今回の任務頑張ろうか。晴光くんファンちゃーん行くよー」（「こここつち来ないでえええ」「えええ俺達パートナーじゃん！」「パートナーだけダイヤー！！」）

晴光を一瞥し、ポケットに手を入れる。手元の白い紙に目をうつし、隣を歩くニルの肩をたたいた。

「ねえ、今回の合同任務、隊長の、この第五部隊のビス＝ケイリスクつて誰よ」

白銀の童子

「今回、合同任務の隊長を勤めさせていただきます、ビス・ケイリスク任務隊長です。よろしくお願いいたします」

静かに言ったその人間は、明らかにこの場にそぐわない姿形をしていた。

「あれ子供じゃん!!」

目を丸くして赤頭が叫んだ。石畳の薄暗い廊下には、その声が反響してさらに大きく聞こえる。無言でエリカは晴光を殴り棄て、先を急いだ。前を歩くカーキのマント型の制服を纏う小さな背中は何の反応も無く、ただ先頭を歩いている。傍らの『本』らしい長髪の、長身痩躯の男も同様だった。

（しらが、というよりは、はくはつ、の白髪。いや白というよりは色を反射する白銀？二人とも目が悪いのか……いやでもあれじゃあむしろ見えないし……）

『本』の男だ。小さい方は片方　右目が髪で覆われているのみであるのに対して、彼の両目は白いアイマスクで隠されている上、そのアイマスクに細かい厚い刺繍が施されているので透けて見えるとは考えにくい。

「何呆けてんのよ」エリカが小さな声で囁いてきた。

「……いや」

そういつて首を振ると、それだけでエリカは分かったようだった。

「まとまったら後で教えなさいよね」

「……エリカ知らない？ケイリスク兄弟」

出勤への道すがら、ニルが口火を切った。「知らないわね。それ今度の隊長のことなの？」

「うん……じゃあ『本』の禁忌は知ってる？」

「『多民族と交わらない』」

「そう。その二人は、その禁忌で生まれた兄弟なんだ。両親は本と夢人の元パートナー同士。

本だった母親の方は本家の令嬢。医学を学び、ファンちゃんと同じ肉体強化と薬学に定評のあった医師・青色のロキ。彼女は変人だっ
て噂があつて、父親の方の夢人はそれまで5回、パートナーを変え
てるんだ。本人の特殊能力のせいだっていうけど。

父親の方には親兄弟いなかったから、母親の方の家の反対を押し切
つて、二人は三年後に勝手に結婚、長男をもうけた。それが兄の『
本』の方。

今度の隊長になった弟は父親の、夢人の方の力を持っていて、誰も
あの二人とやりたがらないから二人でパートナーを組んでる」

「禁忌の子、ってやつなのね」

「うん。見たらすぐわかるよ。

『本』は髪とか眼とか鮮やかで色とりどりだけど、この二人は『
禁忌』にしか出ない『白』を持ってるんだ」

髪にね、とニルは自分のこげ茶の髪をつまんで見せた。

視点はまた石畳の廊下に戻る。

「……エリカ、最初に謝つとく。僕とファンちゃんはあの二
人に話しかけられないから、ごめんね」

「ハア！？何ソレ！！」

晴光よりも大きな叫び声に、前の二人が振り返った。「……何
か？」「すみません。気にしないでください」

「どういうことよ！」声を潜めながら口調を荒げるといふ偉業を成し遂げながらエリカが噛み付いた。

「全面的に禁じられてるんだよ」

「禁忌に関わるなつて！？そんなん言わなきゃ分かんないじゃない。今から行くのは異世界よ！？」

「いや僕は頑張るけど・・・ウチは分家でも厳しくない所だし・・・ファンちゃんは、ほら、本家に近い家の子だから、たぶん無理だと思うよ」

「本の一族って自由と結束がモットーのくせになんなのよソレ。人んちの家訓に文句は言いたくないけど、それって餓鬼のイジメ常套手段じゃないのよ」

「あはは・・・いや笑えないんだけど・・・」

ニルは小さくうなった。

「しかたないよ」

石畳の廊下の先、小さな、しかし繊細な彫りがされた半月型の扉があった。人を表す薔薇と本を表す蓮を掲げるそのの、ブロンズの取っ手に先頭を歩くビス「ケイリス」が手をつける。それだけで扉は内に開き、6人を招き入れた。

「・・・慣れねえわー」

色という色が混ざる空間は平衡感覚も上下左右の感覚もおかしくする。ばやきながら晴光はマーブルの空間に手を伸ばした。手はぬるりと色に埋まるが、感覚はあくまでも空気の上に乗っている、それだけだ。「視覚攻撃が半端ねエ」げんなりしてその手を引き抜いた。「感触があつたらぬちゃり、というかぬめり？ずるり？そんな感じだと思っ」

「馬鹿なこと言っていないでちゃっちゃんと進みなさいよ」

自分達の声と衣擦れの音のみが聞こえる場を進む。色は列の横をモ

ーセで波が割れたように避けて流れていく。

リン

100メートルほど歩いた程か。不意に、鈴の音が響いた。

リリン

『ボクは管理人です。今からどちらへ？』

「座標RV10へお願いします」

甲高い、姿なき声にビスが答える。

『明るい桃色ですね。わかりました。バッチを拝見・・・』

はいわかりました。夢人ですね、ではお氣をつけて」

感情の無い単調な声がゆっくりと言ひ

リリン・・・リン

音は弾むように鳴りながら遠ざかっていった。

「いつも思っただけど、あの管理人ってどこから見てるのかな？」

「さあ？管理人だもの、どっかで見てんのよ」

「今回するのは、この世界で連続して召還される異端者の殲滅です。
イレギュラー

原作は『サンド』、場所は城下の門と塀の付近です。主に夜中、憲兵にその姿が見かけられています」

陽はすでに低い位置にある。

顔半分を赤く染め、砂埃が舞う乾いた道の端、閉店間近の露天の影で6人は顔を付き合わせた。街の外れも外れだ。客の来ない場所で太ったいかにも気の弱そうな店主が大きな体を小さくして目を閉じて座り込んでいる。

「連続・・・ってことは」

「他の異端者は憲兵に捕縛され、処刑されました。この世界は危険のため、これ以上犠牲者を出すわけにはいきません」

「じゃあ、召還されるのは一般人ばかり？」

「はい。どれも学生服の子供ばかり」

「召還師は？」

「今回の場合、召還師はすでにこの世界の他の罪で連行され、処刑されています。残った陣と魔力で勝手に召還が行われているものと推測がされています。以上ですが、何か質問は」

淡々とビスは無感情に言葉をつむぎ、隠されていない方の蒼い左目で右からエリカ、ニル、晴光、ファンの順で見た。首を振ると、「では、」と今度は作戦について話し出す。

無表情の弟に対し、兄のほうは目元が見えないにもかかわらず、常に笑顔を浮かべていた。ニルとファンはその宣言どおり、二人には話しかけもしないうえに、視線も合わせない。

（やりにくいっつの・・・）

エリカと晴光の意見が一致した。

夢人の力は『世界を渡る』力だけではない。

『想像力』。

それはただ、頭の中でのものを再現する、もしくは創り出す、それだけの力ではなく、人間だけが平等に与えられた『創り出す』能力だからこそそれは『創造力』とも呼ばれる。

しかし人はそれに気がつくことは無く、存在すら皆無である。理由は簡単。『目に見えないから』。『想像力』の影響は、他の世界に現れることが多い。筋書き通りに進められる物語世界がその典型だ。力は集まれば集まるほど、想えば想うほど、物語はより確かな輪郭を持つ。愛されれば愛されるだけ、物語はより確かにより確かに世界を支える柱となる。

能力増幅剤としての『本』が行うのは、その力の増幅、人一人で、数万人分の『創造』を。

だから、夢人は本が必要なのだ。

麻の長いマントを鼻先まですっぽり被り、そろそろと暗い乾いた道を進む。現地調達のマント姿は怪しいことこの上ないと思っていたが、陽の落ちた町ではそんな怪しげな団体も多く、憲兵の視線は痛い^イがそれだけだ。

始めて見たケイリスク兄弟は、『全体的に白い人』というのが、晴光の感想だった。

（女の子だったら、5年後が楽しみな感じなのになー・・・）

先ほど穴が開くほど見た顔を思い出す。白い長い前髪でよく見えなかったが、弟の方は小さいながらも可愛い、というよりも美人、という感じだった。人形のように無表情なもの、白いを通り越して生気が無いほど青白いのも便乗していると思う。兄のほうは、禁忌^{カギ}の子^コといってもやはり本らしく、腰まで長い白髪を三つ編みに垂らしている。また系統は違うが、常に笑顔でその上、すっぽり目元から鼻筋まで隠すアイマスクときて弟と並ぶほど白い肌、さらに作り物らしい。

（あれどうやって見てんの？心の目とか？　うわなんかマジでできそうあの人・・・）

つい、先ほどのことだ、無言でニタリと笑いかけられたのは。ぶるりと晴光は身を震わせた。迷い無くケイリスク兄は進む。（あれむしろオレより見えてんじゃね？）そう思わせるほどに障害物も難なく前を彼は歩いていった。

その彼の足が止る。

「・・・んん？何？」

「・・・着いたのよ」

召還師の遺した場所に。

「風が吹いたら壊れそう、ってところを想像してた」
しつかりとした建物だった。

ささやかだが少なくとも貧乏な人間の住居ではない。泥を固めた壁は上に石をかぶせてあり、隙間など到底無い。屋根も雨漏りなど無縁なように見える。

「……召還師って、儲かんの？」

「占いとかもしてるわよコイツ。外にマントのやつらがウロウロしてたじゃない、流行ってんでしょ。それじゃない？」

晴光には到底わからない銀のカップと模様のかかれた紙の束を見せた。「模様じゃないわよ文字よ」

「エリカって魔女だったんだあ……」
「……訓練で魔法使ってたでしょう？私、魔法以外で戦闘したことないわよ」

「エリカ」

しつ、とニルが指を立てた。

「……居ます」

そつとそれぞれパートナーに近づき、何処かしらに触れた。あわせ
て音も無く融けるように三人が本に変わる。
それを開いて片手に持ち、構えた。

奥の扉が開く。「……あんな扉、オレ気がつかなかった」

「……っ」

闇の中、息を呑む声。

「まっ……待て!!」

ギヤザースカートを翻し、肩をひそめて小さくなりながら、転がるように少女は入り口に突進した。

白銀の童子（後書き）

本の一族は3つの本家とそれに順ずる四つの分家で構成されています。

白銀の童子

すばやく入り口に一番近い晴光が立ちふさがった。少女はたたらを踏み、すばやく大きな瞳を動かす。少なくとも外に続くのはこの扉だけだ。

『い いやあ 』

親指を拳に固めて守るように体の前でクロスした。首を振る彼女はゆつくりと後ずさる。

耳に鳴れない言葉に、エリカはイヤリングの翻訳機へ手を伸ばした。『ま、待て待て待て。落ち着けよ 』

震えながらぼろぼろ涙を流す彼女に、晴光が早口で何事か口走った。『オレ達何もしねエから 』

『 ゆ、ゆうかいは、 』 『ち、違うつて！！な？ 』 ばさりとフールドを取る。

『オレら、たぶんそんな年変わらねえし！ 』
『ふ、ふりよ 』

『オレ超マジメだから！見た目で判断すんな！！ 』
大声にびくりと肩を跳ねさせ彼女は固まった。『大丈夫、味方だ 』
少女の強張った肩がわずかに下がる。
震える唇を噛んで、黒い目がこちらを見つめた。

『落ち着いたか？ 』

『 』
頷く。

『 言葉が分かるならアンタが話した方がいいわ 』
『お、おう。頑張る 』

『まず、此処に来る前、何をしていたか、話せるか？ 』

知らない場所だった。

冷たい床はコンクリートでもフローリングでもない。そこに、気がついたら立っていた。窓からは真っ赤な光。部屋はやけに暗い。ドアが一つあったから、ちょっとだけあけて見てみた。ここよりもずっと、暗い部屋があった。でも、絨毯がひいてあったり、壁にモノがかかっていたり。

人が居る

ここは人が住む家だと、そうわかって少しほっとした。一人が無性に怖かった。でも、この家の住人が悪い人だったら？もし、その人が私を連れてきたんだったら？

逃げないと

心臓はバクバク鳴っている。どうか帰ってきませんように！冷静になろうと、手をつなぐように両の手を結んだ。まず、もう一度もとの部屋に戻って窓の外を見た。

そこで始めて、ここが私の知らない、外国だと知った。

外を歩くのは褐色の肌の人達。黄色人種と黒人種の間みたいな人達。言葉は？無理だ、英語も習いたてで文なんか作れない。発音だ

って、外国人の先生は褒めてくれたけど、単語一つの発音が巧くたって。

口を結んで、手を握りなおして、じんわり汗が流れたのを感じた。冷や汗というものは本当に出るんだ。

呆然としていると、音がした。次に話し声。小さな声がぼそぼ聞こえる。1人や2人じゃない。言葉は分からなくてもいつぱいいるのは分かった。何かを探している、何を？ 私を？

何をされる？何をなにを？何？不審者が出たとき、そういうことを学校で習った。知識はある。けど、具体的には知らない。何を？テレビでそういうことは見たことがある。

都市伝説の番組で、確か超能力者が

親に依頼されて行方不明の息子を

『息子さんをあちこちで感じます』

じつはね、この話、

彼が臓器売買されてたっていう話ですよ。

血の気が引くとはこういうことだ。

気がついたら体が勝手に動いていた。

ちらりとさっき、思ったんだ。『逃げるなら、不意打ちを狙うしかない』

目測で数メートル。それだけの距離で、2度、転びそうになった。足元が絨毯をすべるたびに、体が氷付けにされたような錯覚を覚える。人はたった三人だった。もっと多いと思っていた。マントの人は大きいのと、中くらいのと、小さいの。中くらいのが叫んで、大

きいのが私の前に立ちふさがった。小さいのだったら良かったのに！状況がいつぱく遅れて頭に届く。「い　いやあ　」我ながら情けない声が出た。あれだけのことをしたのに、こんな、こんな声しか出せないなんて。

「オレ達何もしねエから」

大きな人は言った。嘘だ。

「　　ゆ、ゆうかいは、」「ち、違うつて！！な？」ばさりとフールドを取る。

「オレら、たぶんそんな年変わらねえし！」

確かにそう見えた。三年の先輩くらい。でもまず、真っ赤な頭に目が行った。

「ふ、ふりよ　」不良さんだ。「オレ超マジメだから！見た目で判断すんな！！」

「大丈夫、味方だ」なんて、嬉しい言葉。

「落ち着いたか？」でも、信じていいの？本当に？

後ろの中くらいの人と、元の言葉で大きい人は言葉を交わした。ねえ、それは私をどうするか話してるんでしょう？そう思ったらまた体が強張った。何？何なの？大きい人は口を開いた。

「まず、此処に来る前、何をしていたか、話せるか？」

此処に来る前？

閃光が、走る。

部活、そつだ、部活で、応援、大会で、駅ホームで？

「雨じゃん。中止にならないかな？」

「屋内だもん」

『列車が通過します。白線の内側までお下がりください』

「あつ」

列に並ぼうとして

チラリと映ったグレーのスーツ

針のような雨

手を離れる傘

黄色の点字ブロック

黄色と黒の乗り越え禁止のロープ

親友の黒い後ろ頭

下で砂利が その下には線路

電車？

「 いッ」

「ひいいやあつあああああああああ
あああああああああああ」

傘、雨、電車、応援、落ちる、骨が、
エリカがやっと設定できた翻訳機で拾ったのは、この単語だった。
次に悲鳴。

一瞬で分かる。傘、雨、電車、で、エリカは気が遠くなるのを感じ
た。そして、『落ちる』、でこちらを確認するように振り返った晴
光の蒼白の表情。その予感のすぐの『骨』。悲鳴。

【最悪の事態】、だ。

白銀の童子

体液を撒き散らし、髪を振り乱し、口から吐き出されるのは言葉にもならない悲鳴。

「死^ししてさえ安息は許されぬのか、

その台詞が浮かび、泣き叫ぶソレに、エリカは思わず目をそらした。魔女であるエリカにとって、その術の知識はある。

実際、それを数多使った犯罪者も、エリカの故郷には居たらしいし、どちらかといえばそういった闇の魔術と言われる魔法を戦闘要員の調整部を選んだ際に散々調べたものだ。さらにいえば、魔法だけではなく、力というものには、植物にしる動物にしる、生命なくしてはありえない。

少女に外傷は無い。服にも真新しさがありりと伺える。

「何でよりにもよって……」痛む頭を抑えた。

呆然と晴光は立ち尽くしている。

「ちよつと、しっかりしなさい！ 仕事中よ」

苛立たしげに肩をつかんで見れば、蒼白で震えていた。「……これって」擦れた声で問う。

「見れば分かるでしょう。突っ立てるんなら邪魔よ。どいて」「いやでもっ」

「ああああなたたちでしょう」

声は揺れながら掠れていた。「アンタ達でしょう！？ こんな事したのはっ！！！！」

「……違う」「うそうそうそ！！だって知らない！ あたし知らないもん！！知らない知らない知らない知らない知らないしらないしらない……ッッ！！」

彼女は腕を広げてエリカに掴み掛かった。「知らない知らない知らない知らない……」うわ言のように呟く呪詛と息が間近にかかる。「あつ、おい！！！」晴光が慌てて取り押さえ羽交い絞めにした。「
何でアタシなのツツ！！？」

パスンツ

それが合図だったかのように、空間を斬り進む音と共に、騒音は消えた。

構える鈍色からは薄く小さく煙が上がっている。ビスはフードの下で小さく息を吐くと、目の前に差した影を見て手元からそれを消した。

「何で撃った！！」

「それが必要だったからに他なりません」

ぐん、と視界が揺れる。勢いで『本』とフードが落ち、晴光の赤茶の目が一時丸くなるのが睫の一本一本が見えるほどの距離で見えた。「彼女は、もう、死んでいます」

幼子に言うように、ゆっくりと言われた言葉に、震えながらゆつくりと踵が床につく。入り口近くの床を見ると、すでに骸はエリカが送った後だった。

「仕事が速いですね」

「…………まあ」エリカは肩をすくめる。「…………時間は無駄にしたくないですから」

晴光はそちらを見なかった。

金の波紋が、瞬くように円を描いた。

当たり前といえば当たり前だ。

帳は下りて光源がなければ、互いの顔も見えない。その中でぼんやりと、しかし確かにそれは存在を主張するのだから。当たり前だ。闇が迫る。

その金は音も無く、その主と同じに淡々と、光の波紋を描き続けていた。

「……………行きましょう」

気がついていないわけは無いだろう。晴光を除き、それぞれ色の違う三対の目が向けられている事になる。

これだけ視線が彼の目に集中しているのだ。いくら暗かろうと、戦闘要員の調整部にいる人間、気がつかなければ逆に仕事にならない。しかしビス・ケイリスクは変わらず、こちらを見もせず、さつさと召還師が遺した道具を回収すると、前だけを見て、兄の手を取った。

白い髪に隠れていない方の蒼い左目は、瞳の中心から外側に向かつてその名のとおり、光の波紋が綺麗な円を描いて広がっていく。暗い中では隠された右目も、その主張を隠しきれてはいなかった。

ただ左と違うのは、その光の力強さ。右と左では昼と夜ほどに差がある。蒼色に広がる光はさながら昼の白い月か。なら右はそのまま夜に浮かぶ蜜色の満月だ。

沈黙が保たれたまま、一行は数時間前くぐった扉を閉じた。

「エリカ」アイリーン「クロックフォード、本・ニルとのパートナー暦は現在6年3ヶ月。調整部第五部隊新人隊員。魔女。

ゆるく湾曲した刀に酷似する刃を持った剣が主な戦闘武器で、スピードとそれを媒体にした魔法を合わせた近距離、中距離も出来るオールドマイティー型。本であるニルとは、研修時代から組んでいる。恐らく今の新人の中では一番長い。

杖腕は右、材質はサクラと白い羽の芯27センチ・メイドイン・母なんだそれ。

パートナー共に、成績優秀、模範的だが、共にマイペースで協調性に欠ける部分有り。たぶん無自覚。

えー……懸念する点は、平均3年の研修を倍の6年かけてしていること、原因として、渡りトリップの力が以上に強いため、研修途中での離脱等があげられる。

はい次、

セイコウ シュウ

晴光「周、本・ファンとのパートナー暦は7ヶ月、約半年前に第四部隊に異動した際、前任のパートナーが故障により辞職したため、パートナーを組む。前述の通り調整部第四部隊所属。第四部隊らしく、本による肉体強化を中心とした肉弾戦が主、というかそれしかない。

えー、入隊二年前当時は、平均3年の研修を1年で終えた天才といわれていたが、現在伸び悩み、中の中、もしくは下。本人いたって気にした様子は無く、やや問題児扱い。性格は明るく猪突猛進、趣味がバスケット、RPGゲーム。『こいつは阿呆だ』第四部隊長始め第四部隊員談。

パートナー・ファンは医療系サポートを得意とする。人間の体を熟知するため、肉体強化は十八番。気は小さいところはあるが、周隊員をたった半年ながら信頼しているらしく、早くも兄妹のように仲睦まじい様子が見られる。以上だけど、質問はー？」

「ありません」

「あそう？」

ビスは兄から紙の束を受け取ると、頬杖をついてそれを眺めながら溜息をついた。体重をかけたテーブルはギリギリと音を立てて軋む。

「買い換えなきゃねエ・・・あ、お茶いれたけど、飲む？」

湯飲みを受け取るが、手に持ったままで溜息を零す弟に、ステイールは苦笑を漏らしつつ茶をすすった。「難儀な子だねえ、お前も」

「・・・いえ」

「まあ頑張りなよ。家の事はちよちよ俺もするからさあ。またちよつと顔色悪くなってるし。薬飲んでる？」

「飲んでます。兄さんもですよ、お互い様です。それにこれは必要なことですから・・・」

「あーもうまた溜息ついちゃってー」

ステイールは身を持ち出し、ぐいと手を伸ばした。弟の白い頭を混ぜっ返す様に撫ぜる。「ビスは天パねえ・・・誰に似たのかしら？お父さん？」「兄さん気持ち悪いです」

その日は雪が降った。

白銀の童子（後書き）

更新がいつもより遅くなりました。

白銀の童子

「なんか今日暑くね？地球温暖化？」

「それは・・・訓練帰りだからだと、思っただけど・・・」

「ここに温暖化は無いよ」

「本の人達、エコな暮らししてるものねえ・・・」

風は冷たかったがしかし、道の端には春の野草が急くように花をつけて揺れている。

季節は、春。

「ちよつとー！一緒に行くつつったのはアンタでしょうが。たかが着替えに何分かってんのよー」

「『女の身支度は長い』って言うじゃん！ー」

「アンタいつから女になったのよ！」

「ファンちゃんならもうここにいるよー」

「うお、マジでか。じゃー今は水被って女の子デース」

「シャワー浴びてる時間は無いよー」

「馬鹿界の新星ねアイツ」

吐き棄てるエリカに、ニルは苦笑し、ファンは嘔き出した。エリカはいつもの黒いシャツワンピースの制服の上に、黒いコートを羽織り、淡いレモンイエローのマフラーをさらにきつく首に巻きつける。

「いやー待った？」

「待った待った」

「これ探しててさー」

じゃーん

見せたのは日よけ部分が緑色に透けたサンバイザーだった。「ダサッ！ー！」

「え、カッコよくね？」

目を丸くして、晴光はそれを陽に掲げてみせる。「どーよ」

「いやダサイよ・・・それは」

「・・・付けていくの？アンタまさか」

「いやーこの前装備全部壊しちゃったじゃん？装備って見た目似たようなのが数も種類もあるからさーオレもうドレがドレだかわかんねーって、専門店のねーちゃんに言ったら『試作品なんだけどー、どう？』って格安のサンキュッパで貰ってさーほとんどの装備コレ一つに入ってるんだって。凄くね。んで、ほら」

じゃじゃーん

横のつまみを下へスライドすると、目元にサングラスが下りた。

「どうよ！！？」

「どうって・・・」「さらに！！！」ビシ！「もうひとつ！

！」と人差し指を立て、額部分に埋め込まれた石とファンの手首の数珠とを指し

「なんと！オーダーメイドのクォーツ！」

「それは凄い」

「その値段でその数のクォーツ作ってもらったんなら・・・」

満面の笑みの晴光とはにかむファンに反してエリカとニルの顔は渋い。

「でもそれならクォーツだけ作ってもらった方が良かったじゃない」

「僕らも数珠をペアで作ってもらったけど・・・うーんでもアレ、完全オーダーメイドだし、機会があつたときに作ってもらうのがいいよね・・・」

「まあファンちゃんがいいならいいけど？限られた職人さんしか作れないっていうから、あと二十年もすれば誰も手に入られないって言うわよ。体の一部を混ぜるから、人によって色も違うし、代えは利かないし」

「結束力が増すっていうよね。晴光の色はどっちの色？・・・まあ訊くまでもないか」

ファンの手首に収まる数珠は、石榴の実のような赤と淡くもはつきりとした桃色が交互に収まっている。「おいしそうな色よね」

「何それセクハラ!？」

「馬鹿ねー。欲望に忠実そうな色してるっー意味よ。血みたいで綺麗じゃない。ちよつとニル、今何時？」

「え？あ、9時22分。ギリギリ」

「ちっ、遅刻!？」

「ギャーーーー!」

「走ったら間に合うよ!」

四人は全力疾走した。

閑話 四月八日 喫茶ASTERにて

きゅっ

磨き終わったグラスと布巾を置いて、シオンはやっと終わったばかりに腰をたたいた。捲り上げていた着流しの袖を下ろし、濡れるからと脱いでいた羽織を着る。

和服姿のシオンは、白と茶で構成された、フローリングの床の店内に酷くアンバランスだったが、それを彼は愛おしげに見て息を吐いた。

「終わりました？」

「うん終わった終わった」

顔を出したバイトはパタパタ スリッパを鳴らしながらエプロンを翻し、『オープン』の入り口のボードを出しに行く。「いやア、今日はいいー天気っスよオ。このボヤツとした感じがなんとも」今日は曇りだ。

「開店の時間だよ」

「はいよー」

「最近忙しそうだね」

「そーそーてんちよー！」カウンターに座る子供がスプーンを持った腕を振った。

「ボスがさ、すっごい計画立てたらしくてね、あたし達、しばらくすつつごく忙しいんだって！」

「こらミーナ」ドレス姿で身振り手振りで話す少女を隣の保護者の男が嗜める。

「僕らもこの前、リーダーに言われて行ったよー」

「・・・失敗したけどね」

「僕ら成功率98パーセントが売りなのにね・・・」

溜息を吐いてグラスの中身をすすった。落とした肩を、隣の相棒が叩く。

「エル・リユーコンビが一番手なん？ウチらはまだいつ行くかすら決まっとらへんで」

「オレらはまだ先やる。双子が次くらいちゃうか、どやねん」

「え、マジで？」氷だけになったグラスをスプーンで弄んでいた手が止まる。

「めんどくさ」「今私達は別件で忙しいんだよね」

「別件？あんたらそんなんあったっけ？」

「そうそう聞いて聞いて」「この前置いてきちゃった合成獣^{キメラ}、誰かが放したらしくてさー、マーケティング付けばなしだったからもー」

「術がイカレちゃって。手放したっても可愛いわが子なのにあっさり逝っちゃったらしいし」「他のも術の異変に上へ下への大騒ぎでいくつか卵駄目になっちゃった上に、そのせいで桜ちゃんの胎教に悪い悪い」「興奮してダンナを襲いだすし、子供食おうとするし」

「もう散々」

「もう散々」

「大変だったねえ・・・」

カウンターに身を乗り出され、ユニゾンで言われた言葉にシオンは頷いた。

「アンブレラさんは今仕事は？」

細い目をさらに細めてミスアンブレラは頬に手を当てた。指先で顔にかかる真つ青な髪を後ろに掃う。

「情報屋の方の仕事が五件ほど、^{ドーマウス}DORMOUSEの仕事はまだ未定ですわね。でも長丁場^{ながちようば}になると聞きましたので、この仕事で『情報屋UMBRELLA』はしばらく休業ですの」

「長丁場・・・って、どれくらいなのさ、アンブレラ女史」

双子の片割れが不機嫌そうに聞いた。

「そうですねえ……あの人がどう考えていらっしやるのかは判りませんけれど、恐らく長ければ一年、もしかしたら二年、さらにはもっと」

「えー……」

揃ってその場のものが渋顔を作った。「あら」

「わたくし私達はDORMOUSEじゃありませんの。夢を見ないでどうします。小さな赤毛の鼠のために、その子供達は頑張るのですわ」
微笑む彼女と溜息をつくDORMOUSEに、ねむりネズミシオンはそっと、おかわりを差し出した。

閑話 四月八日 喫茶ASTERにて（後書き）

話数を数え間違えていたので、予定を急遽変更して、次回より本編開始です。

一章 うつし色の異端者（前書き）

本編突入企画リクエストお願いします！

一章 うつし色の異端者

黒は染まる事のない闇の黒

其れは力を以つて色を飲み込む

夜の常闇は総てを包み

命の炎をも色に染め

無垢なる雪白を背にたつもので

光に従い光を従う

空は隣人

愛の炎は静かに燃やす

灯した光は星の色

延びる軌跡は情の色

高貴の色はその身に宿す

赤は燃える身命の色

それはその身を燃やして其の色とす

文明の炎は宝を灯し

その雪白へ色を映し

闇を父とし

光を母とす

空は焦がれる

愛の炎は宝とす

溢れた炎で色を焼き

然し其れは戻らない

然し其れは其処にある

白は何にも染まるただの白

それはその身をもって色を彩る

闇は背にして

炎は映し

光は共とし

空に守られ

愛の炎に手を翳す

真の白をもその見に宿し

すべてを觀し

涙を流す

赤は白に成りえず

青にもなれず

地に落ち混ざり

黒と成る

カンカンカンカンカンカンカンカン！

たとえばそれは、近所にあつた踏み切り

たとえばそれは、朝を知らせる目覚まし時計

たとえばそれは、おもちゃのシンバル

たとえばそれは、遠くで響くサイレン

たとえばそれは、

たとえば

これは警告だ。

警報は騒音として、この頭の中にただ響いた。

どろりと黒いそれは、触れてはいけないものであると、ただ、ただ音は知らせた。

しかし所詮、音は知らせるだけであると、しっかりと僕は意識した。どうする？どうする？？

決めるのは

考えるのは、

たとえばそれは、目の前に落ちた、自分だけの爆弾だった。

「見ているか？」

彼は問う。「見ているか？」

「人の不幸は蜜の味というものなア。見て、それを、お前はとうしたかった？聞いて、それをどう考えた？

この世界でお前は一人きり、僕もそうだ。

お前の中身は誰も見えない。お前のしたいことは誰にもわからない。お前の求めるものは誰も知らない。

お前の夢は何だ？

お前の色は何だ？

お前の は何だ？

何をしたかった。何に成りたかった。何が欲しかった。欲なぞ数多あるだろう。お前はどれを選び、どうして、どう成った。

間違いだったのではないかい？すべて、すべてはお前のそれが、中心を壊してすべてを狂わせた。否、中心でなくとも、その一つを確かにお前は壊したのさ。

大切な、大切に、お前ではなく、誰かにとっては何よりも大切な、中心、核となっていたものを。核と、なるはずだったものを。

さあ見てどうする！どう考える！！どうしたい！！！

お前の世界はお前の両手の届くところまで、見えるところまでしか無いんだぞ！？お前はひとり、僕もひとりだ！」

彼は問う。

お前の世界をお前はどうする？

うつし色の異端者

「何で オレら、朝っ ぱらから、走ったんだ っけ？」

「そ、それは、晴光が っ、はあ……」

「 アンタ馬鹿よ……やっぱり」

私は溶けそうです。

こういうとき、さすが調整部の人間だと思う。一番早いのは男の子で体力のある晴光君で、次に意外にもマラソンは得意らしいニル君、次に短距離は得意だけど、と言うエリカちゃん、最後に私、ファンだ。

医療系サポート重視の私だから、最後のほうはほとんど晴光君に引っ張ってもらっていた。今は息が続かず、言葉も出せない。

やっぱりというか何というか、晴光君・エリカちゃんは乱れた息もすぐに立て直している。ニル君も肩で息はしているものの、笑っているので大丈夫らしい。ああ情けない。少しでも鍛えた方がいいのだろうか。

「おいファン大丈夫かー？何か死にそうだぞー」

すっ、と晴光君が手を伸ばす。

（きゃー！）

背中をさすってくれるのは有り難いけれど、心拍急上昇で死にそうです。（違う意味で）

「 エ、エリカちゃーヘルプ！

視線で語りかけると、エリカちゃんは肩をすくめて「ホラホラアンタもー少しくらい女心を察しなさいよ！」と晴光君を蹴散らし……。蹴散らし？引き剥が、引き剥がし？て、（何か生々しい……。けど、二人はこんな感じ）変わりに隣にエリカちゃんが立った。私服では高いヒールなんかを履くエリカちゃんは、一つ上と思えないほ

どかつこいい。

「ファンちゃん大丈夫？行こうか」

ニル君がにっこり笑ったので頷いた。

四月の新学期ということで、物語管理局の夢人課では、調整部と案内部合同で集会のようなものがある。今期の目標、2、3人ほどの新入部隊員の紹介、もろもろを一番広い調整部屋内にある修練場で行う。

晴光君いわく、『学校の始業式みたい』で、それより少し小規模で真面目でささやかな感じ、らしい。

修練場は半分だけ吹き抜けがあつて、丸く空が覗いていた。並びは部隊ごとに並ぶけど、まだ集合がかかつてないので適当だ。

「あれ？」

ぽつん、と白い人。同じく気付いた晴光君が、エリカちゃんの肩をたたく。その人はゆっくりと私達に近づいてきた。厚い刺繍の目隠しは存在しないかのようにまっすぐこちらへ。

「ああ、やっぱり。君達か」

うつし色の異端者（後書き）

副題、オカン・ニルと子供達。（末っ子視点）

うつし色の異端者

エリカちゃんはちらりと私達を見る。私はそろりと視線を下げ、彼女は「しかたない」というふうに関を軽くすくめて直った。

「お久しぶりですね」

「ああそうだね」

「で、何か？」

うつすらとエリカちゃんは微笑んで見せた。

「うーん・・・別に何かってわけじゃあ無いんだけど」困ったように、本のお兄さんは笑う。

「見かけたから、挨拶しておこうかと思ってね」

ピー ガガッ

正面に添えられた調整をしているらしい、マイクのスปีカーからノイズが響いた。

「そうですか。こちらこそ、また機会があれば」

「いやー、その機会がありそうだから、こうしてね」『ア、アア

ー、マイクテスト、マイクテスト』

突然のマイクテストの声。あんまりにも『いかにも』な言葉に、周囲から色んな笑いが漏れる。思わずそのマイクの持ち主を見た。

『アーマイクテスト、マイクテスト。もういいですか？ハイその

まま聞いてくださいねー』

ピエロのような、白い仮面が笑っていた。

「ちよつ、アレ局長じゃないのか!？」

ざわり。その場の空気が硬くなる。

『あーいいいいいよそのままで』その言葉に並ばなければと動かそうとした足を止めた。

『ちよつとお知らせをボクの方からしようと思ひまして、壇上に上がって来た次第です。あ、ここ壇上じゃないか。まあいいわ、その

まま聞いてね』

男の人にしてはかん高い声。私達は静かに前を向く。

「行こうか」

手が私の肩を押した。「え？」

「ほらほら君達も。静かにね」本のお兄さんは唇に手を当てて、二
ル君の肩にも手を置いた。「早くしないと」

「は？」

「何なのよ？」

「君らもだよ」

されるがままに進む。いぶかしげに周囲の人間が私達を見た。『は
いその君達ー』

びくりと私を含めた四人全員が肩を揺らし、「どうしてくれるんだ」
というような視線を送る。『こちらへ』

「え？」

『ほらア、こつちこつち』

一斉に沢山の目が私達を見た。心臓が縮み上がる。肩に置かれた手
が私の肩をポンポンとたたいた。

『調整部第四部隊・晴光』周、およびその本ファン、

調整部第五部隊・エリカ』クロックフォード、およびその本ニル、

そして同じく調整部第五部隊・ビス』ケイリスク、およびその本ス
テイル』ケイリスク以下三組を隊員とし、

ここに、調整部第六部隊を設立する事をワタシ、物語管理局長ロメ
ロ＝V＝ミアノは宣言いたします』

うつし色の異端者（後書き）

「あの黒髪綺麗系美人は性格絶対キツイよ。なんていうの？俗な言い方すると女王様系？でも同年代みたいに髪も染めてないし、仕事申しか会った事無いけど、隙が無いし、絶対浮いてるよ、アレ。もうひとりの本の子のほうは可愛い系だけど、あと三年ですごいことになると思うんだよね。ああいうのに限って、五年後とか同窓会とかに会ってもう人災並みに垢抜けて可愛くなってるんだよねーコレが。お化粧とかしちゃってさー」「兄さん」「ん？あ、でも黒髪はアレかなー私服で会ったらそのギャップにくらっと来ちゃう感じ？女の子って変わるからなーでも二人とも肌綺麗だったし、スッピンであれだけあったら着飾ったらもっと凄いと」「兄さん」

「んん？何？どうしたのビス」

「もう、いいですから」

「あ、そう？」

うつし色の異端者

私達四人の表情が一瞬で変わった。エリカちゃんは無表情で機嫌が悪い。ニル君は蒼くなつて顔が引きつつていて笑顔はない。「え！？は！？ええ！！？」晴光君はわけもわからず、頭を抱えたり、あたりへ視線を送ったり、蒼くなる暇も無く状況把握に騒がしい。私はといえば、誰よりも真っ青になつて、誰よりも放心状態だった。

『では挨拶を』

『では挨拶を』

前だけを

前だけを見て。

顔色の悪い小さな白い子供が壇上に上がってきた。紙の様に真つ白な顔色で、マイクの前に立つ。

背を伸ばす。

顔を上げる。

光の波紋は今はない。

『第六部隊の隊長に就任いたしました、ビスケイリスクと申します。この度は大変重要な任に着かせて頂き、大変光栄に思っております。まだ新米ゆえ、ご迷惑をおかけする事も無いとは言い切れませんが、今回の機会を人のためとなるよう、存分に力を発揮する次第です』

そこから始まつた言葉は、そう長くは無かつた。

『先鋭第一部隊、サポート第二部隊、柔軟な第三部隊、戦闘の第四部隊、快活の第五部隊。それぞれ特色はありますが、第六部隊は隊

員数六人と第一部隊以上の少人数のため、狭くとも深く、その存在を残せればと思います。この度は有難うございました」

深く礼をしてビスは後ろに下がり、右端 兄の隣に立った。入
れ替わり、また局長がマイクを手にする。

『今回の新部隊設立は隊長含め、入隊五年以内の新人です。目的として、特殊な任務に対応できる新人の育成を掲げていたりします。先ほどケイリスク隊長が言いましたとおり、調整部の5の部隊にはそれぞれ特色というものがありますが、この隊と、そして今年度の新しい仲間達がどのように成長していくのかは彼らを含めた、彼らに関わる者総てにかかっていますので、そこを胸に刻み、よりよい環境づくりに徹してください。
では今年度の新入隊員の紹介を 』

「不満？」

「不満以前の問題です！！」

バンッ

染み一つないテーブルを叩いた。ぐらぐらと目の前のグラスが危なげに揺れるのを見て、慌ててそれを片手で支えながら言う。「こちらに相談もせず何て勝手な事をつ！」

「じゃあいいじゃないの」唇を尖らせる目の前の道化は何もかもが白い部屋で、長い白い髪を垂らして座っている。僅かに見える肌さえも不気味に白い。

（これが齢700を越す長老！？生き神！？馬鹿な！）

「局は貴方のおもちやでは無いのです！」

「わーかつてるーってエ、そんなもん、だって仕事じゃないの。君も、僕も」

（舐められてるー！）

そりゃあ、今年で30も半ば、老いを知らないこの男に比べれば童

もいいところ、外見だつてつりあわない。影で部下達が河童呼ばわりしているのも知っているし、部下だけならず、家では娘が、もつと素直な酷い言葉で自分を罵っているのも知らぬふりをしている。

しかしこの年でここまでの出世をしたのはそれだけの自分の実力と周りからの信頼があつてのことだと、心から誇りに思っている、それなのに！

「貴方は私が、どのような役職だということを、存じていらつしやるのですか」

「知っているさ。当たり前だろう。それじゃなきゃここに君は居ない」

「なら何故相談もせず！」

バンッ

ガシャン

今度こそグラスが倒れた。

「何故思いつきだけで！何故独断で！何故第六部隊などというものを何故創ったのですか！！」

やれやれとロメロは首をすくめて手を上げた。

うつし色の異端者（後書き）

リクエスト受付中です。よろしく願います。

うつし色の異端者

「言えないんだ、ごめんよ」

「ハア!？」

まるでチンピラのような声が出た。

「いいですか!？私にも責任というものがあります!聞く権利

いいえ、この役職についたからには、義務があるのです!貴方は

私を　　いいえ、私の家族を路頭に迷わせるおつもりですか!」

やってしまった、と思った時だった。

空気が、とたんに張り詰める。

ああやってしまった。

「そのつもりはないね」

仮面に手をかける。局長は溜息のような息を吐きながらそれをテールブルの上に置いた。

異常なほど白い顔の、白濁した目がぼうつとこちらを見ていた。

「君は信頼に値する人物だという前提で、話をして、いいと僕は思うけれど、」

怖いくらいに真っ白な道化^{ヒョロ}が笑う。

「どうですか、羽の生えた猫は。キング?」

白い扉が開かれた。

さて、誇りなど、とうに棄てて仕事に力を注いできたが、そういえばその『棄てる』ということさえも私の誇りからのものだったこと

を思い出した。

『誇り』を『棄てる』ことで、私は『誇り』を持ち、それによって色々なものを守っていたのだ。守りきれる力があることが私の誇りである。

それを思い出した時、少しだけ冷静になった。

「判りました。しかし……」

頭が痛い。

先ほどとは違う意味で。

これを何と表すか。

「……途方もないですな」

「ハハハッ」

ピエロは笑う。

「その通り！君、まだ時間はあるだろう？少し話したいんだけど」

再びこの男と二人きりになってしまった上、何やら誘われてしまったが。

何を話せと。

「説明をお願いしたいですわね」

無然とエリカが言った。無表情だ、これは怒ってる。

「私達、誰一人そんなお話聞いてないんですけどね」

次に笑顔。

訂正、物凄くいい笑顔。今にも突き刺しそうな。

（……怒ってる）

さすがに刺しはしないだろうけれど。

（僕は今は止められないし）

目の前にいるのはあの兄弟だ。

（でも僕以外なあ……）

彼女はキレはしないだろう。根っこの方では冷静を保ってるはず。

「まあまあまあ、ちよつと落ち着こつぜ、な？」
止めたのは意外な人物だった。

うつし色の異端者（後書き）

変な友情を育むの巻。

イメージとしてはハマさんとスーさん。

b y 釣り馬鹿日誌

うつし色の異端者

「晴光……」

キユツ、とエリカの眉間に皺が寄った。

「そんな怖い顔してたら話せるモンも話せなグフォアッ」

「このド馬鹿が。空気読めよ」

殴られるのは判ってただろうに、学習した方がいいと思う。
合掌。

七枚の花弁が扇形に広がっている様にデフォルメされた蓮の花を連想して欲しい。

これが、『本』の一族のシンボルである。この花弁は本の3つの本家と4つの分家を表すものなのだがそれについては割合。

さらに、西洋を舞台にした小説のような塔が何本もそびえる赤茶色の城。この城は横から見ると長方形だ。

さて、これが七棟。

上記の本のシンボルマークの蓮の花弁のように並べ、花弁の上端は一階と三階の渡り廊下ですべて糸でつながるように、花弁の根元、ガクに当たる部分は断ち切るようにくつついている。

これが物語管理局である。

局は花弁の左端から、

・第四部隊棟

（血の気が多く建物も良く壊すため、端っこになったとの噂）

・医療・第二部隊棟

（第二部隊は医療・情報収集のサポートのためすぐ出動できるよう）

（専属の医院完備）

・サポート棟

（食堂・備品室・専属の道具専門師アイテムの店）

・本棟・第一部隊棟

（司令塔的な中心施設）

（資料室・非戦等部隊案内ガイド本部）

・育成・第五部隊棟

（研修生の教育施設が中心）

（視聴覚室がある）

・開発・第三部隊棟

（第三部隊は数が多いため）

（余談であるが、それぞれが各自の分野を極めているのでなんとなく雰囲気は異様。第四部隊の次に問題児）

・局員宿舍棟

と、それぞれの特色を生かした構造となっている。そして僕らが今居るのが、本棟・第一部隊棟。

の、上、に当たる部分。

いつのまにか出来ていた、赤茶の城を10分の1カットしたような建物である。此処まで来ると、もはや外装は施設というより西洋のお邸風の住居だ。一応渡り廊下は繋がっている。

ここは一応、『第六部隊・特別棟』となるらしい。

「話もなしに異動？私達一応第三部隊に異動が内定してたはずよ。晴光にいたっては一年前に第五部隊から第四に異動したばかりだし

よう」

その通りだ。僕らは、とういふかエリカは、剣術と魔法での幅広い戦闘方法で、研修生の頃からその話が来ていたのである。

「それについては後に話があると思います」

ビス「ケイリスクが感情を滲ませず淡々と言う。

「でも『新人育成のため』なんて不愉快だわ。低く評価されている気がして」ちらりとエリカは晴光を見た。

ここで誤解しないで欲しい。

エリカは晴光達のことを言っている。

ファンちゃんはこの年で人間の体についてはスペシャリストだし、僕らは手合わせで晴光に勝ったことが無い。

ただ彼らは突発的な事態に弱いだけだ。団体の中でいてもどうしても前に出る事が出来ない。致命的だが、それだけで彼らの評価は物凄く低く付けられている。

しかしエリカの中でその評価は不服なのだ。『底力出せばいいのに』手合わせ後のエリカの口癖である。

(……判りにくいなあ)

要するに友として心配しているのだ、コレは。

晴光はエリカの横顔を見て小さく『お手上げ』のポーズをした。

うつし色の異端者（後書き）

シンデレエリカ判りにくいデレ。

うつし色の異端者

「あ、じゃあさじゃあさ、そーいえば聞きたい事あったんだけどさア、オレ」

「何よ」

「弟さんって実年齢何歳なのかなー・・・とかなんて」

晴光は苦笑いで頭をかく。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ええ！？何、聞いちゃ駄目だった！！？」

ケイリスク兄弟はなんとも微妙な間を置いて顔を見合わせた。

「え、何、弟さんって」

「え？そこ？兄弟の弟の方だから」

「いやあそれはそうなんだけど、
え？じゃあ何？俺は兄さん？」

（あにさんって何だ）

「いやいやそこはじゃあ、【おにいさん】、で！」

（何かズレてる？）

「・・・・・・・・天然？」

エリカがぽつりと言う。

【天然】なるほどそれだ。

「自分は今年で１９になります」

『１９！！？』

綺麗にエリカと晴光の声が揃った。

「予想以上に・・・・・・・・」

「やっぱり変化症スカ」

（変化症……）

だとしたら、かなりの重度だろう。7歳は若返っているのだから。

「……晴光君って、変化症知ってたんだ……」
ファンちゃんが呟いた。

「えええ！！！？そりゃオレだって知ってるつー！それくらい！！」
職業病なんだから知らないと思えば逆に見えちゃうよ、ファンちゃん。

変化症とは、上の通り夢人含めた、異世界をわたる者すべてに起こる可能性のある現象である。

世界を渡るときにその世界に適合しようと起こるもので、症状は人によって様々。それによって対処法はほとんど無い。晴光が前に会った、憑依型というのも症例の一部だ。

「髪とか眼も、つてことは？」

「これはもともと」

「目といえば、そのアイマスクでどう見てるんスか？」

「うん……企業秘密。あえて言うなら心の目？」

「心眼！？」

（凄い、仲良くなってる……）

「さすが晴光。バカのカリスマアレ三ヶ月前のことなんて忘れてるんじゃない？」

そうかも。

「いやいやいや、でもさすがの晴光も……」

「ていうか、馬鹿と天然が会話してると何か居た堪れなくなってくるわ」

話は吹っ飛び、晴光は犬の視力がなんとか言っている。 いや

いや晴光だって考えて……

「犬といえば、林檎の種が」

「・・・・・・・・居た堪れない以上に切なくなってきたわ」

「林檎は何処からきたんだろう」

「・・・・・・・・犬が啜えてきたんじゃない？」

「フローしきれません。」

うつし色の異端者

白い道を、白い髪を翻してゆつたりと進む。

「あの子は当たり前を当たり前と思わない」

閉じた眼の奥が鈍い色を跳ね返した。

「それは利点でもあり、致命的な欠点だ」

その瞳は光を通さない。

「自分にはそれがほとんど無いと、とつくに失ったものだ、残ったのは僅かばかりだと思っている」

唐突に白い道が色溢れる道に、
否、廊下だ。廊下の濃紺の絨毯を踏んだ。

そこで始めて彼は壁に手を付き、辺りを詮索しながらも再び迷いなく歩き出す。

「それであそこまで育つことができたのは、ひとえに一番近い、あの子の存在か」

彼の髪の色はもう白ではなかった。

手をつく壁と、濃紺の絨毯、壁にかかった時計、その秒針にいたるまでの色を、歪み濁った鏡のように映し出す。

「しかしあの子の声は耳に心地いい。よく似ているよ……
・そうは思わないか？我が愛し子よ」

頬と脛に封をするように、結ばれた赤の線を歪ませて彼はほほ笑んだ。

あたかも道化^{ジロ}のように。

「……遅いですね」

「ぼあっと端に立っているだけだった彼の声を耳が拾った。」

「あ、そうだねえ」

先程まで晴光と、作物の品種改良について語り合っていた（そこまでの経緯は割合）、兄がこちらを向く。

「え、今って誰かを待ってたんスか？」

「うん一応ね　顔合わせもあつたけど、そっちが本題。詳しい説明はその人が」

「……さつきチラツと見たけど、ここ給湯室あつたわよ、お茶でも淹れる？」

勝手に使つていいですね」

エリカがビスケイリスクの方を振り返って聞いた。彼は少し考え「大丈夫でしょう。ここは第六部隊専用ですし」

「ですよ」

「じゃあ僕、手伝うよ」

「当たり前でしょう、私下手なもの」

エリカの後ろについて部屋を出た。

「……エリカは、もう第六部隊になつてもいいって思ってるんだね」

ニルは単刀直入に切り出した。怒っているのかと思いきや、その顔は薄く笑っている。

「だってあんな大々的に発表されたのよ？　むしろ断つた方が後で周りが五月蠅いわ」

手袋を外した手でカップを並べながらエリカも少し笑った。「もともと、第三か第二で迷ってたんだもの。第三を選んだのは、生真面目でおとなしい第二よりも、淡々と自己流で突き進む第三の方が面白そうだったからよ」

でも、とエリカは繋いだ。

「でも、第三はあの人数で基本は単独行動のくせして、それぞれの好奇心が半端ないのよね。うっとおしい事になるのなら新設部隊の少ない人数の中、頑張った方が得策じゃない？もちろんアンタが嫌って言うなら他も考えるけど、まあ言わないだろうし、」
背を向けて火の前に立つニルの後姿を一瞥する。

「エリカがそう言うなら言わないよ」
笑いを含んだ声で、彼は言った。

うつし色の異端者

力チャ力チャ磁気を鳴らしながら盆を運ぶ。二つの盆に分けたのでそれは大した重さは無い。しかしどうやってもその音は、足を運ぶたびによくその場によく響いた。

「あら？」

「どうしたの？」

エリカは玄関前のホールで足を止める。

「こんなところに螺旋階段なんてあったかしら」

え
.
.
.
.
.
.

左上に視線を上げる。

「……あつたんじゃないかな？ 気付かなかったただけで」

内装・外装に忠実な、金色の手すりの立派な螺旋階段だ。床と同じ濃紺の絨毯が敷かれている。

しかし、局の本館と揃いのそれは、この10分の1も無い建物のサイズには到底不釣り合い、場違いな代物だ。

「……もう普通の階段でいいじゃん、って思うんだけど」

「それは言っちゃ駄目でしょう。お茶が冷めちゃうわ、行きましよ」

大きく湾曲して螺旋階段を避けながら前を過ぎる。

（激しく邪魔だ……っ！）

局の予算はどうなっているんだろう、とニルは遠い目で無駄に煌びやかなそれから目をそらした。

おっ

足音だ。

条件反射で二人は足を止め、エントランスの上を見上げる。

きしっ、きしっ、

きし、

「やあやあ君達っ！」

ピエロが両手を広げて立っていた。

「おっそかったですねー局長」

「急な来客があつたのさ。文句は彼に言ってくれたまへ」

ちやらけた雰囲気の高責任者は床に届くほどあるだろう髪を肩ほどで輪にして纏め、詰襟の夢人の制服に少し似た白いコート型の制服を纏った手でカップを持つ。

声も高めで見るからに優男だが、ひよろりと身長は高く華奢ではなく、目蓋の上から頬まで一直線に封をする赤い線を歪ませて、しゃらりと鳴る細い鎖で繋がれた額の飾りを揺らして首を傾げ、見えないう目で周りを見渡し満足げに微笑んだ。

「まずは自己紹介をしてくれないかね。ボクは見ての通り、目が見えないもんで」

先ほどから身動きもしないファンを除いて、それぞれ顔を見合わせる。

局長は高らかに手を叩いた。「よし！」

「じゃあオーソドックスに右から時計回りに、名前と所属とご趣味と生年月日、血液型と戦闘スタイル、好きなもの嫌いなものタイプなんかをチャチャッと！」

その場の心が一つになった。

（ お見合い・・・？ ）

うつし色の異端者（後書き）

大暴走。

うつし色の異端者

「さあて、とまあ、冗談は此処までとして」

（冗談だったのか・・・）

「君達の事はよく、知っているからね。新設第六特別部隊、説明会を実施しようか」

ねっ、とミアノ局長は語尾にハートマークをつけて小首をかしげた。

（男が小首かしげるって・・・）

（大丈夫なのかなこの人）

（局長自らこんなところに来ていいんでしょうか）

（笑）

（仕事は・・・）

（この人もしかして暇なのかしら）

それぞれ思いは様々である。

彼女は目を伏せた。磁器の中の赤い紅茶がぐるりと輪を描く。

白い顔に、真っ赤な目の奥ばかりがチラチラと光り、黒髪の間から覗いて見えた。

「これは私の我俣ね」

「はい！ちゅうもーくっ」

彼は一度だけ大きく拍手を叩いた。

「知つてのとおり、ボクはこの物語管理局長、ロメロです。

表向きは『さらなる優秀な新人発掘』なんてなつてたりなんかしちやうんですが、第六部隊は正式名称を『調整部第六特別部隊』。つまりボク直属の、『ボク』の声を一番聞いて貰う重要な部隊になります。そこそこよろしく」

「直属……?」

「重要!？」

「……」

エリカの目が細くなり、晴光の眉が情けなく下がった。ビスはこっそりと米神を揉む。

「そう、重要な、組織になる。これからね」

「具体的な活動は？」

「いい質問だ、エリカ嬢。後ろを見て」

ミアノ局長は無造作に腕を振って弧を描いた。照明が落とされる。

淡い色の壁をスクリーンにして、画が浮かび上がった。

「……これは?」「大切なものだよ、よく覚えておいて。見て損は無い。知識は必要だ」

青白くそれぞれの顔が暗い室内で照らされる。

晴光は自分の正面に座っていた局長を振り返った。「ちゃんと見て」

IRREGULARS

「いいかい? 君達は知っておかなくてはならない。意味はすぐに分かるはずだ。もしかしたらすでに分かっているかな?」

滑り落ちる。

音を立てて割れた中身は深紅の絨毯に染み込み、そこだけ色を変えた。

「私はここにいてはいけないのですよね」

窓の外は濃紺に浮かぶ丸が一つ。

「戻る事ができたなら、」

「探すのは三つ、そう、この三つだ」

「……表向きは、って、そういうことですか

馬

鹿げてる。俺等に出来るわけが無いでしょう」

ステイルがごくりと喉を鳴らした。

「無理です。途方も無い」

「いいや。大丈夫だから君達なんだ」

探すのは三つ、ネオイロサー

ネオイロサー
“夢”だ

閑話 瑠璃の影の青年

ビスは前を歩く兄に気付かれないよう、こっそりと息を吐いた。彼は苦手だ。

これからの直属の上司となる人であり、何より最高責任者でもあり、恐らく隊長である自分は他の隊員以上に接する事も多いだろうと思う。

何故彼が、第五部隊の末端で、何年も上にいけず詰まってしまうている自分などを名指しで指名してきたのかは分からない。が、彼は自分なら出来ると、そう言い切った。

自分でなければ駄目なのだと。

よくよく聞いていれば、自分の部下になる他隊員も彼自身が直々に同じ理由で選んだらしい。

彼らとは接点も何も無い。クロックフォード嬢とは同じ第五部隊という事だが、そもそも第五部隊とは研修が終わった新入隊員が最初に必ず入隊する部隊だ、そう考えれば一年前に第四部隊に異動した周少年も同じ事が言えるが、それは他大勢の隊員も同じ。大した共通点ではない。

そもそも、彼とは付き合いだけで言えば長いのだ。なにせ、名前を借りただけとはいえ後継人だった時もあったのだから。

それは両親が亡くなる12の秋から、自分が『本の国』での一応は成人と認められる13の正月までの約半年だったが。

彼はある意味での自分達との同種である。

『本』との掛け合い、他種族との間にこの地に生れ落ちた人間だ。それは兄と自分と彼、表に出て生活しているのは恐らく自分達三人のみであろうという。それを抜かしても彼は最も有名な本の一族の血を引くハーフである。

おんとし約700歳。

パートナーを持たない夢人であり本でもあり、長年の功績と人柄で

盲目というハンデを超えて物語管理局の母体、異世界管理局本部の幹部から再び物語管理局の局長に就任。

『有り余る時間の人』。

彼はたぶん、その時間を数少ない同胞に少し分け与えた、それだけなのだろう。かれの行楽趣味は有名だ。

では今回は？

本の一族の『色』に白色が無いのは何故か。

それは白が禁忌の色だから。

禁忌の子供はどこにも居ない。純白は色をつつし、その存在をこの世から消すのだ。

本の血は濃く、染まらない。

しかし強すぎる色はあるべき色を濁らせる。あるべき形を描けない。ゆつくりと、時間をかけて白は景色に溶け込んでいく。じわじわと真綿で締めるように、気紛れにそれに針金を混ぜてみたりもしながら、半分流れる強い血は、少しずつ少しずつ肉を絶っていく。

彼の盲目もそのためだという。

人は目で理解する生き物だから。

それでもそれだけで済んでいるのは、ひとえに世界を渡るという順応に優れた異端者の血だ。彼は死を逃した代わりに生を得た。

自分にも異端者の血は流れている。力があるのだから、兄以上に自分はその血が濃いだろう。

母似の自分にそれがあり、父似の兄に強い本の血が出たのは皮肉としか言えないのではないか。兄は自分の性質はどこまでも父の方だと言っけれど、それをいうなら兄のほうも母の性質そのままだ。しかしそんなところまで似なくてもいいのと思う。

知らず知らずに息を吐く。

時と共に進行する血の束縛から逃れるために子供の姿をとって。

その血が濃く影響する父から貰った二対と無い目を封じて。

父の目の力が特殊であった事は幸いというべきか、感謝するべきか、はたまた恨むべきか。

夢人になったのは両親の力を誇るべきものと思ったから。

それは力があると分かった12の時、それはこの姿と同じく違うない。

今回のことも、承諾したのはもしかしたら無意識にその誓いがあったからではないかと思うのだ。

チャンスなのかもしれない。

金色の左を少しあけてみて、この姿だと大きく見える兄の背を追った。

好ましいと言える未来が見えればいい。

二章 薄墨の黒子

大人になるということに理由は必要なのでしょうか
大人になるにはどうすればいいのでしょうか

早く大人になりたいと思いました
他の子よりは大人だと思いました

でも平均値では足りないのです

全体を見ればもっとすばらしく大人な人は星の数ほどいるのです
大人とはなんでしょう

人生ってなんてめんどくさい

あるとき誰よりも大人になれる人に出会いました。

その人は子供に甘えることの出来る大人でした

甘えを知らない人でした

甘える事が上手な人でした

俺は、俺の世界の扉が開くのを感じました。

知っていますか？

大人になるって、変わらない幸せを作ることが出来るということな
んですよ。

愛しいと思った。

何よりも守りたいと思った。

結果的に言えば無理だった。
遅すぎた。

あの人は『それでいい』と泣き笑いの顔で言う。

『このままでいいの』

『このままがいいの』

初めてあの人が自分に頭を下げた。

『守るなら、今を守って』

『私の今を』

『あの人達の今を』

でもそこには、僕は居ないじゃないか。

ふざけるな

ふざけるな！

ふざけるな！！

『また来るよ』

全部押し殺し、再会を誓う。

遅すぎた。

見つけるのが遅すぎた。

繰り返し繰り返し、同じ時をもう一度再生できたらいいのにと
思った。

（無理だよ僕には）

彼女の前でそんな情けない事は言えなかった。
次だ。

次ならきつと。

真っ赤な丸いボタンを押す。

リセットされたら、また迎えに行きます。

今度は誰よりも早く。

今度は君の来る道に。

今度は僕が待ってます。

二章 薄墨の黒子（後書き）

来るゝ

きつと来るゝ

薄墨の黒子

【エリカ「クロックフォードについて」】

・物凄く頭いい娘。凄い空気読むし。結構横着で豪快だけど、いつも見た目だけは何があってもきちんとしている。薬作ってるときは

エリカは魔法薬の調合が趣味で 普段より5割り増しで几帳面

・エリカは美少女で常識あるんだけどなんかたまーに変だよな。なんか抜けてるっていうか。人のこといえないと思う。でも完璧になそうとするから、凄いと思う。でも女王様でどs。

・お姉さんって感じ。緊張とか、しないのかなーと思ったり。いつも堂々としてて。

・女の子には嫌われるタイプじゃないかな？何か第一印象で誤解されそう。将来有望。

・これから頑張ろうと思います。

【ニルについて】

・自分の努力を表に出したがない。

縁の下の力持ち。

普通だと思ってるかもしれないけど、それが実は ってことが良くある。

よく気がつく人。

・ニルはお兄さんのこと、天然だっって言ってたけど、あれ人のこといえねーかな、アレも相当天然？無自覚？だし。優しいんだよねー。でもその優しいのがたまに変な感じでやってくるから、オイオ

イッてなる。

・優しい頼りになるお兄ちゃん。

・気の利く子。エリカちゃんもだけど、頭いい。ちなみにあの二人
って付き合ってるの？

・これから頑張ろうと思います。

【晴光〃周について】

・猪突猛進馬鹿。

最後の詰めが甘い。

・明るく元気で誰かのために頑張ろうとする人。馬鹿だ馬鹿だつて
言うけど、いうほど馬鹿じゃないのかも。たまに、もうちょっと頑
張ればいいのについて思うときがある。

・明るくて優しい人。いつも元気で、ちょっとプレッシャーに弱い。

・明るく元気。誰からも愛される。

・背が高い。

【ファンについて】

・可愛い妹分。

・守りたい感じ。純粹。

・優しい子。意外にやろうと思ったらとことんやる行動派。

・ファンは、妹？かわいいなーと思う。優しいんだよなアレ。パニ

くると止んないけど。

・可愛い子。純粹。

・これから頑張ろうと思います。

【スティール・ケイリスクについて】

・第一印象は怪しい人。

弟と仲がいい。

天然。

・天然？ビックリする事をいきなり言う。

・お兄さんは面白い人。ちょっと変だけど。

・・・・変な人？

・大雑把なのに変な拘りがあります。

【ビス・ケイリスクについて】

・無表情。

何を考えているのかわからない。

・淡々とした人。

・小さい。何考えてんのかわからない。

・無表情でちょっと怖い。

・見た目母・中身父。母ほど無表情ではないので、結構分かりやす

い。律儀すぎ？もう少し適当にやってもいいのにと思っくらい努力家。何事にも丁寧。度胸は据わってる。

以上が、任務先にて新設第六部隊員全員に配られた冊子の一部の内容である。

薄墨の黒子

顔合わせのすぐ後のこと。

第六部隊全員にアンケートが実施されたのだ。内容は「他隊員の印象について」。

担当者へのほぼ口頭での回答であり、もちろん義務的にこなす事務員のような黒縁眼鏡の担当者とは仕切り越しで、ほとんど顔を会わせることなく、匿名で、内容は本人含め他には一切漏らさない事は約束されていた。それがアンケートと言うものだろう。

が、

「何も初任務先でバラすことないじゃねえかよあのクソ馬鹿上司いいいいいい」

一息に空に向かって叫び、さめざめと抱えた膝を涙で濡らす。

晴光は背中に向けられる視線に唇をかで耐えた。「へー私のことそう思ってたんだ。ふうくん？」視線はそういつていると主張するが、本人は冊子に目が釘付けで特に気にした様子も無いのが現状である。

「プライバシーも何もあつたもんじゃないわね。一応匿名だけど」

「一応匿名だけど、全文そっくりそのままと言葉使いで誰が誰だかわかつちゃうよね」

「……まさか任務内容にこんなのが紛れ込んでるなんて……」

「

愉快犯だぜ絶対!!」

「………本当に『一応』匿名ですよ」

「（ビス涙目になってる）こんなに感情表現豊かな子なのに……」

」

一番の被害者はこの兄弟だ。
プライベートで仲のいい他四人と違い、この二人はほぼ第一印象の言葉である。

「俺なんてほぼ『怪しい』『天然』だもんねーアツハツハ」

しかしビスにいたっては『無表情』『何を考えているのかわからない』、その上『怖い』。

「……………これから頑張ります」

誰も聞いていないながらも、彼は尻すばみの蚊のなくような声で誓った。

「ご協力感謝いたします」

代表のビスの言葉に、他五人も続けて頭を下げた。

襖で仕切られた部屋がどこまでも続いているのではと錯覚するような広間である。焚かれた香と畳の青い香りが爽やかに漂っている。

「そんなご丁寧に。いくらでも滞在していただくさいね」

高く一つに纏めた赤銅色の髪を肩から滑らせ、家主は三つ指をついて相手に釣られる様に頭を下げた。

「改めまして私^{わたくし}、この妖異再教育学校学級長、学園長代理、雪女と

申します」

顔を上げ、漆黒の濡れた眼を細めて見せる。

「この度はようこそいらっしやいました。生徒一同、誠心誠意の助力をお約束いたします」

薄墨の黒子（後書き）

作品紹介

『妖再教育処／大木 やすき』

妖怪コメディファンタジー小説。

時間と共に世界の隅の影へ追いやられた異形達。その衰退はその能力までにも及んでいた。

時代背景不明だが、教師の一人（唯一の人間側で実習担当）である幽霊が、セーラー服で人工色の髪の子高生であること、彼女の言動から限りなく現代に近いと思われる。

雪女

赤銅色の長い髪に黒目がちの漆黒の眼の美人。学級長であり、土地提供者。一応家主。

半妖で力のコントロールが苦手だが、ここでは主席。人（男）の生気をすう事を極端に嫌がる。約500歳。

死神

隻眼の少女。感情が極端に欠如しているため、自主性と協調性を育てるために送り込まれた。足は義足で、物体の束縛を受けないため壁を通り抜けられる。

宇宙人

留学生。蛍光ピンクの髪に蛍光緑の眼。カタコトでだいたい五月蠅い。

人魚

童女の姿をした教師。雪女の後見人。雪女を飾り付ける事に力を注

ぐ。

設定は『異世界管理局情報部』（ネタバレ注意）にさらに詳しく加筆してあります。

薄墨の黒子

「まず、私たちは現代化による能力低下等の理由からそれぞれの一種族としての役割を果たせない、そんな妖モノ達を再教育する組織です。おわかりですね？」

「一応は。資料はありますので」

「それならご存知かもしれませんが、この学園の近くに、異形だけが住む街があるんです。調査ならそこが最適でしょう。なにせ世界最大の妖モノの都ですから」

「す　　つつつごい美人。なにあれ、同じ人間？」

「人間ではないよ。雪女だから」

襖の前で顔を赤くする晴光にニルが突っ込んだ。

中では今だ、ビスが隊長として雪女と会議中である。

「話し聞いてたの？アンタ」

「ああいうのがよーえんっていうんだよな」

「晴光くん・・・」

はしゃぐ晴光に女子陣から白い眼が向けられるが、気にせず締りの無い顔で晴光は続ける。

「お兄さんどう思います？」

「俺もうちよつと手が届くくらいの子がいいかな、美人過ぎてオーラに負けそう」

「ニルは？」

「ええ僕！？・・・うーん」

「何本気で悩んでんのよアンタらは」

後ろの襖がかりりと開いて、呟く声が割り込んだ。

「何やってるんですか」

ひらひら揺れる袂を抑えながらエリ力は溜息をついた。

ここで6人が着ているのは着物である。例の如く現地調達のそれは、学園の妖達が用意したものだ。それぞれ適当なのものを選んで纏っている。

辺りには、動物の体に同じような着物を不恰好に着ているものや、霞のような何か、道具がひとりでに軋む音を立てながら歩いているものさえが、二足歩行に特化していない体をぐねぐねと動かして歩いていた。

「人間の格好した人はいないんですね」

気持ち悪い、とはあえて言わない。

「人に化けるのは技術と集中力と体力がいるんで日常生活ではしませんね。学園では一番最初に徹底的に練習して常時するように義務付けられてますが」

慣れると動きやすいですし便利ですよ、と言うのは波打つ重い灰色の髪の子女だ。黒く塗りつぶされた瞳で見上げる彼女は、教師の一人、人魚である。

「私のように、元から人型だったり、変化が得意な狐とか猫とかの種ならラッキーなんですけれど、中にはなかなか　　っていう子もいます。そういう子ほど、コツを掴めば上手くいくものなんですけれど。まあ、自転車のようなものですね」ふう、と彼女は頬に手を当ててため息をついた。

「でも・・・失礼ですけど、私にはあまり人に埋没できるようには思えないんですけど・・・雰囲気の違いますよね」

雰囲気といっても、言葉で説明しがたい違和感のようなものだ。

「あら。お気づきになつて？貴女もしかして、こちら側の方かしら」
「半分くらいは。魔女の生まれなんです」

「あら。あらあらあら！！！！」
ぽつ、と人魚の頬が染まつた。熱を抑えるように頬に再び手が宛がわれる。

「こちらで魔女は貴重種です！まあ・・・何百年ぶりかしら・・・
・魔女なんて。なるほど人間にしてはいい魂だと思ってましたの
！！まあとっても綺麗！！」

ヒクリと全員の顔が引きつる。

スイッチが入ったかのように、彼女は浅く息を吐き出しながら捲し立てた。

「『本』の皆さまもさすが貴重種中の貴重種だけあってとっても！
！そちらの御兄弟は混血ですわねっ！！あらでも何か
「俺完璧ムシられてるよな？」晴光が自分を指す。」

「あらあ
」

「どうされたんですか？」

ビスが首をかしげた。その顔を人魚はじつと身じろぎもせず凝視する。

「白い髪は混血の証・・・いえ、ちょっとごめんあそばせ！」
長い爪の手がビスの腕を掴む。そのまま鼻先が付くほど顔を近づけ、癖の強い右目を隠す前髪をもかくビスを押さえつけて捲つた。

「やっぱり
！！」

「あつ
」

「
ちよつと！！」

スティールが人魚を突き飛ばし、庇うようにビスの前に立つ。

「隊長!!?」

往来でビスは膝から崩れ落ちるように地に伏せた。

「ビスッ!」

見えたのは

薄墨の黒子

「御用は何か」

凜とした声が座敷に響いた。「参られよ」

「お気づきになりましたか」

黒い浴衣の子供である。裾からにかけて色抜きしてある着物の袖からは、細い手首が露出し、肩にかかるぬばたまの頭には不釣り合いな大きいキャスケットが被さっていた。そして顔には

「犬の面が何の様な」

「報告を、と思ひまして」

赤く隈取りした白い笑ったように見える顔の下で、漏れるような笑いを含んだ声が聞こえる。

「お気づきになりましたか」面はもう一度言った。

「何を」

「あの二人」「二人？」

「今日きなさった兄弟ですよ、」その下で、面を被った子供はうつそりと笑う。

「あれは『片翼』の縁者でしょう？」

雪女の肩が強張った。

「何を……」

「あれは最後のつがいの子供です」

「何？」

「忘れては居ませんよね？ 珠姫？」

たまめ

刹那、

腕が振るわれた。先は嘲笑を浮かべるあの犬の顔である。赤銅色の髪が後を引く。「何故その名を知っている」

氷の刃がその細い首に宛がわれた。

「冷たいなあ……では何と呼べと言うのですか？……昭^{しょう}珠^{しゅ}郎^{ろう}とでも？」

「黙れ。その名を呼ぶな。首が飛ぶぞ」

「人生の無職にはなりたくありませんのでね。雪女さん」

「よし。顔を」

「それはご勘弁を」

自然にそれぞれが身を引いた。一足ほど離れて向かい合う。雪女の手からも武器は消えた。

静かに犬は膝をつく。

「絶対にお忘れになりませんように。そして必ず守ってくださいよう」

先ほど雪女がしたように、犬の面は指を突いて頭を下げた。

「お願いいたします。より正しい筋書きを紡ぐために」

薄墨の黒子

「あたしは　いえ、俺は、とある方の替わりとして、筋書きを正しく導くように今此処に参上いたしました。これは俺が此処にいるための義務。彼女の場所に居る俺が、俺として居るためにどうしてもやらなければならない。」

すべての後は、俺のことは忘れてくださって結構です」

「・・・・・・まるで死に行くようだね」

少し悩んでから、雪女は思った事をそのまま口に出した。雰囲気で、子供が微笑むのが分かる。

「別にそういうつもりじゃアねーですよ。俺は同じように、お膳立てをしてやるだけですから」

「何がために？」

「シアワセ幸福のために」

「なんてことをしてくれたんだアンタは　」

ファンは、この人の目が隠れていてよかったと心から思った。

学園に運び込まれた第六部隊隊長は青白い顔で、今現在目の前で治療を受けている。

その兄であるスティールは名前の通り

鋼の刃を思わせる、普

段のはしゃいだ子供のような雰囲気を一掃した様子で、人魚を上から見下ろしていた。

「・・・・・・・・心より謝罪いたします。その・・・・我を失ってしま
いまして・・・・・・・・」

人魚も青い顔でうろつろと視線を彷徨わせる。

「でもまさか・・・・・・・・いえ」

「何だよ？」

今の彼なら、本当に視線で人を殺せそうだ。

「いいえ・・・・・・・・まさか、そんな・・・・・・・・えっと、制御が出来
ていないとは思いませんでしたの・・・・・・・・不躰かもしれませんが、
貴方のその眼のもの、それも制御なのかしら？」

これ見よがしなわざとらしい大きな溜息に、ファンをはじめ、他隊
員の肩までが大きく跳ねた。「本当に不躰な質問だ。ああそ

うだよ。これは俺等の本の『血』を制御するものだ。それが何か？」

「い、いえ・・・・・・・・」

ちらりと彼女はスティールの斜め後ろに待機している隊員に視線を
送る。

無理だ。

眼が合ってしまったファンはふるふると何度も首を振った。晴光も
青い顔で顎を引く。

彼女が何を仕出かしてしまったのかは分からないが、彼の激怒振りに
助けるその気も起きない。

「なら聞くけど、アンタは何年生きてる？ 女性に年を聞くの

は云々っていうのは聞かないよ、アンタは何歳？」

「え、ええ・・・・・・・・」

うつすら口元に笑みを浮かべて見せた彼に、人魚が一步、後退した。
壁に手の平が届いた。

「な、七百年ほど・・・・・・・・」

「もっと細く」

「数えて七百五十と八ほどです！」

「　　あなたは本当何てことをしてくれたんだ・・・」

吐く息と共に、ステイールはその場に膝をつく。
のろのろと彼は頭を抱えた。

「　　ッとに、ビスに万が一があつたら父さん達に何ていえば・・・」

その声は確かに水を含んでいた。

薄墨の黒子

「そんなん言わんでも大丈夫ですよ。ただの過労と精神疲労です。気にせんときいな」

ビスを診ていた男が振り返り言った。異常なほど色素の薄く、糸のような細い眼の男である。

「いやァ魔女の薬は効きまんない」

「化学療法がありませんからね」

「そちらさんも、お手伝い有難うございますウ」

「い、いえ……」

ニルが控えめに首を振った。顔色が優れないのは、ファン同じくあの光景の方に意識が向いていたからだろうと思う。

「ではウチはこれにて。寝起きをたたき起こされたんでねエ、こちらと夜行性やつちゅうのに」

いいつつ腰を上げる彼は、よくよく見れば着崩れた夜着のままで短い髪も跳ねている。寝癖さえも絵になるのは、此処の学園の人物達が当然揃いも揃って人からかけ離れているからだ。ファンは大きく開いた服から見える白い胸に、慌てて眼をそらした。

「あら」ピクリ、僅かに聞こえるその音に、彼の耳が動く。

「はぁ……」

ステイルと人魚、二人の特定の安堵の溜息が図らずも重なる。人魚は素早く口を閉じたが、ステイルは弟の傍らに寄り沿っていて一挙一動を見守る事に忙しい。心配する兄と床につく弟の図に人魚は薄い眉を下げるが、バタバタと大きな音を立てて段々近づいてくる足音に表情を再び硬くした。

すっぱーん

勢い良く跳上がる様に障子が開け放たれる。

「なんてことしやがったこのクソババアが

！！

」

人魚は今度は仁王立ちでその秀麗な顔を憤怒で染め上げた雪女に見下ろされる事となった。

「テメエ、なんつどもそれだけは、それだけは止めてくれと、私は毎回毎回毎回毎回・・・なんでそうなんだ！！？我慢・忍耐・無関心！！そういう事態に陥ったらこの三力条を心に刻めと！！いったよなア！？ああん！！？」

「・・・・」

「それともストレスで布団と親友になるくらい義理子に頭下げさせれば気が済むと！！ハッ」

立ち上がると雪女はすらりと背が高かった。巻き舌と濁音を最大利用してそのハスキーな声で創り上げた言葉の槍で人魚をメツタ刺しにする。正座で小さくなつて、上から浴びせられる言葉に耐えるだけの彼女に、逃げ道は無いに等しい。「返事はア！！？」「ハイごめんなさい！」

しかし先ほどのスティールとの冷戦にくらべればどれほどかましと言えるだろう。迫力に圧倒はされるも、恐怖は無い。調子に乗って叱られる母としつかりものの子の姿なのだから。

「あーちよお、もオそれくらいに雪女もしいたリイや。さっきまでそのオニイちゃんに殺気ビンビン当てられとってんで」

「ヨソはヨソ！ウチはウチ！！」お母さんのようなことを言つて雪女は拳を固める。

「ヨソ様に怒られたのならウチでもきちんとしないと駄目！！大体この三百年間見て来て、狐はコレに甘すぎる！！旧知でいくら可愛がついていても見た目がコレでも、コレは養子をとれるほどの年でぶ

「つちやけ婆といつても差し支えない年なんだからていうかアンタがもつときちゃんと教育してきたらこんなことには」

「・・・『怒られた』んやなくて『殺氣あてられ』とってんで？」

「知るか！！殺氣くらい100年生きてりゃ一回や二回や三回四回五回くらいは当てられるわッ！！」

「そりゃそうやけれども・・・まあそうか」

「大体」

「ちょっと五月蠅いんだけど」

「ステイルのそれは、まさに鶴の一声だった。」

薄墨の黒子

「えー・・・ゴホン。すみません」

「雪ちゃん、素が出とる」

「すみません。お見苦しいところをお見せしてしまいました」

そそくさと下座に居直って雪女はわざとらしく言葉を濁す。

「えー・・・あの、はい。先ほどの事はお気になさらず」

狐が親指で笑みを浮かべる雪女を差してにやりと笑って言った。「元ヤンやねんこの子」

「じゃあかしい抜くぞクソじじ　　えー、あゝ・・・すみません」

雪女は大きく深呼吸し、もう一度だけ誤魔化すように咳払いしてすつ、と顔を上げる。

凜と背を伸ばして真剣な眼をする彼女は、先ほどの様子を忘れるほどで、あまりに別人に見えた。

「続けての無礼をお許ください。気がつかなかったこちらにも非があります。　　そのお二人は、片翼かたよくの一族の血を引いた方です。ね」

「片翼？」

ステイルは首をかしげ、眉を寄せる。

「なにそれ」

「“眼”をお持ちでしょう。金色の、光の波紋を描く瞳。総てを見通す“眼”。貴方のお母様もお持ちになりませんか」

ステイルの指が、布の刺繍を辿った。「この眼は父から受け継いだものだ」

「お父上から？」

次は雪女が首をかしげた。

「それは　　」

「片翼は女傑一族ですから男が目を継ぐことは稀ですよ。それがご兄弟にも引き継がれているという事は、ひとえにお母様の本の血のおかげでしょう。ですけど、神の血を引くといわれる片翼の血はとても強いものですから、増幅剤である半分の本の血は」

「人魚」

咎めるように声を発し、雪女は僅かに身を乗り出す。

「いいえ。これだけは言わせていただきますわよ。あなた方、

力の制御が出来ていませんね？私の知識に間違わたくしいが無ければ、体もお強いほうではないでしょう。下手をすれば生死にかかわるくらい」

「生死？」

小さくニルが呟いた。

「そこまで酷くはありませんよ」

「ビスッ！おま」半身を起こしたビスは片手で兄を制すると、布団の上に正座をし、人魚に向き直った。

「父は自身の力のことは熟知していました。亡くなる何年も前から息子の力のことを理解し、人体の研究者である母と共に対処法を考え、徹底して叩き込み、その方法を用意してから死にました。今までこうして戦闘部隊に所属してこれたのですから問題はありません。今回は度重なる事に疲労していただけです」

一気に言い切ったビスは問いかけるように静かに人魚を、雪女を見つめた。

弟が起き上がったことで冷静さを取り戻したスタイルが同じように二人を見る。人魚の肩がびくりと跳ねた。

「初対面の貴方に心配してもらったのは有難いよ。礼を言うけどね」
「でもそれでは」
「……母さん」

雪女が人魚に声をかけた。拗ねたように唇を尖らせて人魚は黙り込む。

雪女はにっこりと笑いかけた。

「私が参りましたのは、この義理母ちちの事を謝罪するためと、片翼の一族であるかの確認、そしてその場合の此処での対処を考えるためです」

「対処？」

「ええ。あなた方が片翼という特殊な存在である以上」

雪女の笑みが深くなった。

「ご兄弟を軟禁します」

薄墨の黒子

「え、でも」

「でも、じゃありませんよ隊長さん。存じ上げないようですが、人でありながら神の力を持つという片翼は以外に有名な一族で、知る人ぞ知るというんでしょうか。それに選ばれれば大変な加護を得る事ができます。貴方、往來で倒れましたでしょう？」

「調査、」

「捕まつて骨までしゃぶられ、出汁まで摂られます。文字通り何もかもを力を得るために飼い殺しにされて搾り取られるつつ拳句に権力者への献上品もしくは取引の道具。……見目も可愛らしいですから慰みもののお人形にもされるやも」

晴光がエリカの傍まで這って行つて袖を引いた。

「ちょ、慰みモノって？」

「の×××で　　つてことよ」

「ちょっと　　エリカツ」

そんな率直な！ニルが小声で叫ぶように言う。

「……うわお」

晴光は赤い頬を押さえた。

ビスは食い下がる。

「ですが、自分は隊長を任命された身です。その責任が」

「あなた方は本当に片翼のことをまるで知らない。いいですか、片翼とは人を惑わす人型の異能の部類に振り分けられます。極論で言えば代表として淫魔、セイレーンなどの人魚の一族もその血を汲んでいます。男を誘い生気を食らう、私達雪女の一族もそうです。災厄あるいは加護という極端な力を持ち、超貴重な絶滅危惧種、人に

交わり、繊細ながら、数世代その特性を受け継ぐことが出来る古来の祖の血。食らえば不老不死と力を約束される面では『本』の一族にも最も近いはず!」

バンッ

雪女は畳が跳ねるほど拳を叩きつけた。もう笑みは浮かんでいない。

「ご自身の状況がお分かりですかッ!？」

「……………」

ビスは熱気に押され、やや仰け反りながら唇を結ぶ。ややって、ビスは背後からこちらの様子を窺っている自身の部下を振り返った。さっと、それぞれの顔を流し見た。

「……………すみません」

数秒の沈黙の後の言葉に、ちらりと四人は目を見合わせる。

「後はよろしく願いします」

薄墨の黒子

俺は舗装もされていない砂色（まんまだ）の道をぶらぶらと

別に何かぶら下がっているわけではない。断じて。ようするに歩き回っていた。別に徘徊とかうん、そんな不審者のな、ヘタしたら変質者のなアレじゃあない。客観的に見たらどうかはまったくもってわからんが、いやだって俺から見れば全部主観になっちゃうし、とかもうなんかもうめんどくさくなってきた。

ようするに俺は不審者じゃない。いくら黒い着物にお面姿でぶらぶらしてようが違う。

真の不審者もとい変質者というものは某ほつぷすてつぷな少年週刊誌連載の某狩人漫画に出てくるアレとかコレとかいう方だと俺は信じている。シヨタでマゾでロリでサドでストーカーってもうあれは変質者の神だ。富 先生愛してる。貴方こそ神。あれ、いやでも作者さんが神ならその子供である某変質者はなんだろう。え、神の子は神？あなるほど。ゼウスとその子供たちの的なね、あなるほどね。ていうか最高神って女遊び激しいよね。何も鳥になつてまで女追いかけて孕ませなくてもいいじゃんね。あほじゃね、そんなだからアంతの子ろくでもないのばかりなんだよ。どいつもこいつも神話になっちゃってもう社会現象どころじゃないよ

いつのまにやら最高神のイケイケぶりについての考察になつてたりなんかしていたが、ていうか謎だ。

わからん。人間の思考って凄い。つーか俺の脳がすげえパネエ。

俺こまでくると実は天才じゃね？くらいは思えてきたり。わんだほー俺さいこーモモタロ にも負けないかもよひゅーひゅー

……嗚呼、ツツコミが無いってなんて辛い。

なんで人は人の心が分からないんだろう……ちよ、その人

俺にガン飛ばすんなら俺の後ろの方にしてくださいよ。馬鹿じゃね、ターゲットロックオン？ げっちゅーってか、俺自分で言うのもなんだけど、俺百害なくて一億害くらいはキャッチャーターミットと真ん中でカーブ描きながら投げられる自信あるぜ凄くね。

俺はアンタにキョウミなんてこれっぽっちもありませんよー見てるのはアナタの頭の後ろってかアナタは存在しないもの的な感じで見てるんですよー存在すら俺は認知してないんですよー……みたいな感じで睨んでみる。

いやーハッハッハッ。

勝った。（ガッツポーズ）

しかしなんだろう、この達成感の無さ。ガッツポーズしてみても言うのもなんだ、俺アホの子みたい。

『変人』みたいな目で見られるのはアレ、ちょっと嬉しいかもvだが、可哀想な人を見る眼で見られるのは侵害、違う心外だ。

日本語って奥が深い。

言葉って難しい。

つかこれもある意味異文化コミュニケーション？

別に俺はいつも常時こんなことを考えて歩いているわけではない。今回はたまたまである。

『たまたま』そういう気分で。あれ、連呼すると俺さらに危ない感じ？

いや、うん。ちゃんと主旨というか、やらなきゃいけないことというか、ちゃんとあるんだからね、うん。

とりあえず俺は見つけた。

いわゆる、『趣旨』違う『主旨』、もしくは『やらなきゃいけないこと』、もしくは『理由』、もしくは『目的』。

ていうかここまでで1292文字とか恐ろしい事になってんだけど。あ、1323文字に増えた。

ターゲットロックオン！

めんどくさい事この上ないけど頑張りましょう。うん俺偉い子。ちなみに『雛森』って聞いて某卵で切り札なツンデレ小学生と、某青春年の差失恋な死神副隊長と、どっちが頭に浮かぶかってあれだよね、『桃』って言うつもりが『あむ』って言うっちゃうんだよねアレ。もはや条件反射だよな。

あれ、ここまでで俺の読書ジャンル丸分かりじゃね。まじかよおい個人情報流出しまくりじゃねーか。まあいいけど。

ちなみに今で1545文字である。俺何気に凄くねーですか、てんちよー。

薄墨の黒子

「良かったの？ファンちゃん置いてきて」

慣れない草履とその中に入り込む小石に苦戦しながらエリカは前を歩く晴光に声をかけた。

欧米人であるエリカに比べて、この履物に親しみのある彼は、むしろ着物のあわせの方を気にしながら足を進める。

「良かったも何も、本人がそう言ってるし別に」

「そう」

「うん・・・まあ」

（口数が少ないな）

ニルはそれを一歩離れた処から観察する。二人らしくない。というか、『普段の二人の関係らしくない』といったところか。

何かあれば蹴りが飛び、凶器が飛び出し絶叫し、（何か違う・・・？）首を傾げつつも、だいたい合っているとは思う。そういう関係だ。（ボケとツツコミ、うんこれだ）

つまりはそういう関係。腐れ縁とも言っ。

当時、晴光はエリカの三年あとに入ってきた研修生。局内で唯一の同年ということでは何かと一緒にいる事、もしくはされる事が多かった。それから晴光が異例の一年で天才として研修を終えて、第五部隊から第四部隊に転属されてファンが加わってから続く関係だ。

（三年）

自分達子供の一年は大人の四年に匹敵するほど濃く長いと言ったのは誰だったか。

それが真実なら、大人で言う12年間一緒に居た事になる。

（・・・長いな）

途方も無い。何せ、年齢の半分以上、3分の2あるかもしれない。ニルとエリカの6年間なら18年間だ。エリカや晴光の国ならほぼ

成人、本の国なら、13で成人、一応は一人前と認められるから、結婚していてもおかしくは無い。どちらにしろ、子供が成熟するには十分な時間ではないか。

そしてそれだけ同じ関係を維持するのは大変な事じゃないのか。

（意外に凄い？）

凄いのだろう、たぶん。

しかし今のこの状況は、その関係を壊すものだろうかと考える。

（まあ、僕もあんな事ファンちゃんが言うとは思わなかったけど）

「後をお願いします」

そう『隊長』が言った後、真つ赤な顔で律儀にも手を上げて「わたしも残ります」と彼女はそう言った。

ファンが医療の知識があり、身体強化を得意とする『本』であるから、それに誰も異論は無かった。

驚いたのは、彼女が避けていた『禁忌』の兄弟の眼を見て、しっかりと澱みなくそういった事だ。

それで晴光とエリカが何故こうなるのかは分からないが、たぶん、恐らく、これは後退ではない。むしろ前進。

『いい変化』なのだろう。

内気で気が弱い彼女が、初めて、文字通り自ら手を上げたのだから。

結果・壊れない。（きっと）

薄墨の黒子

「……良かったんですか？」

沈黙を破るように、『隊長』が言った。

「え、えっと……」

ファンは少し思考を巡らし、振り返らないまま、ややあつて頷く。

「だ、だいじょうぶです」

壁を向いてファンは言った。

（ああもう！）

思わずファンは目の前の壁を殴りつけたくなった。

（……だって仕方ないじゃない）

やっぱり目の前に居ると、認識してしまうと、どうしても話せないのだ。

もし言葉が出たとしてそれが形になるかどうかさえもわからない。どもる、もしくは言葉に不自然に詰まる。その後の気まずい沈黙さえ眼に浮かぶ。

（ああもう本当に嫌！）

何が嫌って、こんな自分が。

（……絶対変に思われてる）

だってあの本の方の人の押し殺した笑いが背後で漏れている。

でもこれが最善の策だと、これも嫌というほど自覚しているのだ。

これはファンの過去の経験談である。

「良かったんですか」

今度は溜息交じりの声が届いた。

（ああやっぱり呆れられてる）

分かっている、分かっている、実際に認識してしまうとどう

してこつちも落ち込むのか。

「大丈夫です」

今度は即答する。

「……いえ、えつと」

今度はあちらが言葉に詰まる番だった。

「あの、『自分達』と『話しても大丈夫なのか』ってことです」

「大丈夫です。私、両親居ないので」

「……そうですか」

咄嗟に言つて、（……しまったあ！？）物凄く、これ以上ないほど後悔した。

（何で！何で今！これ言う必要性が！何処にあつたっていうの！？）壁に頭を打ち付けたい。

が、出来もしないので考えるだけ無駄で（だからなんでそんな無駄な事を私はやつちゃうの！？）（ああもう、なんて馬鹿！どうしようもないばかなんだよ私！）

「……すみません。不躰で」

「（謝る必要なんて！）いいえっ！」

（だからなんでここでこんな感じでしか言葉が出ないの私！何で力んでるの私！！）

「ご、ごめんなさ、いえ、すみません……」

（本当にこちらが『すみません』だ）

なんてどうしようもない。

ファンは肩を落とし、ここは眼を合わせて誠心誠意謝罪しないといけないと、ゆっくりと、それこそ本当にゆっくりと、前を向いた。

「私……えつと……すみません」

恐る恐るうつむいた顔を上げる。

「いえ、本当にこちらこそ・・・」

そこには正座で心なしか肩を落として小さくなっている『隊長』が居た。(あれ)

(困って、る?)

無表情なのは変わらないのだが。(・・・あれ?)

ぶはッ

後ろに控えていたスティールの堪えが爆発した。

「君達傍から見ると物凄く面白いんだけど!？」
かつ、と顔が熱くなる。

(そんなに笑わなくてもいいじゃない!)

(だって、頑張らなきゃ、自分が出れることをしなきゃって思ったんだもん!)

薄墨の黒子

無意識に音を立てないようにしている事に雪女 昭珠郎は障子に手をかけながら今、気がついた。裸足の足が畳を踏めば、壁を背にして畳に足を投げ出し、予想以上に寛いだ様子の犬面が目に入る。こちらを見止めるや、肌が粟立つ夜闇に響く衣擦れのような笑い（要するにとっても怪しく不気味）で、明るい客間の空気を揺らすばかりの犬面の子供は本当に大変、怪しく、不気味。出来れば関わりあいたくないがしかし何故か関わってしまう者共の部類に分けられた。

「……先程、あの兄弟と色々話した」

「ほー……で、どうでした」

「何も知らなかったよ。可哀想なくらい何も知らない子達だ」

「それについての感想は？」

「……可哀想だ、本当に」犬面は無言で先を促した。

「……無知が罪だというのなら、あの子達は知らずうちに確実に罪を犯す。優しい子だからなおさら。その背に負うのには早すぎやしないか？ あれは私とは違う。私にはお祖母様が居た。しかしあの二人は？ あの二人はお祖母様のことも何も知らない。知らぬところで時が進み、知らぬところで巻き込まれ、そうしたら」

「珠女さん、この俺が一つ助言をいたしましょう」

犬面は弄んでいたあやとりを仕舞って居住まいを正し、昭珠郎に向き直った。

「あなたは人の血が、お祖母様の血が流れていらつしゃる。時は妖よりも早く、人よりも緩やかでしょうとも。ですがね、その子供の側から言わせて貰いますとね、大人が思っているより子供も色々考えてるんです。助力が無けりゃ、何とかするし、言っ

たでしょう貴方。

『貴方とは違う』んですよ。あの二人は『兄弟』です。二人居るんです。道が違えば正してくれるだろう人も居る。『余計なお世話』
つていうんですよ、それは」

穴の奥の、黒々とした眼が弓形を描く。釣り上がった犬の赤い口の裏からさらに続いた。

「俺はまだ小娘ですからね。俺よりも長く生きているあの人たちは余計にずっと俺より大人です」

犬面は僅かに俯いた。

仮面が子供の両の手にすべり落ちる。

「それにあの二人は無知じゃないですよ」

その頭には大きい帽子で、見下ろす珠女にはその顔はちらりとも見えなかった。

「貴方が彼らに話してくれちゃったりしちゃいましたからねえ

『筋書き』に無い事をまーあ色々と」

愚痴るように出た言葉に、雪女は小さくなった。

薄墨の黒子

「僕、あっちの店で話聞いてくるね」

エリカはその背を見送った。隣に立つ晴光も、それをぼおつと見送る。

「晴光」

「・・・ん？何」

「言いたいことあんならハッキリ言ってみなさい」

（子供っぽいんだけど）

寂しいなあ、とは口には絶対に出さない。

こんな時、距離を感じるのは、やっぱり二人と年齢が違うからだからだろうか？

性別が違うから？

それとも『本』だから

（わからない）

二年前、自分はもうだっただろうか。

（・・・わからない）

生まれてからずっと、自分は『本』だ。

（・・・わかんないなあ）

それ以外に、なったことなんて。

（エリカはエリカ）

（晴光は晴光）

（僕は僕）

「・・・ファンちゃんはファンちゃん」
わかってる。

（寂しい）

口には出さない。

だって、認識してしまうと、

「……………いや、うん、なんていうか」

「珍しいわね。アンタが齒切れが悪いの」

「オレどんなイメージ……………?」

「馬鹿」

あたりまえだろう、というような顔で、エリカは晴光を一瞥した。

「それ以外でも何者でもない馬鹿よ」

「それでさらにキた……………」

サンバイザーを外して頭をかく。

「で? さつさと話さないよ」

「……………う……………ん」

そのまま掻き毟る。ややあつて頭を抱えてその場に座り込み、やがてぼつりと呟くように言った。

「……………オレって、やっぱり異端者、なんだよな」
イレギュラー

「ええそうね。私もそうだわ」

見方によつては、『どの世界にも適合する』という点で、本のニルやファンちゃん達も、ケイリスク兄弟もそうだ。少なくとも自分達の周りには例外は無いと、エリカは思う。

「……………うん」

そこまでで晴光は沈黙した。

何をそこまで悩んでいるのか。しかも、自分には言えないらしい事を。

久しぶりにこんな面倒な事態になったと嘆息する。久しく人間関係のあれこれには遠ざかっていたと思っていたのに。この部隊に配属

されてからか。

（逃げられないものなのかしら）あたりまえでしょ、と失笑する誰かが自分の中にいるのも事実だ。

しばらくして晴光は重い腰を上げ、背を伸ばした。眉を顰めているその顔は、彼には不釣り合いである。

「何か疲れるよなあ・・・」

「・・・そうね」

気付けば出てきたその言葉。重い、とはきつとこういうことを言うのかもしれない。

きつとそれは考えていた以上に

息をついてふと隣を見ると、髪が掛かるほど近くの赤い隈取の眼とぶつかった。

「何言ってんだ若いモンが」

嘲笑を含んだ声で、白い顔は笑った。

薄墨の黒子

咄嗟に大きく後ろに跳んだ。砂埃が舞い、少し咽た。

警戒よりも驚きが勝る。（いつのまにあんなに近くに！）

「おわー猫みたい」

はしゃぐ面の子供の後ろには、晴光が棒立ちになっていた。

「エリカ！」

「っ馬鹿！」

じわじわと状況を認識する。

（目の前には赤い隈取のお面の子供、晴光はあいつに捕まった。能力は――）

「かつ壁が！エリカここに壁があるんだけど！」

ぺたりぺたり。ある一定の場所から見えない壁に、晴光の手の平が阻まれる。

（結界？）

「麗しいお嬢さん。そこで見ててくださいね」
面が笑う。

「ふざけんじゃないわよ」

ニルが居ないので、剣はこの手に無い。出来るのは本当に簡単な魔法、もしくは常備のナイフでの肉弾戦。ナイフ自体は戦闘用ではないが魔法と併用すれば

「ちょッ、バカエリカ！」

「誰が馬鹿ですって！？」

「違う！捕まってるのは」
「」
後ろに引いた肘が阻まれる。

（『見ててくださいね』）

「………そういうこと」

エリカは口の端を吊り上げた。

「さて、とっ」

子供は壁を難なく通り抜けた。「ふう」

「何なんだお前！」

がちり。合わせた歯が鳴る。

「あやル気満々」

「つたりまえだろっ！」

晴光は跳躍した。地面すれすれを滑空するのに近い。

握った拳を引く。

「そんな本も居ないくせにイー」子供はオイデオイデをするように片手をひらひら振って見せる。

「居なくても出来んだよ！」

空気に火花が爆ぜた。

「オレは常時発動型だかな！」

「・・・げ、まじで!？」

慌てた様に頭を下げて一発目を避ける。そのまま足払いをかけてくるが、不発。続けられた二発目は晴光に眼をそらさず、後ろに飛んで避けた。

この間約2秒。

「この子速いし俺肉体派じゃないのに！」

円を描くようにひたすら後ろに飛んで逃げる。

「逃げんな！」

「逃げるわボケエ！あつたま軽いだろオマエ！」

「逃げんなッ！」

米神を晴光の火を帯びる拳が横殴りに狙う。

「ぎゃあ！」弾かれた面が空を飛んだ。

「ハッ、顔が見えたな」

「貴方のその台詞、まるで当て馬の三下みたいだと俺は思うね！」

薄墨の黒子（後書き）

子供のきょうだい。

薄墨の黒子

「あなたは、自分の見ている世界を、どう思いますか」

言い聞かすように区切られて言われた言葉に、晴光は眉をしかめた。

「……どうも思わねえよ」

「……もういいです。もういいですよ」

子供は落ちた面を拾う。頭の後ろに回して着けた。

「大人しくてりゃあいいのになぁ……あーあ」

「……な、何なんだよ」

あらかさまに肩をすくめて見せる子供に、晴光が僅かに肩の力を抜いたのを、それは見逃さない。

「　　つぐ、」

「晴光ッ！」

「はいど真ん中入りイッ！」

二つ折りになってその場で激しく咳き込む晴光に、近づき身を屈める。

「晴光！？晴光、ちょっと出しなさいそのチビ！」

「チビ上等。もうちよいそこで見てなさいよ」

エリカは唇を噛んだ。

（考えなさい、考えるの、大丈夫ダイジョーブ……）

「晴光は頑丈だもの。私が殴っても蹴っても次の日にはけろっとしてるし、」

（ニルはどこまで行ったのよー！）

「見れば見るほどアンタ足蹴にしたいくなるツラしてますねエ！はっはっは」

「ゴホッ……んだよ、てめえ」

「対してあちら。見れば見るほどそっくりで、あの顔であんな顔されると物凄く居た堪れません。俺もう、何か凄く悪い事しちゃった気分になります」

（ 何の話だ ）

流れる汗がキモチ悪い。

上目遣いにその顔を見ると、僅かに口の端をあげて見下げるその顔が見えた。その顔を自分の耳元に寄せ、呟くように囁く。

「もう一度だけ。あなたはこの世界を見て、どう思いますか」

「……どうも思わない」

「この場合、俺は『この大馬鹿者が！』、とでも罵ればいいんでしようかね。それともツンデレ風に『ばかあ！』とでも？」

「うぐ……うつさい」

喉の辺りが酸っぱい。

「……貴方は馬鹿だ」

「んなこと、散々友達に言われてるから知ってたんだよ」

「……大ばか者だよ本当」

「……何で泣きそうになってたんだ」

「まだ貴方は分からない。後悔してから改めたって、遅い時だってあるのに。それがとても、」

「何だよ」

下を向いて袂で顔をぬぐう。墨色の布の色が変わった。

「いいえ、何も？ただの俺からのアドバイスです」
気持ち悪い。

やけに小さい人差し指を立てて言った。

「イレギュラーも登場人物です。貴方はそれを認めなさい。
・・・認めて、早く楽になりなさい」

両頬を手の平で包まれる。

「肝に銘じなさい。我が同胞」

吐きそうなほど、くらくらした。

薄墨の黒子（後書き）

もしかすると、次の更新は遅くなるかもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8700f/>

IRREGULARS（旧2008年試作版）

2010年11月23日00時46分発行